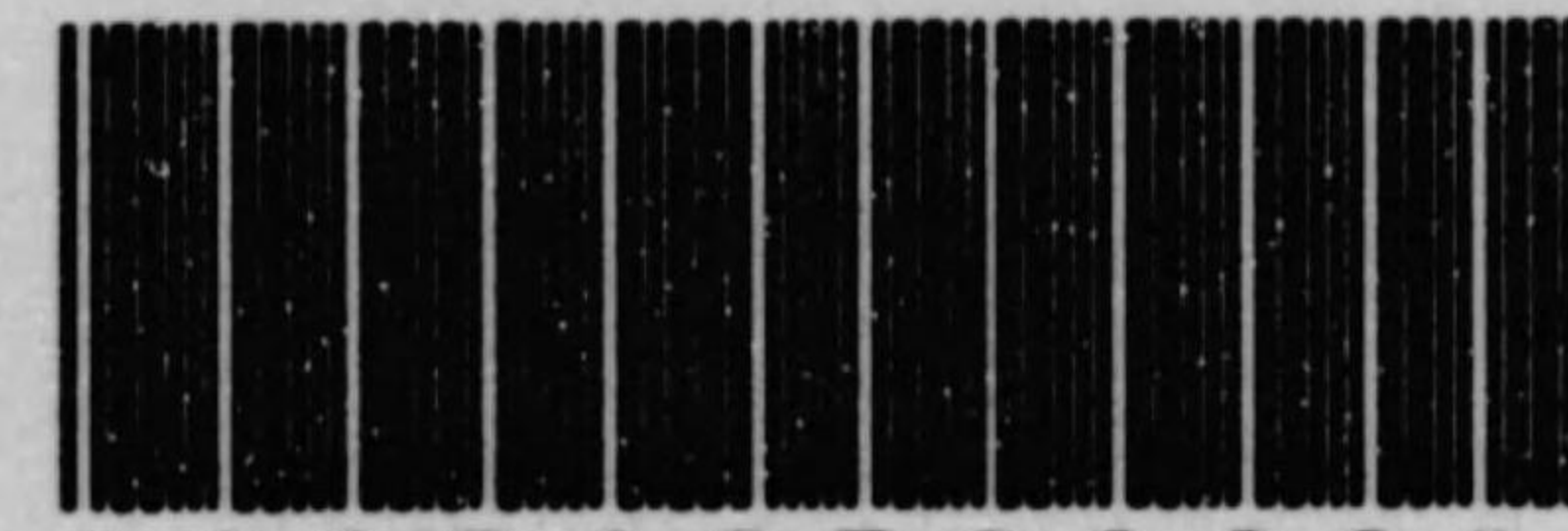


1



0054370000

0054370-000

特200-36

社交と礼儀作法

加藤清司・著

内外出版社

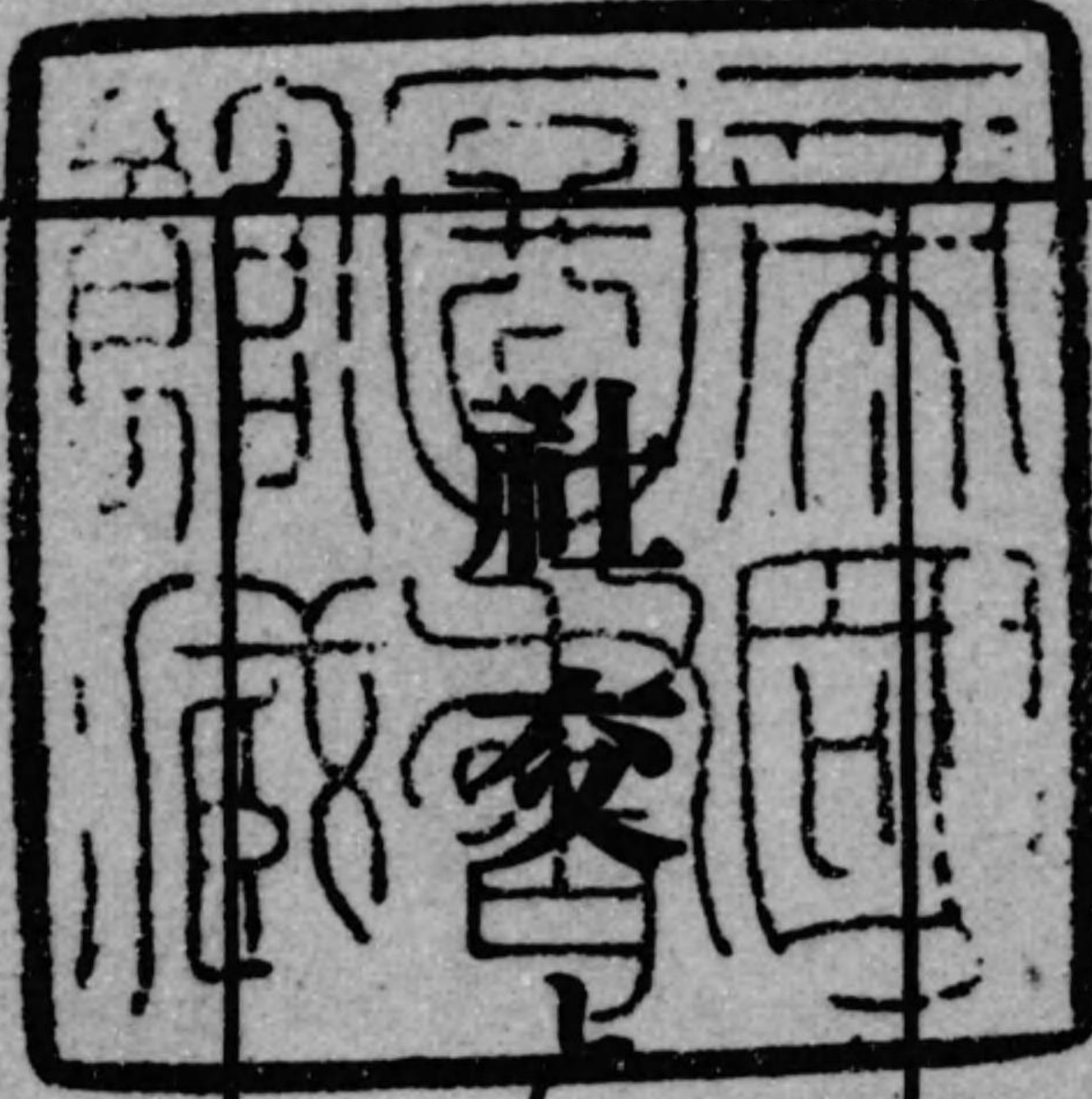
昭和15

AIC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月14日付で文化庁長官の裁定を受け使用するもの



特200
36



文學士 加藤清司 著

禮儀作法

非常時體制版



序

男女七歳にして席を同じうせずといふ教へが、わが國民精神界を支配してゐた時代の日本女性は、自分の夫以外の男性はもとより、同じ女性でも自家の召使の者を除き、他人と顔を見合ふことを成るべく避けて居りました。殊に男性に對しては、普通の挨拶以外には親しく言葉を交はすことさへしないといふ習慣もありましたが、それが武士の家庭になりますと一層嚴重で外出する時は頭巾を被り、他人に顔を見せることを恥としたのであります。

それが現今では個人間の交際は申すまでもなく、婦人の身で國家、社會の第一線に立つて活動し、所謂上流社會ではいろ／＼の社交團體を作り、種々の方面に關係を持つて實際の名の下に、殆んど家庭は顧みないといつた人々も少くないのであります。これを武士階級以上の家庭の婦女が深窓の下にあつて、自分の家

以外には外出といふことは殆んど禁じられてゐた時代と比べるとならば、實に隔世の感があり、且つまた全然逆な社會相といふの外はないのであります。

人間が集まつて社會を形成してゐる以上、人と人との間に交際のあるのは最も自然的な現象であり、また之れは大切な事でもありませんから、男性にしても女性にしても交際そのものは決して悪いといふものではありませんが、必要以上の交際遊戯はどうかと思はれます。

例へば主婦として一家の中心となるべき者が、自分の牙城であるべき家庭を留守勝ちにして、交際の名の下に外ばかり飛び歩くとか、修學中の若き女性が、交際のために學業を忘れて、諸方を浮れ歩いたりするなどは極端な例でありませうが、近頃はまた非常時局に處して國防婦人や愛國婦人の人々が、軍國のために奔走する銃後の努力は認められながらも、餘りに家庭を留守勝ちにするために、思はぬ争議を起したり、批難さ

れたりする事實に見ましても、家庭を度外した必要以上の交際をよくないことが判りませうが、それと共にまた下手な交際も害こそあれ、何んの益もないことを考へなくてはなりません。他人を訪問した場合、何回も聲をかけさせた上、やうく取次の女中が現はれ、女中先に立つ客の前に頭を下げながらも、早く歸れがしに陣子に手を掛けて應對するやうな動作をされては誰れにしたところで好い感じのするものではありません。女中にさうした動作をさせる主人の人格も思はれて、情ない感さへ湧いて來るのであります。

これなどはホンの一例に過ぎませんが、世の中には知らず識らずの間に、交際上もつと間違つたことを平氣でやつてゐる人が少なくなく、そのため交際せんとして却つて交際を破つてゐる事例が非常に多いのであります。ところで之れは何んの罪でせうかと申しますともとより人格が低いために、相當の教育があつても、自然に非禮な言葉や動作となつて現はれるものもあり

ませうが、その多くは社交についての知識のないが爲めに起るのであります。

かういふ事を考へますとき私共は、社會の一員として世に立つ上に、男も女も社交法の一通りは心得て置かねばならぬ必要を痛感するのであります。然かも社會の進歩と共に交際の範圍は日を追ふて次第に廣まつて行き、またその時代々々に適應した新しい作法や禮儀も生れて來るのであります。若しそれを知らない人の中で恥をかいたり、人格を疑はれたりして、自然と社交界の國外に置かれ、延いては社會の落伍者となつて立身出世の妨げともなりますから、信用あり權威ある書物について、是非とも社交一般の常識を養ひ、自己の向上を計られんことを、切におすすめる次第であります。

昭和十五年新春

著者識

目次

第一編 和洋宴會の心得

緒言

第一章 和洋共通の作法

第一節 宴會時間の心得

時間の遵守

開宴時間

第二節 服裝其他の心得

服裝

着席

態度と姿勢

第三節 料理に就ての心得

喰べ方

好まざる料理

料理の批評

飲酒の心得

辭去の作法

第二章 和食の心得

第一節 席順

第二節 配膳の作法

挿繪 膳の持ち方

第三節 盃の獻酬

第四節 飯の喰べ方

第五節 箸の扱ひ方

挿繪 箸の置き方

第六節 汁の吸ひ方

挿繪 お膳のすゝめ方

第七節 膳のすゝめ方とひき方

第八節 給仕の仕方

飯

汁

取肴

引肴

焼物

鉢盛

挿繪 御飯の盛り方

第九節 酌の仕方

鉢子

徳利

挿繪 酒の注ぎ方

第一〇節 茶と菓子

挿繪 お菓子のすゝめ方

第三章 洋式宴會の心得

第一節 晩餐會

第二節 招待の作法

第三節 宴會の服装……………二一六

第四節 席順の心得……………二一六

第五節 清席に就ての心得……………二一七

挿繪 食卓につき方……………二一七

第六節 配食の受け方……………二一七

第七節 ナブキンの取扱ひ方……………二一八

挿繪 ナブキンのかけ方……………二一八

第八節 ナイフとフォークの使ひ方……………二一九

挿繪 ナイフとフォークの使ひ方……………二一九

第九節 スプーンの取扱ひ方……………二二一

挿繪 スプーンの持ち方……………二二一

第一〇節 パンの喰べ方……………二二三

挿繪 パンの喰べ方……………二二三

第一一節 各種料理の喰べ方……………二二三

スープ 前菜又は小菜……………二二三

魚類 主菜……………二二三

野菜 蒸焼肉……………二二三

生菜 間食物と菓子類……………二二三

粥と茹玉子其他の注意……………二二三

挿繪 スプーンの喰べ方 前菜の喰べ方……………二二三

魚料理の喰べ方……………二二三

第一二節 洋酒に就ての心得……………二二〇

第一三節 乾盃の仕方……………二二〇

第一四節 清涼飲料の飲み方……………二二〇

挿繪 清涼飲料の頂き方……………二二〇

第一五節 ソースと薬味の常識……………二二〇

第一六節 各種果物の喰べ方……………二二〇

林檎 梨……………二二〇

蜜柑類 瓜類……………二二〇

柿 苺……………二二〇

バナナ 葡萄と櫻桃……………二二〇

果物の砂糖煮 胡桃類……………二二〇

挿繪 果物の喰べ方……………二二〇

第一七節 指洗鉢と爪楊枝の心得……………二二〇

指洗鉢 爪楊枝……………二二〇

挿繪 フィンガーボールの使ひ方……………二二〇

第一八節 紅茶と珈琲の飲み方……………二二〇

挿繪 紅茶々碗の据え方……………二二〇

第一九節 給仕を呼ぶ心得……………二二〇

挿繪 給仕人の呼び方……………二二〇

第二〇節 挿花に就ての心得……………二二〇

第二一節 中座と退席の作法……………二二〇

第二二節 答禮の仕方……………二二〇

第二三節 朝餐會と午餐會……………二二〇

朝餐會 午餐會……………二二〇

第二四節 夜會……………二二一

第二五節 アフターメーンとアトホーム……………二二三

第二六節 茶話會……………二二三

第二七節 園遊會……………二二三

第二八節 結婚披露會……………二二三

第二九節 奏樂及び餘興……………二二三

第三〇節 喫煙に就ての心得……………二二三

第三一節 洋式宴席の諸心得……………二二三

第四章 茶代と心附……………二二七

茶代 心附……………二二七

第四節 皮膚の美化……………二二〇

第五節 入浴……………二二一

浴湯温度 入湯時間……………二二一

浴湯の選擇 洗料……………二二一

手拭 浴後……………二二一

第六節 洗面……………二二三

第七節 素顔美……………二二三

第八節 整形美容……………二二三

第二章 化粧の仕方……………二二三

第一節 白粉の塗り方……………二二三

第二節 口紅と白粉……………二二三

第三節 雀斑を隠す化粧……………二二三

第四節 荒れた顔の化粧……………二二三

第五節 春の化粧……………二二三

第六節 夏の化粧……………二二三

第七節 海水浴の化粧……………二二三

第八節 秋の化粧……………二二三

第九節 頬紅……………二二三

第一〇節 濃化粧……………二二三

第一一節 眉墨……………二二三

第二編 美容の仕方

第一章 美容法……………二二九

第一節 美の觀念の變遷……………二二九

第二節 肉體の美化……………二二九

第三節 食物と美容……………二二九

第二章 毛髪の手入……………六二

第一節 毛髪の手入……………六二

第二節 正装用の髪と髪飾……………六三

第三節 髪直し……………六三

第四節 脱毛の豫防……………六三

第五節 潮水に毛髪を浸つた場合……………六四

第六節 夏の髪の手入……………六四

第三章 毛髪の手入……………六二

第一節 アイシャード……………六七

第二節 顔首の黒くならぬ化粧……………六七

第三節 顔の荒れぬ豫防……………六七

第四節 小皺の防ぎ方……………六七

第五節 クリームとベルツ水……………六八

第六節 面皰と雀斑……………六八

第七節 マツチーシの仕方……………六八

第八節 毛皮を纏つた時の化粧……………六九

第九節 不幸時の服装と化粧……………六九

第一〇節 化粧品の見分け方……………六九

第一一節 白粉の良否の見分け方……………六九

第一二節 石鹸の見分け方と使ひ方……………六九

第七節 涼しい束髪……………六四

第八節 病人の毛髪……………六四

第四章 社交ダンス……………六四

ダンスの種類……………スロー・トロット

クイック・ステップ……………ブルース

ウォルツ……………タンゴ

ルンバ……………

社交ダンスの踊り方……………

第一章 服装と禮節……………六七

第一節 我が國現代の服飾……………六七

第二節 習慣と作法……………六七

第三節 和洋共通の心得……………六七

第二章 和服の着方……………六八

第一節 習慣との差別心得……………六八

第二節 時代に順應の作法……………六八

第三節 和服の禮装……………六八

男子の禮装…………… 婦人の禮装

第一章 洋服の着方……………七四

第一節 禮装の區別……………七四

第二節 燕尾服……………七五

第三節 フロック・コート……………七五

第四節 モーニング・コート……………七五

第五節 モーニングの着方……………七五

第六節 タキシード・コート……………七六

第七節 背廣服……………七六

第八節 フレッシング・ガウン……………七六

第二章 男子の禮装…………… 婦人の禮装

第一節 袴物と袴に就て……………七一

第二節 浴衣の今昔……………七一

第三節 帯の變遷……………七二

第四節 袴の心得……………七二

第五節 帽子……………七三

第六節 履物……………七三

第七節 扇子……………七三

第八節 扇の使ひ方……………七四

第八章 チョウキ……………七七

第九章 外 袴……………七八

第一〇節 ワイシャツ……………七八

第一一節 カラー……………七八

第一二節 帽子……………七九

第一三節 ネグタイ……………八二

第一四節 釦のかけ方……………八二

第一五節 シヤツ及びズボン……………八二

第一六節 靴と靴下……………八二

第一七節 手 袋……………八三

第一八節 ハンカチーフ……………八三

第一九節 男子の禮服……………八四

第二〇節 婦人の洋装……………八五

第四章 装身具……………八八

第一節 懐中時計……………八八

第二節 指 輪……………八八

第三節 指輪の正しいはめ方……………八八

第五章 衣服の着方……………九一

第五編 日用手紙文

第一章 手紙文作法

- 第一節 書翰文一般の心得…………… 一三
- 第二節 情は女子書翰文の生命線…………… 一三
- 第三節 ゆたかな趣味を盛り込むこと…………… 一四
- 第四節 折々の風物を活かすこと…………… 一五
- 第五節 候文について…………… 一六
- 第六節 口語文について…………… 一七
- 第七節 女子の書翰文について…………… 一八
- 第八節 文章上手と手紙上手とは別…………… 一九
- 第九節 情が第一…………… 二〇

第二章 文例

- 第一節 祝賀の手紙…………… 二一
- 一 新年の文…………… 二一
- 二 婚姻を祝ふ…………… 二二
- 三 出産を祝ふ…………… 二三
- 四 入学を祝ふ…………… 二四
- 五 卒業を祝ふ…………… 二五

- 六 就職を祝ふ…………… 二五
- 七 入營を祝ふ…………… 二六
- 八 新築を祝ふ…………… 二七
- 九 病氣全快を祝ふ…………… 二八
- 一〇 凱旋を祝ふ…………… 二九
- 一一 入選を祝ふ…………… 三〇
- 第二節 見舞の手紙…………… 三一
- 一 寒中見舞…………… 三一
- 二 餘寒見舞…………… 三二
- 三 暑中見舞…………… 三三
- 四 残暑見舞…………… 三四
- 五 風水害を見舞ふ…………… 三五
- 六 類焼見舞…………… 三六
- 七 近火見舞…………… 三七
- 八 親の病氣を見舞ふ…………… 三八
- 九 産後の見舞…………… 三九
- 一〇 怪我の見舞…………… 四〇
- 一一 陣中見舞…………… 四一
- 一二 落第の友を見舞ふ…………… 四二
- 第三節 招待の手紙…………… 四三
- 一 歌留多會に招く…………… 四四

- 二 雛の日の晩餐會に招く…………… 一〇〇
- 三 小集に招く…………… 一〇一
- 四 新婚の夫婦を招く…………… 一〇二
- 五 結婚記念日に招く…………… 一〇三
- 六 誕生日に招く…………… 一〇四
- 七 親月に招く…………… 一〇五
- 八 祭禮に招く…………… 一〇六
- 九 劇場に招く…………… 一〇七
- 一〇 クリスマスに招く…………… 一〇八
- 一一 法事に招く…………… 一〇九
- 一二 遠征に招く…………… 一一〇
- 第四節 贈物の手紙…………… 一一一
- 一 土産物を贈る…………… 一一一
- 二 結婚の祝品を贈る…………… 一一二
- 三 到着物を贈る…………… 一一三
- 四 新茶に添へて…………… 一一四
- 五 秋意を贈る…………… 一一五
- 六 寫眞を贈る…………… 一一六
- 七 招待券を贈る…………… 一一七
- 八 中元に添へて…………… 一一八
- 九 歳暮の品を贈る…………… 一一九

- 一〇 餞別を贈る…………… 一二〇
- 第五節 依頼の手紙…………… 一二一
- 一 手傳を頼む…………… 一二一
- 二 女中の世話を頼む…………… 一二二
- 三 留守を頼む…………… 一二三
- 四 保證を頼む…………… 一二四
- 五 見習奉公の周旋を頼む…………… 一二五
- 六 看護婦の周旋を頼む…………… 一二六
- 七 買物を頼む…………… 一二七
- 八 婿の周旋を頼む…………… 一二八
- 九 貸家の周旋を頼む…………… 一二九
- 一〇 書物の借用を頼む…………… 一三〇
- 一一 返金の延期を乞ふ…………… 一三一
- 第六節 お禮の手紙…………… 一三二
- 一 借物を返すお禮…………… 一三二
- 二 招待を受けし禮…………… 一三三
- 三 友達からの贈物を謝す…………… 一三四
- 四 餞別を受けし禮…………… 一三五
- 五 人に物を頼みし禮…………… 一三六
- 六 時候見舞の禮…………… 一三七
- 七 旅行中世話になつた禮…………… 一三八

八 病氣見舞の禮……………一五三

九 滞在中の禮……………一五四

一〇 應接の勢を謝す……………一五四

一一 恩師への禮……………一五五

一二 舊主人への禮……………一五五

一三 見送りを謝す……………一五五

第七節 問合(照會)の手紙……………一五六

一 花の見頃を問合す……………一五六

二 訪問について先方の都合を問合す……………一五六

三 ビクニツクにつき打合す……………一五六

四 送別會の日取を問合す……………一五六

五 雑談について問合す……………一五七

六 荷物不着につき問合す……………一五七

七 荷物の着否を問合す……………一五七

八 料理法につき問合す……………一五八

九 病狀を問合す……………一五八

第八節 通知の手紙……………一五八

一 嫁ぐことを友に知らす……………一五八

二 出産の通知……………一五九

三 入學の通知……………一五九

四 卒業の通知……………一五九

五 就職を知らす……………一六〇

六 歸宅を知らす……………一六〇

七 安着を知らす……………一六〇

八 農況を知らす……………一六一

九 編物の仕上りを知らす……………一六一

一〇 品物到着の通知……………一六二

一 轉居の通知……………一六三

一二 病氣の通知……………一六三

一三 病氣の全快を知らす……………一六三

第九節 誘引の手紙……………一六四

一 花見に郷里の父を誘ふ……………一六四

二 田舎のお祭に姉を誘ふ……………一六四

三 ビクニツクに誘ふ……………一六四

四 避暑に誘ふ……………一六四

五 納涼に誘ふ……………一六五

六 子供の運動會に誘ふ……………一六五

七 茸狩に誘ふ……………一六五

八 觀劇に誘ふ……………一六五

九 同窓會に誘ふ……………一六五

一〇 講座の傍聴に誘ふ……………一六五

第一〇節 お断りの手紙……………一六六

一 違約を断る……………一六六

二 借りた本を返すにつき……………一六六

三 金策の依頼を断る……………一六七

四 切符の引受を断る……………一六七

五 招待を断る……………一六八

六 加入を断る……………一六八

七 來訪を断る……………一六八

八 出席を断る……………一六八

九 夫に代り就職の周旋を断る……………一六九

一〇 寄附金を断る……………一六九

一一 不在のお詫び……………一七〇

一二 粗忽のお詫び……………一七〇

一三 紹介を断る……………一七一

第一一節 催促の手紙……………一七一

一 義談の催促……………一七一

二 註文品の催促……………一七一

三 返金の催促……………一七二

四 仕立物の催促……………一七二

五 女中に歸來を促す……………一七二

第一二節 紹介の手紙……………一七三

一 醫師を紹介す……………一七三

二 知人を紹介す……………一七三

三 子守を紹介す……………一七三

四 履歴書同封にて友を推薦す……………一七四

— 終 —

社交と禮儀作法

緒言

動物の社會には全然他と交際をしないものがあつて、蝸牛は己が殻の中に、龜は甲羅の中にもぐり込んでゐても生活して行くことが出来るのであるが、人類の社會ではさういふ譯にはいかぬ。

人が二人寄れば、必ずこゝに交際といふ一つの形式が生れる。家と家、村と村、國家と國家との間においても同様であつて、その目的とするところは、お互ひの間柄を圓滿にし、平和にして愉快な生活を営まんがためである。

大體、文化の進んだ人種ほど平和を愛好する程度が高いから従つて交際も頻繁に且つ圓滿に行はれるが、野蠻人の社會ではその反對に、自己の慾望や意思は腕づくで押し通すといふ風が行はれるから、交際などいふことは、餘り考へられないのである。

る。

だから自分の部落の若者が、他部落の若い娘と結婚することを許さなかつたり、甲の部落では、乙や丙の部落の人の入り來ることを絶対に禁じ、若しこの禁を犯して侵入したる最後、半殺しのやうな目に合せたりするのである。これでは犬や猫などの社會と何等變りはない。

我國でも群雄割據時代には、互ひに隣接する大名と大名とは、所謂犬猿も音ならざる間柄にあり、用心堅固に自領を鞏固し、他領との交際はおろか、他の領内の者が自領内を通行することさへ許さなかつたのであるが、それでも政略のためには、往々にして大名と大名との間に婚姻が結ばれたりしたもので、これから見ても人類は飽くまで、社交的に出來てゐるのである。

今では門戸は總ての方向にわたつて開放されて居るから、國と國の間も、村と村、人と人との間も、緊密な友好關係を以て結ばれて居り、日支の間には戰爭さへ行はれてゐるに拘らず、その國民と國民とは、矢張り互ひに交際をしてゐる状態である。

況して國內における個人間の社交が、日と共に多角的になつ

て行くのに何んの不思議もないが、一口に交際といつてもこれにも上手と下手があつて、若しその方法を誤ると、こゝに社交本来の目的とは全然反對の結果が現はれるのである。

例へば人を喜ばさんが爲めに贈つた品物が、禮儀にかなはなかつたばかりに、先方の感情を害したとしても、それをも交際といひ得るのであるか。然かもこの種の失敗は、事實において決して少なくないのである。

それを思ふと社交なるものは、充分研究した上でなくては危険であるが、中でも難かしいのは冠婚葬祭その他、改まつた事由のために他家を訪問する場合の禮儀作法と、その挨拶の仕方である。

平素においてさへ、相手の感情を害さないやう、且つは自分の品位を傷けないやう、適當な言葉を用ひて人と談話するといふことは、なかく難かしいものであつて、能辨家はその能辨なるが故に失敗し、無言居士はその無言なるが故に敬遠されるなど、圓滿にして愉快な交渉は行ひがたいものであるが、それが改まつた場合となると、一層面倒なことになる。

忌み言葉が何んであるかさへ心得ないで、結婚の祝詞を述べると、他家を訪問する者があつたとしたら、その結果はどんなことになるだらう、考へて見るだけでも薄氷を踏む心地がする。悔みに行つて殊更ら哀悼の意を表せんと、心にもない哀惜の言葉をくどくどと並べたりしたら、これを見聞きする人々は果してどんな感じを起すであらう。

是等は何れも社交の破壊者であり、相手の感情を害するばかりか、延ては自分の品位を落し、遂には人から相手にされなくなるのは、幾多の事實が如實にこれを示して居る。

過ぎたるは及ばざるが如しといふが、及ばざるもまた愚のちであつて、何れも圓滿なる交際を期待出来ない所以であるが、さらばといつて初めから交際といふことを念頭に置かないやうでは、自ら人間としての資格を抛棄するものである。そこで改まつた場合の訪問の仕方と、挨拶の述べ方を本書について研究し、人類としての幸福を招来されんことを希望して已まぬのである。

第一編 和洋宴會の心得

第一章 和洋共通の作法

作法といふ言葉に含められるものの中で、最も重要視されるものが食卓作法であり、又最も間違ひ易いものもこの作法である。それで本章においては日本、西洋、支那の各々について説明するが、然らばといつて日常家庭における食事の作法は、一々煩はしく講述する必要はない。社交上是非心得て置かねばならぬ宴會常道ともいふべきものにつき、一通りの作法を記述するに止めるが、現代は公私の宴會に、和食よりも洋食を用ふることが流行してゐるから、主としてこの方に重きを置いて説明することにする。

第一節 宴會時間の心得

時間の遵守 宴會に招待を受けた時は、決して指定された時間に遅れてはならぬ。一體日本人の通弊として葬式時間、宴會時間など、勝手な名稱をつけ、態と氣を利かした積りで時間に遅れて行く悪い習慣があるが、歐米では遅刻することを、

第一章 和洋共通の作法

非常な失禮であり恥辱であるとしてゐる。

すべて宴會などの場合は、先方に相應の支度準備があるから、時間に遅れるのは先方に對する失禮のみか、他の來客全部に對してもまた甚だ迷惑を及ぼすのである。

宴會に招待されたら、指定された時間より、約十分前に參集するのが禮である。尤も餘り早くから押しかけるのも、まだ準備の整はぬ先方に對し、迷惑を與へるものと心得ねばならぬ。

以上は被招待者側であるが、招待者側は來客以上に時間を厳重に履行しなくては、客に對してこの上もない失禮になるから、少くも主人は定刻二十分以前から、待受けるやう準備を整へねばならぬのである。

開宴時間 開宴の時間は各國によつて習慣に多少の相違があり英國では指定時間より早からず、定刻を過ぐる十五分以内に參集し、二十分過ぐれば遅刻者などに構はず宴を開き、佛國では定刻十五分前から參集し、定刻には必ず開宴する。其他の歐米諸國では、この間を折衷して宴を開くのが通例になつてゐる。然るに日本の和食宴會は、定刻に參集した者は火鉢、煙草盆と祝め合ふこと一時間近く、飲みたくもない茶を

何杯か飲んで後、漸やく客の顔が出揃ふといふ體である。以上を參照して日本式の実會は問題外とし、洋式の実會ならば、定刻二十分過には遅刻者に顧慮せず、開宴するのが適當であらう。

第二節 服装其他の心得

實會に列するには先づ容儀を整へ、禮儀を著すのが和洋通じての禮である。日本式では服装を指定することは少ないが、洋式にあつては招待状に服装を指定するのが例で特に略式にての附記のない以上は、必ず禮服を着なければならぬ。また略服にての附記があつた場合にでも、客は主人より略装してはならぬのが原則である。例へば主人は背廣服で出る場合でも、主人が相當地位のある人ならば、客は通常服以上の服装で出なければならぬ。即ち主人の地位を斟酌してマキシードを着るとか、モーニングを着用するとか、背廣でも黒の三つ揃ひを着用するとかするのが禮で、詰襟などで出席するのは非常な失禮である。従つて主人もまた招待状へ、特に略式と附記して置きながら、自分が燕尾服などを着用するのは、客に對して失禮であることも忘れてはならぬ。

禮 如何なる場合でも、主人主婦が指定した時に着席しないのは、先方及び他の客に對して失禮である。また主人主婦が指定した席へは、直ちに會禮して着くべく、この場合の禮儀は却つて無作法であり、且つ他の客に迷惑を及ぼす。

日本の習慣として、互ひに席を譲り合ひ、爲めにいつまでも席が定まらぬやうな場合がよくあるが、席を定めるのは主人主婦の當然の權能で、上座に招ずるのは招ずるだけの理由があるから、主人主婦の厚意を受くるのが、妻應に臨む主要な目的である以上、主人主婦の厚意に背き互ひに席を譲り合ふ如き禮を失するだけのことで全く意味のないことである。禮度と妻應 如何なる宴席に臨んだ場合にでも、姿勢は正しく保つべく腕を張つたり、足を組んだり、投げ出したたり、貧乏揃ひをしたりするのは和洋を通じての禁物である。禮度は飽くまで愉快に、溫和閑雅の品格を保ち、大聲を發し、或は隣席の人と密々囁いたりするのは東西共通の無作法と心得ねばならぬ。この外鼻をかんだり、嘔つたり、嘔氣、嘔、欠伸などをするのも失禮で、萬一その必要があつた場合はそつと襟を向いて手布又は紙をあてゝなすべきである。食事中前後左右を見廻したり、他人の喰べ方や、料理に注目するのは無

作法を通り越した非禮である。また自己一人のときならば格別、他人と席を列する宴席で新聞、雜誌、書翰などを讀むのは絕對になすまじきことである。

自分の欲するものが手の届かぬ處にあつたら、給仕人に命じ、若し給仕人が手近にゐなかつたら、附近の同席の人に頼んで取つてもらふのが禮で、勝手に座席を離れたり、他人の隣部や料理等の上から、猿轡を延ばして取るなどは禁物である。食事の際に腕を張るのも、多人數集つた宴席では思ひがけない疎忽をするばかりか恰好がよくない。又ポケットに手を入れるのは、和服の儀手と同様非常な無作法である。

第三節 料理に就ての心得

喰べ方 セカ／＼と食ふ如き喰ひ方、大口を開けて頬張る如き喰ひ方、食するに音を立てたり、食器をガチャ／＼させたりのするものも、東西共通の無作法である。

好まざる料理 宴會の際に出された料理は、悉く食するのが主人の厚意に酬ひる賞賛の表示で、主人としては最も喜ぶところであるが、嗜好は人によつて同様でなく、又その量も體質などによつて差異があるから、自分の好まない料理を出され

た場合は、無理に食ひ盡さなくても差支なく、この場合和式にあつては初めから箸をつけずに置くべきである。

洋式では選ばれた料理を、簡單に謝絶すればよいが、此際嫌ひだからとか、もう喰べられないとかの理由を述べるとは却つて失禮とされてゐる。

料理の批評 出された料理を彼是と批評することは、徒らに自己の野卑な人格を暴露するものであり、主人側の厚意に對しても甚しい侮辱を加へるものであるが、特別に珍らしい料理は、これを賞美して差支はない。

飲酒の心得 酒は切り上げ時が肝腎である。洋式宴會では整然と順序が進んで行くが、日本式の実會では、盃の離し工合によつて、宴の順序が非常に亂雑になり、主人側及び他の客にも少からぬ迷惑をかけるものであるから、適度にして切上げるやう注意せねばならぬ。

酒を飲ませて酔ふなといふのは無理であるが、程よく呑み愉快に酔ひ、主人側の款待を快よく受くべきである。然かし酒は度を過し易いもので、程よく愉快に酔ふといふのが難しく、動もすると飲み過し、席も次第に亂れてくる。亂になつては飲酒も、百害ありて一利なく、最早禮儀作法の問題では

ない。
洋式の宴会だと謝絶の方法も簡単で、給仕が注ぎに来たと
き軽く手を挙げるとか、左手の食指を盃の縁に當て、不
要の旨を合圖すれば済むが、日本式の宴会ではさう簡単に行
かない。酒の飲めない表示法として、盃を伏せておいても
それを取り上げて突滅してくる。當人に取つては迷惑千萬な
話で、折角の厚意も悪意となつてしまふ。下戸が酒を謝絶し
たならば、二度と勧めない作法を作ることは、日本式の宴会
で最も必要な改善である。

即去の作法 食事の終るのを待つて、直ちに辭去するのは餘り
に現金過ぎた非禮である。主客の食事が終つたなら、座談又
は喫煙し、然る後適當の時間を見計つて辭去すべきである。
總て宴席では、目下の者にも懇切丁寧を旨として應接する
のが、紳士として奥床しい人格の輝きである。招かれた先の
使用人に對して、横柄な態度で臨むやうなことがあつては、
威容を示さんとして却つて威容を傷けるものである。

第二章 和食の心得

第一節 席 順

正座、上座は床の正面のことで、床前が第一位、連機のある
方が第二位、床脇が第三位、床脇の並びを第四位とする。然か
し男女同人數又はこれに近い場合は、床の間の左を男の座席順
右を女の座席順とする場合もある。床の間のない室ならば入口
より遠い方、或は入口の正面に在るところを上位とするのが普
通である。

着席については、その順序を主人側より指定されたらば軽く
會釋して遠慮なく座に着くべきである。但し日本の習慣として
男子は女子の上位につく不文律があるから、主人側の懸望で婦
人が上座に招ぜられたときは、一應これを辭退するのも作法で
あるが、再應これを強ひられたときは、主人及び他の客に會釋
して上座に着くべきである。遠慮を重ねてみると、後からの客
も席に着くことが出来なくなり、お互ひの迷惑であるから、主
人側に指定されたら成るべく早く着席すべきであるが、普通の
順序は歐米と反對で男は先、婦人は後に席につき、主人は最下
位につくのが作法である。

第二節 配膳の作法

席にも本膳、二の膳、三の膳等があつて各々その形を異にし

てゐる。本膳は大きく、二の膳三の膳は稍や小さい。膳の足に
も猫足、銀杏足、胡桃足などの種類がある。八寸膳は左右二枚
足でそれに窓があいてゐる。會席膳は方形で足なく普通方尺二
寸、黒、瀟、朱などの漆塗が通例である。吸物膳は會席膳より
も稍や小さく、これには普通低い足がついてゐる。

盆は古名を「ひらか」といひ、土器中の扁つたもの、總稱
であつたが、現在は専ら木製が用ひられ漆塗と生地とがある。
「つかかさね」は昔貴人に食物を供するとき用ひたもので、蓋に
は窓があいてゐる。三方とはこの窓があいたもの、四方又は小
四方は窓が四方にあいてゐるものを言ふやうであるが、現今で



膳の持ち方

は神前または
儀式張つたと
きや貴人に供
する以外には
餘り用ひられ
ない。
膳の出し方
に正式と略式
とがあるが、

現時は多く略式に従つてゐる。

正式の配膳ならば先づ本膳から出し、これが出揃つてから主
人は中央の下座に座し、來客一同に挨拶して退き、次に二の膳
三の膳が出る順である。膳を撤するには靴を終へて全部が漸く
箸を置いた頃、上席の膳から撤し始め、總て撤き終つた時主人
は再び出て挨拶をなし、食後の茶菓を饗してから、客室又は餘
興場に導くのである。

今日普通に行はれてゐる略式では、先づ吸物膳に刺身取肴な
どを添へて出し、多少儀式張つて銚子、盃を出すときでも、そ
れが一とわたり済めば直ちに猪口と燗酒に替へる。かくて酒が
やゝ甜となる頃を見計らひ、主人が末座で挨拶し、二の膳、
三の膳を略する場合には、吸物膳に飯、汁、一二の取肴、香の
物などを出すのである。

第三節 盃の献酬

昔は式三献といつて銚子、土器で献酬の作法があり、さもな
いときには本膳、二の膳などを出してから、中酒の禮が行はれ
其後吸物を出し、肴が添へられる例であつたが、近來は冠婚の
儀式以外に用ひられない。

盃の献酬はまづ杯を三方に載せて出されたとき一禮し、
 両手で三方を少し引き寄せ、同じく両の手で杯を取り上げて
 から、左の手先を疊につき、右手で酌を受けるのが本式の作法
 であり、また両手で受ける流儀もある。受けた酒は強ひて呑む
 必要なく、一寸杯を載せて唇につけ、杯中の酒(へした)を
 別の杯(へしたみ)にあける。もし「したみ」が添へてないとき
 は、吸物椀の蓋を取つてこれにあけても差支ない。さうして更
 に両手で杯を持つて再び唇につけ、そのつけたところを右
 手の拇指の腹で、右の方へ二度拭いて三方に載せ、拇指は儀
 紙を出して拭き、三方を押進めて目隠する。この杯を拭くと
 き、拇指でなく儀紙で流派もある。この場合杯洗を出す
 のは本式でないが、もし出されたならば杯を杯洗の水で洗ひ
 儀紙で拭くべきである。元來正式のときは樽は敷かぬもので
 あるから、酌人が主人または主婦であつたならば、客は當然こ
 れをばづさねばならない。
 近來は盃の献酬が亂雑になり、一々以上の作法を守るもの
 も少なく、また式に従つて三方を出す筈もないが、一應は心得
 て置いて然るべきである。

第四節 飯の喰べ方

飯椀は両手で執つて左の掌に載せ、右手に箸の中央部を持
 ち、手の内側を仰向けて膝の上に置き、適宜にこれを持ち直し
 左手の拇指を椀の縁にかけ、他の四指を底に當て、持ち上げ、
 二三箸食したならば、右手に箸を持つたまゝ両手で椀を膝に
 置き、次いで箸も下に置いて両手で汁椀を取る。さうして箸を
 置いたまゝで汁を吸ひ、次に箸を取つて汁の實を食し、また箸
 を下して汁を吸ふ。尤も箸で實を押へて汁を吸つても差支はな
 い。次に飯に戻り、また汁に移るのであるが、二度目からは汁
 の實を先に食して汁を後で吸ふのである。次に飯に戻つて今度
 は本膳の膳に移る。膳は膳に置いたまゝ、左手を一寸疊につい
 てこれを挟み、皿の縁の横で箸を切つて食するのが法である。
 次にまた飯に戻り、その次は蓋に移る。蓋は汁のあるものなら
 ば、取り上げて實を食し汁を吸ひ、汁のないものならば、膳に
 置いたまゝで喰ふ。次に飯、次に二の汁の順序となるが、これ
 は蓋を右手に取り上げ、左手を添へあしらつて右側に置き、椀
 を左手に取つて實を先に汁を後に吸ふ。また飯に戻り、更に平
 に移る。平の蓋は本膳の汁の作法にならひ、蓋を右手で取り上

げ、左手に移して食し、汁のあるものならば箸を置いて吸ふ。
 次に飯、次に三の汁の蓋を左手で取つて左側に置き、二の汁の
 要領で實を食し汁を吸ふ。次に飯、次に刺身を箸で醬油皿に入
 れ取り上げて食する。次に飯、次に猪口を右手に取つて左手に
 移し、箸を取つて喰ふ。以上一巡終つたならば、その後はどん
 な順序で食しても違法でないが、移り箸は絶対につしまねば
 ならぬ。食し終つたならば湯を受ける。さうして最後の香の物
 で箸を納めるのであるが、箸は儀紙で拭いて箸臺に置く。箸
 臺のないときは膳の中に置き、決して縁にかけてはならぬ。
 飯椀の受け方は、これを出すには箸と椀とを置いて左右の脚
 客を眺め、脚客がまだ食し終らぬやうであつたならば、一寸會
 禮して両手で椀を出す。取るときもまた両手を用ひ、決して片
 手で受けたり、拇指を椀の中や縁にかけてはならない。

第五節 箸の扱ひ方

箸は全體の長さの上から三分目位のところに、右手の拇指を
 當て、持つのが適當とされてゐる。下の方を持つのは不恰格で
 あり、餘り上の方を持つてはまた目上の人に對して失禮とされ
 てゐる。



箸の置き方

上座の客が
 箸を執らない
 先に箸を持つ
 は無作法であ
 る。従つて上
 座の客にして
 箸を取るべき
 ときに取らな
 いのは、他の

客全體に迷惑をかけることになるのである。
 本膳は最初膳から始り、膳に終るのを本式とし、懷石は膳部
 が出揃つてから箸をつくべきであるが、儀式其他の都合で先に
 吸物が出る場合もある。吸物は冷えぬ中に吸ふべく、その際は
 箸を持つて差支ない。

箸の扱ひ方については、次の諸項が禁物となつてゐる。

- 及び箸 膳越に物を挟むもの。
- 及び箸 菜から菜に移り、飯に戻ること忘れもの。
- 及び箸 どの肴を挟まうか、又は菜に付けやうか、飯に戻ら
 うかと箸が途中で迷ふもの。

突き箸 ものを挟まずして突通すこと。
突込箸 箸は舌頭に乗せる程度に運ぶべきもので、口中深く箸を突入れること。

かみ箸 箸を噛むこと。
こみ箸 口に物のあるとき更に食物を口に入れること。
にぎりこ箸 箸に着いてゐる飯粒を箸で落し、又は逆手に箸を握り肴類を突き割ること。
ねぶり箸 箸を口の中に入れて甜ること。
こち箸 煮物、汁の實などの下にあるものを、こち起して食すること。

探り箸 まだ何かないかといふ風に察して見ること。
廻し箸 香の物を湯茶の中ぐるぐる掻き廻すこと。
空 箸 箸をつけながら、食はずに箸を引いて了ふこと。

第六節 汁の吸ひ方

前記飯の喰べ方の項で述べた如く、一の汁は最初汁を先に吸つて實を後に食する。二の汁は最初實を先に食し、汁を後にする。尤も一の汁も、二度目からは實を先にし、三の汁は二の汁の要領に従ふ。汁の吸ひ方にうけ吸ひといつて、汁の再進また

は酒などを通ひから受けて、膳に一應置かず、直ちに吸ふことは禁物である。

第七節 膳のすゝめ方とひき方

本膳を持つには左手を膳の真下、右手を右側にかけるのが本式であるが、二の膳、三の膳の如く膳下に両手を入れ、四指を下に指だけを残す下縁にかけて持つて出ても差支ない。鼻より少し高く捧げるのは呼氣のかゝらぬ注意である。膳の下から足許を見て客前に進み、三尺ばかりのところでは立ちどまり、左足を少し退いてその際から先きに坐ると同時に、膳を客の左の方へ少し寄せて下に置き、兩



お膳のすゝめ方

客前に行き、膳の上方にこれを置き、出された飯椀を右手の拇指と食指とで握み、他の三指を延ばし左手を添へて受け、これを左手に移し、右手で杓子を取り、椀の中を軽く左右に振き分け、二すくひ半に盛る。これを受け方と同様の持ち方で客にすゝめ、飯椀を持つて上座を廻り元の場所に戻る。また飯椀を盛りに握る、本杓子を前に置いて通ひの者と共に末席に控る、通ひの者が盆を持つて客前に進むとき飯椀を受持つた者は蓋を下から上手に、「の」の字形に廻して取り、蓋を切つて椀に置く。通ひの者は客の左から、盆を右手で差出し飯椀を受取り、左手を添へて立ち上り、退いて飯椀係りに

手を縁に軽くかけて押進める。大いで二膳退いて立ち上り、上座に廻つて歸るのである。二の膳、三の膳は本膳と同様であるが、この膳部は拇指を兩縁にかけて持つて出るので本式とするのと、二の膳を客の右方に三の膳を左方に置くだけと異なる。四の膳を出すときは二の膳に倣ひ、五の膳を出すときは三の膳に倣へばよい。
膳をひくには先づ客前から三尺ばかりの處へ進み、右足を少し退いて坐し、一體して一膳進め、膳の兩足に手をかけて手前に引き寄せ、前述の持ち方に倣つて立ち上り、下に向き直つて歸る。會席膳は足がないから左右の縁に軽く手をかける。ひき方の順は俯める時と反對に五の膳、四の膳、三の膳、二の膳、本膳と上席から先に撤くのである。

第八節 給仕の仕方

飯をすゝめるには洗儀によつて多少の差はあるが、本来は本酌、介添の二人でするのが正式である。先づ飯椀を臺に載せ、手前に杓子を置き、右手を椀の蓋にかけ、左手を添へてあしらひ、下手から上手へ「の」の字形に廻つて蓋を取り、蓋を切つて介添に渡し、本酌は臺ともに飯椀を兩手に持つて



御飯の盛り方

た者は蓋を下から上手に、「の」の字形に廻して取り、蓋を切つて椀に置く。通ひの者は客の左から、盆を右手で差出し飯椀を受取り、左手を添へて立ち上り、退いて飯椀係りに

渡す、飯櫃係は、これを両手で盆から取り、左手で飯櫃の糸底を摘んで、右手の杓子で二杓半に盛つて通ひの者に渡し、通ひの者は盆に受けて客前に配る。

現在では多く後者に倣つてゐるのが多い。然かし厳格にいふと盆を以てするのは正式でない。いづれにしても客前に出すときは、膳上や傾向に差出さず、必ず客の左側からするのが作法である。

汁 通ひの者が盆を持つて、下座の方から順次に盛り替へる。

盛り方は先づ盆を右手に持ち、左手を盆に少しくついて、汁碗が据ゑてある方から受取つて退き、再進を盛り替へ、蓋をして持ち出で客前で置き、一度盆を置いて蓋を取つて盆の左縁にかけ、左手をつき右手で配るのである。

取 肴 肴を取る者と、通ひの者が二人が控へ、二鉢に盛つて

臺に載せて運ぶ。肴を取る者は山、河、海、畑の順に盛つて通ひの者に渡す。通ひの者はこれを盆に載せ、皿ものならば上座から、木皿ならば下座から順次左右に分れて据ゑ付ける。これは客の右方からするのが作法とされてゐる。

引 肴 先づ一人毎に皿または他の器物に肴を盛り、三方または足折に載せ、膳を持つやうにして客前に出で、木膳の中

中央から少し客の右に寄せて置く。また略して肴を臺に載せて客前に出で、臺から取つて客に配る。臺を持ち歸る仕方もある。前者を銘々引、後者を引下しといつてゐる。また臺引といつて肴を盛る器物を一人々々に別けず、臺または鉢に肴を載せ、これを吸物碗または、其他の蓋を取計ひ移し載せて出す仕方もある。

燒 物 小皿などに盛つて、本膳と二の膳の手前に置く。また三の膳がないときは三の膳の場所に置くのが作法である。

鉢 盛 鉢盛の流物は盆に載せて持ち出で、茶碗の明蓋を取つてこれに盛り、客の右の方に置く。また鉢に盛つたまま箸を向ふにつけて客前に置いてよい。

第九節 酌の仕方

鑷 子 兩方に口のあるのを「もろくち」、一方に口のあるのを「かたくち」といひ、多くは長柄である。これで酌するとき右手で下より受け、菊形の鉄のところが指で押へ、左手で猫足のところを取つて酌をする。

徳 利 右の手で下から持ち、食指を徳利の肩に回かせ、中指を軽く上に向け、左手で徳利の左下の尻を持ち添へて注ぐ



酒の注ぎ方

鑷は右手で細い部分を持ち、左手を膨れた部分にかけるのが作法である。

酒の注ぎ方は壹九分、夜八分の作法があり、溢れるほど注ぐものではない。盃を傾けて受ける人があつても、鑷子や徳利の口で押へて注ぐのは無作法である。また鑷子や徳利を替へるには、酒の少し残つてゐる間にしなければならぬ。

第十節 茶と菓子

茶といつても茶席の作法は一般向でないから、こゝでは一般の宴席及び家庭に於ける煎茶の一通りの作法に止めて置く。

煎茶も本式の茶の湯に従ふと、却つて抹茶以上に難かしい方

則もあるが、現代一般には夫れほどの心得はなくとも済む。先づ煎茶を客に配るには、客の前で茶を入れるのと、次の間で茶碗に注いで持ち出るのであるが、何れにしても茶托を用ひなければならぬ。持ち方は左の手で茶托を持ち、左手を下から添へて客前に置き、左手を突き、右手で茶托の右の縁を持ち、客の取り易いところまで差出すのである。また天目を用ふるときは、必ず茶碗に蓋を要する。これを持つには、左右の指と食指とを兩縁にかけ、残る三本の指を廻して軽く屈め、客前三尺ばかりのところ座して下に置き、両手で配るのである。

煎茶も玉露になると、一々湯加減を見、湯冷しなども用ひなければならぬが、是等は茶の湯の範圍になるから省略する。煎茶の飲み方は、普通は右手で茶托の縁を持ち上げ、左の手に載せ、次に左手で茶托を下に置いて、右手の茶碗を受け添へて三口に飲む。飲み終つたならば両手で茶托に置き、あとを欲しくなかつたら茶碗を伏せて置く。また天目の場合は最初蓋を取り、両手で茶碗のみを取り上げ、そのまま三口に飲んで蓋に載せ、蓋をするのである。

薄茶を出された場合は、両手を軽くついて一禮し、作法通り

菓子を食べ、次に両手で茶碗を取り上げて自分の前に掲ぎ、右手で取つて左の掌に載せ、右の手を添へて押し置き、茶碗を右手で二廻り手前に廻して三口に飲む。飲んだならば指を内



お菓子の子のめ方

菓子を食べ、次に両手で茶碗を取り上げて自分の前に掲ぎ、右手で取つて左の掌に載せ、右の手を添へて押し置き、茶碗を右手で二廻り手前に廻して三口に飲む。飲んだならば指を内

干菓子ならば菓子箸を添へて出すのが禮である。置方は茶碗の右(客の)が法で、多人数の來客には、各半紙を筋違ひに折り、折目を客に向けて出すのである。主人から箸または揚子で、菓子を薦められたときは、右手に左手を添へて受け、すぐ食さない場合は、懐紙を出して菓子を載せ、自分の傍に置けばよい。各自の菓子器に半紙を折つて盛つた菓子は、客に持ち歸つてもらふのが主人の作法であり、また食べ餘した菓子などは持ち歸るべきが客の禮である。

第三章 洋式宴會の心得

第一節 晚餐會

洋式宴會の標準ともいふべきものは晚餐會で儀禮、祝典の賀宴、公式非公式の宴會、家庭的の略宴など何れもこの晚餐會が主たるものである。従つてこれに關する諸作法は、多くの場合の範となるべきものである。こゝには主として晚餐會に關する諸作法を詳説し、其他の宴會などは異つた部分だけを摘記する。

第二節 招待の作法

數人臨時に會食するときの招待とか、親友間の會食ならば口頭または電話で案内するも差支ないが、鄭重といふ點と日時場所の間違ひなどを避けるためには、一般に招待狀を發するのが作法である。

大宴會の招待狀は三週間前に發する場合もあるが、一般の場合には少くも一週間より遅からざる以前ならば差支ない。本來は一々使者に持たせて届けるのが正式であるが、多人数の客のときは非常な手数なので、これを郵便に托するのが例となつてゐる。然かし作法からいへば成るべく書留にするのが鄭重な譯である。

招待狀は各自別々に出すのが禮で、一家内にある兄弟に對しても、それ／＼別に招待狀を發すべきであるが、同一家内にゐる姉妹に限つて、連名でも差支ないといふ例外もある。夫婦は一身同體と看做すべきであるから、歐米でもこれは連名にするのが通例で、甲夫婦が乙夫婦を招待するにも、甲乙共に連名でよいのである。喪中にある人に招待狀を出す可否については議論はあるが、非常な不幸に遭つた人へは遠慮すべきは勿論として、其他の場合は西洋人は一ヶ月、日本人では忌明けの後ならば差支はない。殊に結婚式とか大宴會のときは、多分來ないと

思はれる人に對しても、厚意として招待狀を發するのが歐米の慣例となつて居る。

招待狀に出席の有無の回答を求める意味を書く場合は印刷するのが例で、英國では "The favor of an answer is requested" と略語を用ひずに記載し、其他の歐米各國では、同意味の佛語 "Repondez, s'il vous plait" の頭文字を取り "N. Y. C." と略記するのが例となつてゐる。

一方招待狀を受けた者は、「出席有無を御回答」が記載されてゐなくとも迅速に回答すべく、返事を遅延するは非禮である。又何の理由で招待され、どんな顔觸れかなど、招待者に問合せるのもまた甚しい無禮である。差支ない限り出席するなど、の曖昧な返事を出すのも面白くない。直截鮮明に諾否を即刻回答すべきが、和洋通じての作法である。

回答は必ず招待狀一葉に對して一葉づゝなすべきである。先方では出席の男女別などによつて、席順の配置に非常な苦心を拂つてゐるのであるから、一家より誰か一人出席するなどの返事は慎まねばならぬ。

但し例外例として招待狀を出すときと同様に、夫婦または同一家内である姉妹のみは、連名で回答して差支ない。尤も夫婦

の中どちらか缺席するならば、夫なら夫、妻なら妻と、明瞭に返事をしないと準備に差支を生ずる。

回答はやはり使者を以て通達するのが正式であるが、郵便に托するも招待状發送と同じく差支ない。萬一出席出来ない場合は招待の好意を感謝し、缺席の理由を明瞭に詳記して陳謝すべきである。一旦断つて置きなから、其場に至つてノツソリ顔を出すなどは非禮極まるものである。また晩餐會の時刻は、通例午後七時半から八時で、招待状にはその服装を指定するのが例となつてゐる。

第三節 宴會の服装

宴會に臨む場合は主人や主婦のみでなく、時に高貴の人に接する場合もあるから、服装は禮服を着なければならぬ。また宴會のみでなくホテル、俱樂部など多人數の集合する食堂でも如何なる人に遭遇せぬとも限らぬから、何れも禮服を着るべきが作法で、少くも通常服以上に改めなければならぬ。背廣服の如きは自分一人の食事か、内輪の友人同志のみが、料理店などで會食する場合等には差支ないが、其他の會食には着用すべきでない。食堂に入る際には、先づ鏡に向つて服装を正しく整へ、

亂れた所があつたら、これを改めて宴席に出ねばならぬ。

第四節 席順の心得

洋式では常に婦人が上席である。婦人の上客が主人の右、その次は主人の左に、男子の上客は主婦の右、この次の客が主婦の左になるのが席順である。尤もこれは一般社交的及び家族的非公式の慣例で、中でも高位高官の人、年長者、知名の婦人を上席とし、既婚者は年齢の如何にかゝらず常に未婚者より上席に着し、婦人が着席してから男子が着席するのである。然かしこれが公式になると主人來賓ともに男子が上席となり、主人は當日の主賓及び年長者などと共に先に食堂に入り、主婦は最後に食卓につくのである。室内での順位は暖爐か飾棚のある方または正面が上位で、入口に近い方が下位であることは、日本の床の間を基準とするのと類似してゐる。親子、夫婦、兄弟、姉妹、親戚同士を列べて着席させることは、社交上成るべくこれを避けるのが慣例で、廣く談話を交はすため、席順を考慮することは、洋式宴會に於ける第一の常道である。客を招待した場合は主人が先に立つて案内し、自分の右に客の中上位者を着席させる。婦人同伴の客を招待したときは、婦

人全體を着席させてから、男子の着席を乞ふのである。主人夫婦が邀名で招待した場合は、略式ならば主婦が先導で婦人客を案内し、次に主人の先導で男子客を案内して、主人主婦が着席するのを待ち客は着席する。

主人夫婦または、招待者が二人以上ある場合は被招待者の着席順の如く、招待者も客の人數に準じ、被招待者を等分に配席し、招待者はその中間たる位置に別れて着き、接待の責任を果す便宜を計るのである。一人にて客を招待するときも同じく、客席の中間としての便宜位置を、客の數に準じて定める。然かし結婚披露宴では、新郎新婦を合せて一と看做す例外があつて媒酌人はその左右に一人づゝ着席する。

普通長方形の食卓の座席は、兩側を奇數とし、合計して偶數となるやうに配置するが、結婚披露宴には新郎新婦を一と看做すから、正面の席は偶數となる。歐米では十三といふ數を非常に忌むから、十三人の場合は座席を十四人分とし、その一を缺とし食器のみを列べ置く慣例がある。

第五節 着席に就ての心得

着席の順序はあらかじめ主人側で苦心して定めたものである



方きつに卓食

から、指定以外の椅子に腰を下すのは、席順を亂すことになつて非禮である。自分の地位は如何に低くとも、客として招待を受けたときは常に主人側より上席となるのが普通である。婦人が着席するか、または主人が着席の合圖をするまでは、決して

して着席してはならぬ。紹介は着席前にすべく、また椅子は成るべく食卓に付けることを忘れてはならぬ。これは給仕の通路を妨げないためと、疎忽を妨ぐ用意からである。

第六節 配食の受け方

正式の宴會では一々客の注文を待たず、皿に料理を盛つて持ち廻るから、この皿に着いてゐるスプーンを右手に持つて見そ

一人分の料理を握り、フォークを左手に取り、それを押へて挟み自分の皿へ移し取り、移し取つたらスプーンとフォークを、元の皿に元通りに置くべく、此際自己の食器を用ひるのは無作法である。

以上の配食は給仕が順に料理を持つて来るから、その順序を誤ることはないが、家庭的の會食の際などは、同一食卓中の婦人が、まだ配食を受けない間は男子が先立つて、配食を受けてはならぬ。すべて持ち廻りの際には、飲物(スープは料理で飲物でない)は必ず客の右から出し、料理は左から出すのが正式である。

正式の宴會でなくホテル、俱樂部の食堂などに出席した場合、自分の嗜好に應じて料理を注文しなければならぬ。其際の順序としては給仕または女給仕の差出す献立表により、最初に食する物から注文するのであるが、始めから食する物全部を一時に注文するのは、徒らに食卓を騒がせて無作法である。定食料理では、パンだけは注文がなくとも、最初に付けて出すから注文する必要もないが、其他のものはすべて一皿食し終つたならば、献立表を見て次の料理を注文する。この注文を聞いて給仕または女給仕は、前の皿を引くことになつて居る。

献立表は佛文か英文で書いてあるが、専門的の名稱が多くて全部がわかる人は少ない。それに各ホテルで勝手に附けた特殊の料理名もあり、馴れた人でも往々わからない場合があるが、それを知つた振りして盲滅法に注文すると、飛んでもない失敗を招くから、わからない時には遠慮なく給仕に尋ねるがよい。

第七節 ナプキンの取扱ひ方

ナプキンは食事の際、指先や唇に何か物の附着したとき、軽く拭いたためのもので、これで顔を拭いたり、食卓を拭いたりするのは無作法である。

先づナプキンの掛け方をいふと、着席後落付いてから、初めて料理が出さうになつた時これを取るべく、席に着くや否や急いでナプキンを掲げるのは恰好がよくない。又風呂敷の塵でも拂ふやうに振り掲げるのは、隣席の人に對して無作法になるから、軽く掲げて膝の上に載せるのである。全部掲げてもし、二つ折にして折目の方を上に載せるのが正式とされて居る。尤も日本人殊に婦人は、西洋人と異なり脚部が短いので、椅子にかけて足を床に着けると、膝が下つて載せたナプキンが落ちやすい憂ひがある。さういふ時はナプキンの端を、帯の下に少しく

挟む方が安全である。全部ナプキンを掲げて、帯の上に挟むのも得め立てするほどの蓮式でないから、改まつた宴會以外ならば、疎忽から衣服を汚すのを防ぐため、便宜上不馴れた人はやつても差支なからうが、唯これをチョッキの釦穴に挟んだりするのは、歐米で老幼者に限られ、堂々たる紳士達のなすべきことではない。



ナプキンのかけ方

本來ナプキンの使用は一回限りで、新品または洗濯したものと取換ふべきであるから、使用後は洗はない

方が作法である。丁寧にたむむのは作法のやうであるが、使用後キッチンと元通りにたむんで置くと、給仕が新しいものと誤認して、他の客に用ひないとも限らないから、殊更たむまずに軽く不規則に纏めて置くのが禮法である。然かしこれにも例外があつて自分の家庭、下宿屋又は汽船内

などでは、食後ナプキンをきちんとたむみ、各自番號或は符號の記してあるナプキン・リングに捲き込み、汚れるまで數回使用する。これは家庭や下宿屋などにあつては、ナプキンを使用する毎に一々洗濯するのは不經濟であり、汽船の航路中は淡水を節約するためである。

食事中過つてナプキンを取り落しても、自分でこれを拾ふのは隣席や向合つてゐる客に對して甚だ見苦しい。かゝるときには遠慮なく給仕を呼び、他の客に目立たぬやう拾つてもらふ方がよい。食事に際して往々ナイフ、フォークなどの食器をナプキンで拭く人があるが、これは非常の失禮である。眞にその食器が汚れてゐるものならば、非公式の場合なら低聲で、給仕に告げ取り替へてもらつて差支ない。然かし家庭などに招待された際かゝることをしては、わざ／＼行き届かぬことを責めるやうで、主人に對する侮辱となるから避けねばならぬ。

第八節 ナイフとフォークの使ひ方

洋食では必ずナイフを右に、フォークを左に持つものと思ひ込んでゐる人もあるが、洋食の原則としてはフォークは右手に持つのが本當である。切らねばならぬ料理が出たときにナイフ

を用ひ、掬はねばならぬ液体のときに、スプーンを用ふのであるから、ナイフとフォークと共に手にする時にのみ、フォークを左手にし、其他の場合は、フォークは右手に持たねば遠式である。

フォークの持ち方は右にする際は、箸を持つやうに指を上手にして料理を掬ひ取る。掬ひにくい物であつた場合は、左手で皿の左側を軽く支へ、それでも掬ひにくかつたならば、パンの小片を左手に持ち、右手のフォークにあしらふと便宜である。但しこの持つたパンは、料理を喰べた後、皿の隅に捨て、下げさせ口に入るべきではない。料理が大きくて一口にし難いものは、フォークを前と反対に、指を下に手の甲を上にして、掌中にフォークを握り、食指でフォークの柄を押へて力を添へ、その側面で手前の方から漸次に一片づゝ取り、前述の要領で食する。突刺して食する場合は、指を上にするも下にするも隨意でよい。

フォークで取ることの出来ない場合、始めてナイフを一緒に使用するが、此時は右手にナイフ、左手にフォークを取り、フォークで料理の手前の端を刺し押へ、ナイフで適宜の大きさに切り、左手のフォークで突き刺したまゝ口へ持つて行く。其際



方ひ使のクローフとフィナ

初めから料理を全部細かく切つて置き、改めて一片づゝ口に入れる人を見受けるが、あれは子供に與ふる場合で、一人前の男子のなすべきことでない。又ナイフとフォークと一緒に動かす人もあるが、これは動もすると料理を皿の外に滑走させ、食卓に墜落させる危険がある。食事中に談笑する時は、ナイフとフォークを自然に持つてゐればよく、わざわざその扱ひ方を作爲すると却つて不恰好になるものである。勿論食物を煩張りながら談話するのは無作法である。中座するとか水を飲むとかの必要が出来たとき

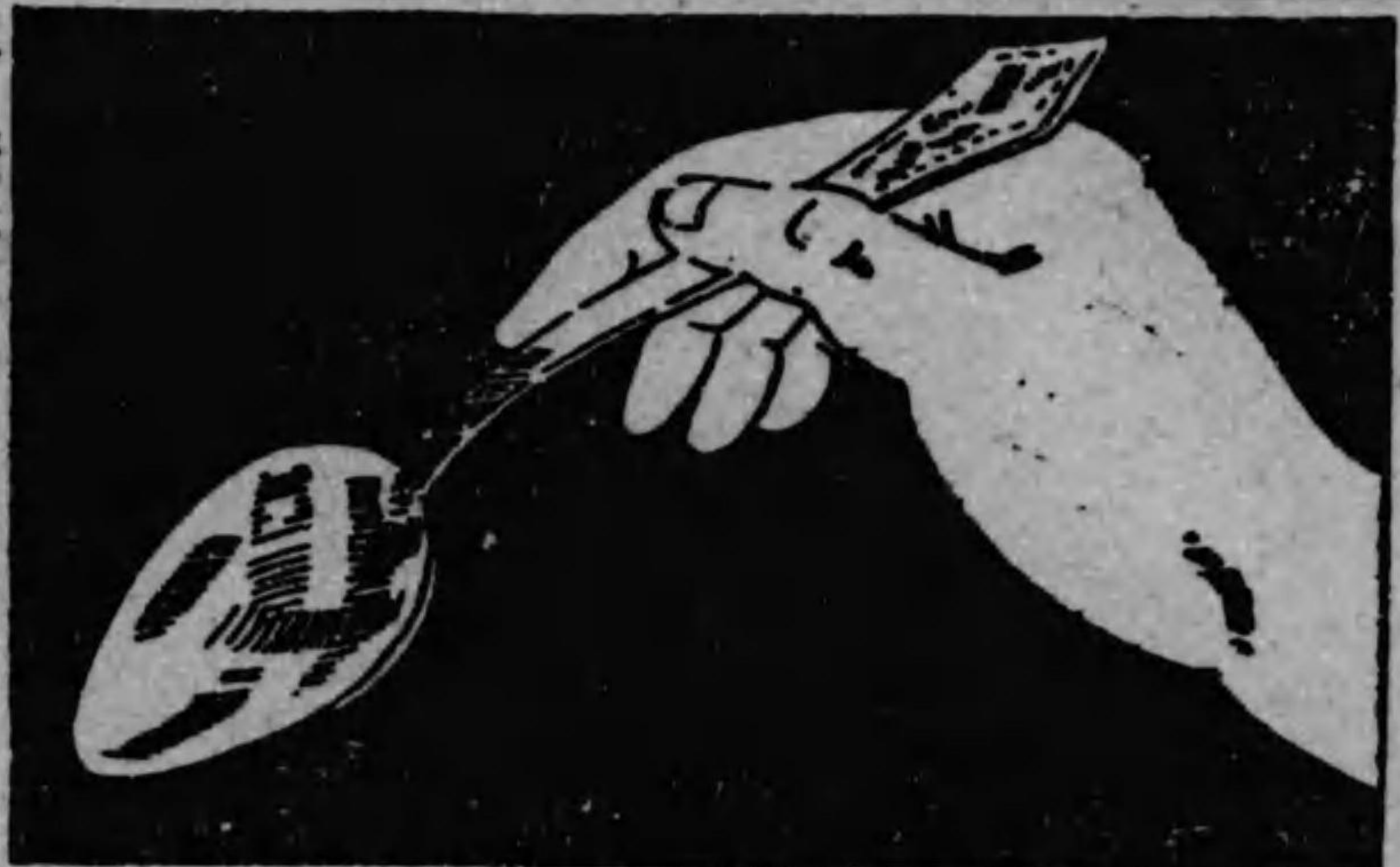
には、ナイフとフォークの先端を、両側に分けて皿の縁にかけ置くべきである。食事後はナイフとフォークとを一緒にまとめればよいので、これを組合せたり交又させたりするのは、却つて遠式である。要はナイフとフォークとを皿に載せ給仕に下げさせるとき、その柄が袖口に引掛らぬやう、客として注意を加へて一纏めにするのが作法なので、スプーンの場合もまた同様である。

以上の如くフォークは左手に持つ場合よりも、右手に持つ場合が多く、唯ナイフと同時に持つとき始めてこれを左にするのみである。勿論ナイフは絶対に左手に持つてはならない。またナイフで物を掬つて口にするなども無作法である。

料理によつてナイフに普通小刀、魚用小刀、前菜用小刀、果物用小刀、菓子用小刀、牛酪用小刀などの別があり、フォークにも普通肉叉、魚類用肉叉、前菜用肉叉、果物用肉叉、菓子用肉叉などの別があつて、宴會などには皿の代る毎に、外側から内側へ取るやう、盡め給仕が、献立表の通りに並べてあるから間違へてはならない。

第九節 スプーンの取扱ひ方

スプーンはスープ、茹玉子、粥、アイスクリームなどの液体または水氣の多い菓子、果物などの如く、フォークで扱ひにくいものに限り用ふるものである。その扱ひ方は箸を持つ時の如く、右手に指を上にして柄の中央部を持つのである。尚ほスプーンも用途によつて持廻用大匙、普通スプーン用匙、曹達攪拌用匙、食鹽用匙、茹玉子用匙、ソース用大匙、ソース用匙、生菜用匙、紅茶用匙、珈琲用匙、氷菓子用匙、蜜柑用匙、砂糖用匙、菓子用匙などの種類がある。



方ち持のソープス

上に配列しあるものは、普通用匙、食鹽用匙位で、宴會になるとアイスクリーム匙や、菓子用匙などを配列して置くが、他の匙は大抵その品に添へて、給仕が持つて来ることになつてゐる。

第十節 パンの食べ方

パンは食事中を通じて食べて差支ないが、まだスープの来ない先から食べるのは不禮儀であるから、スープを済ましてからにする方がよい。大體は次ぎの料理の進みに食べるのが、食時の進行上好都合で、徒らに料理の皿を前に飾りながら、パンばかり食べておられると、給仕は料理の皿を引くわけに行かず、これがため宴会などでは非常に迷惑をかけるから、宴会の進行を調節し、料理の持ち運び、皿の引き方などに留意して、給仕を困らせないやうにしなければならぬ。



パンの食べ方

パンは最初から食卓に配列し、普通皿に敷つて左脇にあるからその皿の位置を動かさず、一口に食

べられる位に小さく振り、バター・ナイフでバターをつけて食べる。もし各自に牛酪入とバター・ナイフが備へられてないときは、デザートナイフで手近のバター入から、バターを適宜に取つて自分のパン皿に移すのであるが、初めからパン一面にバターをなすり付けて嚼めるのは甚しい無作法である。パンは中部の柔らかいところよりは、縁の方が消化もよく且つ美味なものであるから、内部の柔らかい部分のみを食べて堅い部分を残すのは、パンの味を知らぬ食べ方である。宴会其他でロール・パンといつて、圓形又は巻いたパンを出すことがある。あれには、巻めバターが入つてゐるから、バターを付けるには及ばない。このパンに限りパン皿を用ひず、直接に食卓の上の置いてあるからすぐわかる筈である。パンはデザート・コースに入ると、もう食べない作法になつてゐるので、残りがあつても給仕は引いて了ふのである。

第十一節 各種料理の食べ方

スープ スープは食物であつて飲物ではない。従つて洋食でもスープは、他の飲物のやうに客の右から出さず、食物と同じく左方から出すのが定則である。このスープにも種々あつ



スープの食べ方

て、各容器すら異にしてゐる。普通日本の洋食屋でスープといつてゐるものは、鳥スープに野菜を入れ、これをスープ皿で出す。これはスプーンを中央より少し上部を持ち、手前から先方へ振り、スプーンの側面に口をつけて吸ふ。此際左手

六度食べ、熱かつたならば適度に冷して後、スプーンを受皿の上に置き、今度は右手で茶碗の把手を取り、飲み干すのが正式である。茶碗は近來兩方に把手のあるフイヨン・カップが出来てゐる。最初は左手で左の把手を取り、右手のスプーンで食べ、今度はスプーンを置いて右手で、右の把手を取つて食べられるやうになつてゐるから、把手を廻す必要はないのである。

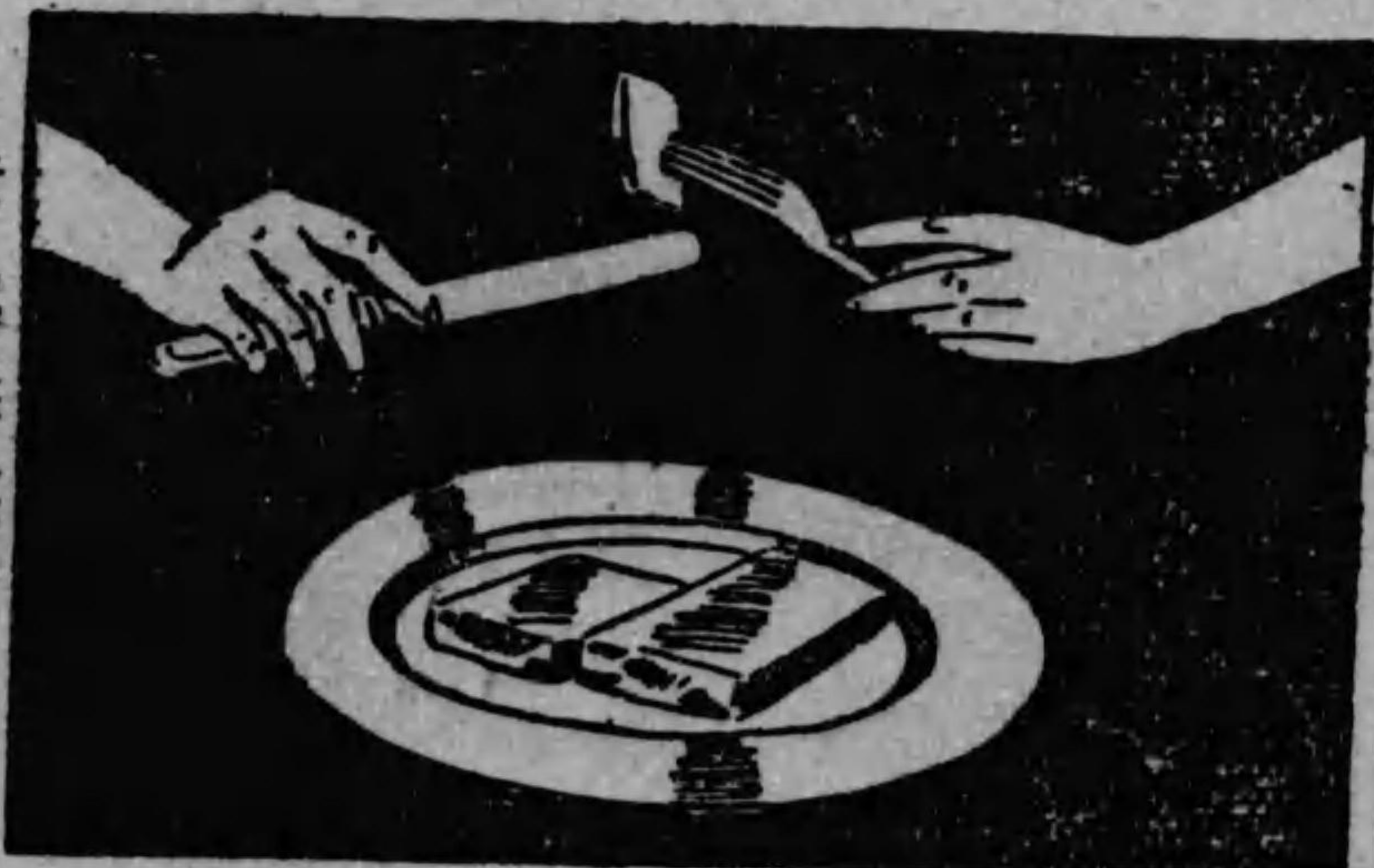
ポタージュ・マリガトリーニはカレー粉入りの濁りスープで、矢張りスープ皿に入れて出す。この中に米飯を入れるので手数を略すために最初から入れて出すこともあるが、本來は給仕が別の容器に米飯を入れて持ち廻るのが正式である。この容器から米飯を適宜スープの中に取り入れ、靜かに攪拌して食べるのであるが、餘り澤山米飯を取り入れるのは下品である。

一種で、紅茶または珈琲と同一の茶碗に入れ、受皿に載せて出すが、必ず小さい匙が添へてあるから、茶碗を皿に載せたまま左手でその把手を持ち、右手のスプーンで攪拌して五

イン・カップは牛肉のスープの

する人を見受けるがこれは不恰好とされてゐる。スープに限らずすべての飲食物を、チュー／＼音をさせて啜り込むのも甚だ無作法である。又パンの小片を小さく振つてスープの中へ入れるなども大の禁物とされて居る。スープは元來朝飯には用ひない。それを知らずにホテルなどで朝飯の際、スープを請求するなどは、飛んだ赤毛布の墨露といはねばならぬ。前菜又は小盛 食慾を増すため、スープより先に出す料理で、酒でいへばコクテルと同じ目的を持つものである。これにも種類があつて、クラップ・コクテルは蟹の肉をコクテル・グラスに入れ、トマト・ケチャップ・ソースを掛けて皿に載せて出す料理である。フォークで掬ひ食するもので、其際左手で軽くグラスを押へるが、最後にグラスから酒でも飲むやうに、ソースの残滴を掬ひ込むのは大の禁物である。

オイスター・オン・ハーフ・シェル・ウイズ・レモンは、貝付牡蠣にレモンを添へた前菜の一種で、よく宴会などにも出る料理である。これは右の指で先づレモンを摘んで汁を絞り、左手で貝殻を押へ、右手のフォークで牡蠣の肉を掬ひ食すべきであるが、貝に残つた柱を喰べるに一寸困難であるから、不躰な婦人達は柱だけは割愛する方がよい。貝をよく皿



前菜の喰方

の上で押へ、フォークで挟んで食すればよい。往々貝を皿の中から持出して、一生懸命割がしてゐる人も見受けるが恰好がよくない。魚 魚類には普通のナイフ、フォークと異つた、魚類用銀製のナイフとフォークとが出てゐるが、若しこの用意がしてないときは

は、特に略式の變形フォークのみを出すこともある。これは普通のフォークより薄く、魚肉をちぎる便宜に出来てゐる。この變形フォークを用ひるときは、魚類用小刀は別に出来ないことになつてゐる。ソブスター・マヨネーズ・ソースは伊勢海老の煮たのを半分に分けて、マヨネーズソースを添へた料理で、これもよく宴會に出る。喰べ方は左手で海老の尾を押へ、右手でフォーク



魚料理の喰方

を取り、尾の方の肉に刺し左から右へ斜がして取り、フォークを左手に持ち替へ、右手にナイフを持つて適宜に切つて喰べる魚類のフライ類を喰べる場合、骨などを口の中に入れたとき、こ

れを皿の上に吐き出すなどは無作法であるから、靜にフォークで受けて皿の一隅に置くべきである。主 菜 主菜は料理中主要の御馳走で、料理人が最も苦心するところであるが、例外として露國では寧ろこの主菜より、前菜の方に苦心して種々珍らしい馳走を出す風習がある。ブロンエツト・ドウ・ヴォライユは、鶏肉とベーコンを銀の串に刺してフライした料理であるが、多人數の宴會等で銀

串が不足するときは、竹串に代へることもある。喰べ方は串の頭を左手に持ち、右のフォークを横にして串を通し、肉を支へ、徐々に左手の串を引き抜いて、串は皿の隅に置き、串を持つた指頭をナフキンで拭き、次にフォークを左手に、ナイフを右手に取つて、適宜に切り取つて喰べるのであるが、肉が小さくて切る要のないときは、ナイフを持つ必要がないから、フォークはそのまゝ右手に持つたまゝ食すればよいのである。但し竹串の際は銀串に比して抜きにくいから、両手を動かして引抜くとき、餘りフォークに力を入れてゐると、往々肉を皿の外へ跳ね飛す虞れがあるから、右手に力を備めたり、動かしたりしないやう注意せねばならぬ。

ムイズ・ドウ・ジャンボン はハムの桶身を、ジェリーで固めた料理で、頗る柔かいから、ナイフの用を借りるまでもなく、右手にフォークを持つて適宜にちぎつて喰べればよい。カリード・ライス はライス・カレーのことで、持ち廻りが出るときは給仕が米飯の容器を持つてくるから、自分の皿へ適量に移し取り、カレー入れからカレーを移し取つた上、更に持ち廻る薬味皿から自分の嗜好に應じ、茹玉子またはハムを細かに切つたのや、鰹神漬などを移し入れ、フォークで混

せて食する。この料理で稍や事が面倒になるのは、以上の薬味の他に胡瓜の酢漬や、インデアン・マンゴー・チャツネー又は、ボンベイ・ダックなどが出ることもある。これを細かくして薬味皿に入れて持ち廻つてくれれば面倒もないが、ピツクルス・スタンド（漬物や、ジャム、マーノマレードなどの容器立）の瓶に入つたまま持つて来たならば、必ずピツクル、フォークといふ専用のものがあるから、それで自分の皿の手前に移し入れ、ボンベイ・ダックであつたら指でちぎり、其他のものならナイフで細かに切り、フォークで潰き混ぜて喰べるのである。又普通のカレーでなく、ドライ・カリード・ライスといつて、汁気の少ないカレーを用ふることもあるが、喰べ方は別に變りはない。

タンダーロイン・ステーキは、ヒレのビーフ・ステーキのことで、ナイフとフォークで喰べる。但しこれには多くリボン・ポテトースといつて馬鈴薯を薄く切り、リボンのやうに捲き、油で揚げたものを附合せとして出す。これは先づフォークで押へ、ナイフで靜かに飛ばさぬやうに喰はし、フォークを右に持ち替へて喰べるのである。クルスタードは、米飯または裏漉にかけた馬鈴薯で作つた

球形の上部を横に殺ぎ、中味を刮り抜いてフライした中へ、料理した魚、鳥、獸肉等を小さく切つて詰めたもので、フォークのみで食してもよく、ナイフを使ふべき要があつたら、兩方を用ひて食するもまた任意である。

ヴオルオーヴアンは前同様のものであるが、これはメリケン粉で捲けたハツフベストリケースといふ型に詰めた料理である。ところがこの型が容器のやうに見えるので、往々誤解して中味のみを捲つて喰べる人もあるが、これは外部の型を一緒に喰はして食するものである。

野菜にもいろいろあるが、こゝでは宴會料理として最も多く用ひられる物の喰べ方を説明する。

アスバラガスは譯して西洋獨活といひ、觀賞植物のアスバラガスとは同名異種である。これを喰べるには、アスバラガス・トングといふ砂糖拭みに似た銀器があつて、それで莖を挟み、尖端の芽だけを食するやうになつてゐるが、アスバラガス・トングを設備してゐる處が少ない。多くはその代りに左指を用ひて莖を捲み、莖から順次柔らかい部分だけ歯でしごいて喰べる。然かし英國式になると、矢張りナイフとフォークを用ひるのが正當とされてゐるから、儀式張つた宴會に

は英國式に従ふのが作法である。アスバラガス・トングを出すとなれば、卓上フォークと並べて置いてあるからすぐわかる。

アスバラガスは上記の如く、芽と芽に次ぐ柔らかい部分のみを食するのであつて、下部の莖まで喰べると口中に纖維が残り、これを吐き出さねばならぬ無作法をせねばならぬ。左手の指で捲んだ後その指を甜めたりしないで、ナフキンで拭くことを忘れてはならない。又時によるとアスバラガスの芽または、柔らかい部分だけを撰んで出すことがある。其際はフォークで刺して喰べればよい。

グリーン・ピースは青豌豆のことで、これは右手のフォークで捲ふて喰べる方がよく、右手にナイフを持つとなか／＼フォークに載せにくい。豆が柔らかいときには、右手のフォークで押し付けると好い加減に潰れて喰べよくなる。

アーティチョークスは、緑色の大きな根莖に似た野菜で、これにいろ／＼なソースを添へて出す。喰べ方は鱗形の葉を一片づゝ右の手で解がし、下の端に少しソースを付け、内側の極少量の肉實を下歯で碎いて喰べ、残片は皿の手前の片隅に捨てる。面倒がつてナイフで切り、一口に入れると芯と

棘があるから、いくら我慢しても嚥吞にすることが出来ず、吐き出しの無作法を招くのである。アーティチョークにはポットムといふのがあつて、直径約二寸、厚約六七分、黄色を呈し、頗る珍味とされてゐるが、これならば右手のフォークのみで喰べればよい。

蒸焼肉 蒸焼肉が済むとデザート・コースに入るのだから、いはゞ料理の打止めである。蒸焼肉に用ふる肉は牛肉、豚肉、羊肉、鶏、家鴨、雉子、七面鳥、鵝等數十種あり、いづれもナイフとフォークとを併用して食し、その種類により骨附と然らざるものがある。こゝには最も多く宴會などに用ひられる鶏の喰べ方を記載して置くが、他の骨附もまたこれに準ずれば間違ひはない。

クニール即ち鶏の蒸焼は、先づ仰向けになつてゐる鶏をフォークで押へ、胸骨に沿ふてナイフで切り込み、左側の肉をそぎ落して食し、次に残つた右側を左側に向け替へ、前同様にして切り取つて喰べる。後には兩脚だけが残るが、これは附根をナイフで切り落し、脚の端を右の指で捲んで肉を骨から噛み取るのであるが、儀式張つた宴會や客人の列席してゐる處などは、禮儀上遠慮して、脚だけは下げさせる方が無難

である。また其他の首や背は、骨ばかりで肉がないから、最初から手を着けない方がよい。

生 蒸焼肉に付物は生菜である。サラダにも数十種あるが、主として高直といふ蔬菜の葉を材料とし、それにいろいろなものを取り合せたもので、大抵は細く切つてあるから、フォークのみで喰べられる。もし高直の葉が大きかつた場合は、フォークで折り疊むなり、ナイフで切るなりして喰べればよい。

圓食物と菓子類 蒸焼肉が終わるとこれが出て、次にデザート・コースとなる順である。

チーズ・フィンガーは乾酪とメリケン粉で製した、ビスケットやらの細長いもので、これを給仕が出したら、数本パン皿の上を取つて一つづつ擽んで喰べる。ビスケットやペストリーなども、これと同様に喰べればよいのである。

オレンヂ・デゼリー・ウイズ・ホイップド・クリームは蜜柑の汁を、ゼリーで軟かく固めて蜜柑の皮につめたもので元來が軟かいものであるから匙で食すればよい。ソフト・カスタード・プディングとか、ベローアーズオーションヨコラなども、牛乳と鶏卵で拵へた柔かいもので、矢張り匙で喰べる

ものである。

シネー・アラ・クリームは、普通シネクリームといつてゐるもので、フォークでも匙でも任意に用ひて喰べて差支ない。然かし無暗に噛み附くと中味のクリームがベツツから飛び出し、衣類や食卓を汚すことがあるから、落着いて靜かに食さねばならぬ。

マロン・アラ・シャンテリは栗の實を擽りつぶし、クリームをかけたものである。これはフォークでよくクリームを混ぜないと、ボロ／＼して取落す虞れがある。

ミンツパイは、焼きたての熱いのだと指では勿論摘めず、フォークでもなかく／＼振れない。さりとて匙では用ひにくいほど弾力があつて且つ堅い。出来るならフォークのみで喰べるのがよからうが、右様の場合はナイフを用ひて差支ない。此際用ふるデザートナイフ及びデザートフォークは、卓上自分の正面、料理の出る向ふ側に配列し、他のナイフ、フォーク、匙は皿の左右にあるのが式である、但しバター・ナイフが特につけてないときには、このデザート・ナイフを代りに用ひるのである。

粥と茹玉子 粥と茹玉子は夕食や宴会などには決して出さ

ぬ。両方ともに朝食専用で例外として、病人が自分の部屋で食事するのは任意である。

粥にもオートミル、セモラ、セモクナなど種々あるが、大抵は日本の粥と同様に煮て出される。尤も日本のやうに粥そのまゝで喰べるのではなく、必ず砂糖とクリーム、又は牛乳をかけて食するのである。牛乳よりはクリームの方が適當であるが、日本ではクリームの價が高いので、多く牛乳を代用する。喰べ方は矢張りデザート・スプーンを用ひ、スープと同様の要領にすればよい。尚ほ粥には初めから多少鹽加減がしてあるが、もし甘いやうであつたら、適宜に食鹽容器から食鹽を少し移し入れ、自分の好む鹽味にすればよい。

ポイルドエッグス即ち茹玉子は茹で方によつて名稱を異にする。沸騰せる熱湯中へ約二分間ぐらゐ入れたものを半熟、四分間程度のもを普通、十分間ぐらゐ入れたものを「堅」といふ。この標準名稱で任意に注文すればよいが、鶏卵は普通二個が一食の最大限とされてゐる。

給仕が茹玉子の注文を受けたときは、一個をエッグス・スタンドに立て、前に一個を皿に載せ、茹玉子用匙を添へて持つて來るのが例であるから、先づエッグス・スタンドに立て

ある鶏卵を左手に押へ、右手のフォークの尖端で殻を破つて上部を除き、フォークを匙に持ち替へ擽ひ出して食する。

一匙毎に食鹽を振りかけるのは手敷であるから、盡め所要の量だけ皿の縁に移し置き、それを少しづつ匙で鶏卵につけて喰べると都合がよい。但し茹玉子は前述の如く宴会や、食堂の夕食などには出ないから、フォークの代りにナイフで叩き破つても差支ない。右の如く一個を食したら次の鶏卵を矢張り同方法で食する。尚ほ給仕に命じて別に茶碗を持つて來させ、自分で破るよりは給仕に破らせて茶碗に入れそれへ食鹽や胡椒を適宜に振りかけスプーンで擽ひ食する法もある。

其他の注意 給仕は朝食又は午後の茶、咖啡の菓子代りに食するもので、夕食又は夕食の際には決して出さないものになつてゐる。これを知らずにホテルの食堂などに出かけ、夕食などにこれを命ずると笑はれるから注意が肝要である。

ライス・カレーは日本人に限つてスプーンを用ひるが、これは連式である。宴会の際チース、シナム或ひはマーマレードを請求してはならぬ。チースはバターと一緒に、パンにつけて食するのであるが、單獨の食事なら給仕に命ずると、チース・スプーン

といつて、これを掬ひ取るものを添へて持つてくるから、適宜の量を自分のパンにつければよい。チーズには特有の臭氣があつて、口が臭くなるから婦人連は、他人の前では喰べないのが歐米の習慣とされてゐる。従つて男子もまた、多人数の會食や宴会などでは食さないのが作法である。シヤム及びマーマレードは、朝食とか午後の茶の時間にパンにつけて食するもので、晝食及び夕食には食さない習慣である。況して宴会等では絶対にこれを請求すべきでない。

持廻りの料理に自分のフォークや匙を以て、移し取つてはならぬことは前に述べたが、尚ほ共同のバター入れや食鹽入れ、或ひはシヤム、マーマレード入れなどの容器に、自分の食器を突込んで移し取るのは決してなすまじき無作法である。必ずその容器に添へられた食器を用ひねばならない。(パースレーは「和蘭みつば」ともいふ細かい緑草で、料理の彩飾として大抵の皿には附合せとして添へられてゐるが、裝飾用のみでなく喰べて香味もあり、衛生上にもよいから遠慮なく口にして差支ない。またソールテット・アーモンドと赤大根は、食事の初から卓上に出でゐる間食物であるから、食事中は勝手に摘んで喰べてよく、生のセロリーも同様であ

る。

第十二節 洋酒に就ての心得

洋式で普通に用ひられる酒類はコックテール、シネリー又は日本酒、ウオッカ、ポトワイン、白葡萄酒、赤葡萄酒、麥酒、リキニール、シャンペン等であるが、是等はその種類により、形状と名稱を異にし、コックテール用、シネリー用、日本酒、ウオッカにもこの用を以てする。ポトワイン用、白葡萄酒用、赤葡萄酒用、リキニール用、三鞭酒用、清涼飲料用、タンブラー(水、麥酒、サイダーなどに用ふ)曹達水、用等があるが、この中白葡萄酒は赤色の、白葡萄酒の中にもホツホ及びモーセルなどの、ラインクワインは緑色の用を以て、他の酒類はいづれも無色の用を以てする。

酒はどんな宴會にも附物であるが、日本と違つてそれを注ぐ順序がある。先づ食前にコックテールを用ふるのは食慾を増進させるため、客が大抵摘つた頃を見計らひ、待合室で應めるのが例であるが、單に數人會食する際などは、食卓につくとすく注ぐこともある。次に前菜又はスープの時にシネリー酒又は日本酒、時としてはウオッカを用ひる。次で魚類に白葡萄酒

酒、主菜に赤葡萄酒及び炭酸水を出し、蒸焼肉が出ると同時に三鞭酒を注ぎ、珈琲の次にリキニール類を注ぐのが作法とされてゐる。

酒の注ぎ方は手を自然に延ばすのが法式である。即ち瓶の持ち方は手の甲を右側に、掌を瓶の左側につける。日本式に手の甲を下に向けて注ぐのは、洋式に反するばかりでなく露西亞人に對しては、特殊の侮辱を表することになるから慎まねばならぬ。酒を注ぐときは必ず客の後方右側からするのが給仕作法である。

日本では置注ぎを嫌ふが、歐米ではすべてが置注ぎである。佛蘭西では盃の中に酒が残つてゐても、客が謝絶するまでは何回でも注ぎ足し、獨逸式だと客がその酒を大半呑み乾すまでは遠慮して注がない。一切が置注ぎであるから、日本流に盃を手を持つて受けるのは無作法であり、従つて主人が自から酌するのも遠式である。盃の獻酬に至つては尤も慎まねばならぬ。酒が不要であるとか、或ひは充分であつたなら、給仕が注ぎに来たとき軽く手を擧げるか、または食指を盃の縁に當て謝絶の意を表すべく、日本式に盃を伏せたりなどしてはならぬ。飲み方は必ず盃の柄を軽く指先で持つのであるが、タンブ

ラーや曹達水用盃のやうな柄のないものは、その下部を持つて飲めばよい。チニー／＼音をさせたり零したり、または食物が口にある中に飲んだりするのは大の禁物である。酒類はこれを一口に呑み乾さないのが宴會の作法にされてゐるが、食前のコックテールだけは一口に呑み乾して差支ない。これは宴に移る進行から来たものであらう。酒を飲む前後は一ナナフキンで唇を拭ふのは、盃に汚點を印せぬ注意からで、儀式張つた宴會などでは必ずなすねばならぬ作法である。

リキニールは食後珈琲が出てから飲む酒であるから、コックテールを食前に飲むと同様、食事中にこれを註文するのは法式に外れてゐる。リキニールにはベツパーミント、キヌラソー、ブランドー、ベネディクティンなど澤山の種類があるが、いづれも食後の酒である。酒類は盃に口をつけて飲むべく、麥稈や風引紙でこしらへた細い管を、盃の中に突込んでチニー／＼やるのはベツパーミント、フラツペ、ミルクシエーキ、ミルクパンチ、アイスクリーム、ソーダ、レモンスカッシュなどを酒場で飲むときの例外で普通の席でなすべきことではない。

第十三節 乾盃の仕方

蒸焼肉が出る三鞭酒が出る。然かし三鞭酒は高價な酒なので、場合によつてこれを白パンチ・赤パンチ又は日本の冷酒を代用して三鞭酒に注ぐこともある。

一同が蒸焼肉を食し終つた頃を見計ひ、主人または主人側の代表者が起立して宴の趣旨、参集された禮や挨拶などを述べ、最後に來賓の健康を祝する旨を述べて盃を挙げ乾盃する。

此際日本人間の宴會などでは、來賓一同も起立して乾盃するがこれは異式であるから、日本人同士の宴會ならば兎も角、西洋人の交つた宴會では正式に従ふ方が無難である。主人側の挨拶中來賓一同は着席のまま傾聴し、來賓の健康を祝すといつて乾盃する際も、起立すべきは主人側の全員のみであつて、盃の柄を手にして來賓に注目の禮を行ふのであるが、來賓側は着席のまま黙禮して盃を挙げて、口をつければよいのである。

これが済むと主人及び主人側の全員は復席する。それを待つて今度は主賓側の代表者が、附近の人に軽く會禮して起立し謝辭、祝辭等を述べ、最後に主人側の健康を祝して乾盃する。此時は來賓側一同は起立して、主人側に敬意の注目をし、主人側

は起立しないで着席のままその敬意を受け、盃を挙げて口をつける。要するに敬意を表する方が起立し、受くる方は着席のままが正式なのである。

以上二回の挨拶後で、盃の酒を呑み乾するのであるから、最初主人側の乾盃辭に對して、一口に呑み乾してしまふと、第二回の乾盃辭に際して、空の盃を挙げなければならぬことになるから、二度に飲むよう心得ふべきである。乾盃といふ字義からすれば、一口に呑み乾すのが本當なのであらうが、引き續いて二度の乾盃辭に多人数になると、一々給仕が酒を注ぎまはる餘裕がないのと、もう一つは三鞭酒が高價な儀式的の酒であるため、無暗に飲まない遠慮から、かゝる慣例が出来たのであらうと思ふ。

非公式のオチル、俱樂部または家庭などで催す小宴ならば、主人も來賓も別に起立せず着席のまま挨拶なり、答辭なりを述べて、乾盃しても差支ない。

なほ主人も主賓もない共同の祝宴などでは、發起人の代表者が起立して祝辭を述べ、他の會衆一同は着席のままこれを傾聴し、最後に代表者または別の上席者の發聲で萬歳を三唱するとき、始めて一同が起立してこれに和し乾盃する。

第十四節 清涼飲料の飲み方

シリアン・パンチは、アイスクリームのやうなものに果物の入つたもので、主として多種多量の馳走が出る場合、食事の中休みに飲むものである。飲む方は左手でパンチ・グラスの下部を押へ、右手でアイスクリーム・スプーンを掬ふて喰べればよい。



清涼飲料の頂方

アイスクリームは牛乳(上等なものにはクリーム)と鶏卵を主たる材料としこれに香料糖分などを加へたもので、大抵ウェーファーとかフィッガー・ビスケットとか、レナイ・フィンガーとかいふ軽い菓子を添へ

日本人間でもよくやることであるが、プロジツトといつて、酒盃の縁をカチンと軽く打つて乾盃するのは主として獨逸、露西亞などの酒場で、誰が主人、誰が主賓といつた譯もなく、單に數人會合會食した場合などに多く行はれるもので、英國では一般に行はれない。

上述の如く乾盃辭は、蒸焼肉を食し終つた頃を見計つて主人または主人側の代表者が起立して述べるのであるが、多人數のときは往々來客中にはまだ喰べ終らぬものもあるが、主人側の挨拶が始つたら食器は置かねばならぬ。かくて主客二回の乾盃辭が済むと、給仕は直ちに皿を下げ、それからデザート・コースに入り珈琲、菓子、果物等が出るのである。

乾盃辭に次いで、直ちに卓上演説をする人も往々あるが、これは主客は勿論料理人側で非常に迷惑を感じる。祝辭が済むと給仕は直ちにデザート・コースに入つて菓子、果物、珈琲等を出すのであるが、卓上演説をやられると敬意を表して傾聴するため、折角の菓子も果物も喰べる暇なく、珈琲を飲むことさへ出来ない。殊にアイスクリームなどは溶けてしまふ。されば卓上演説をやるならばその祝辭が済んで、主客が一先づ落付ききつるいで珈琲でも飲み終つた頃を見計ふべきである。

て出るから、先づ右手にアイスクリーム・スプーンを持ち、左手にその菓子を持つて、アイスクリームを先きに交互一口づつ喰べる。これは急激に齒の冷却するのを防ぐためと、アイスクリームが皿の中で消走するのを扱らふ便利があるからである。尚この菓子はパンの小片で料理を扱らふとは異なり、結局は喰べて了ふべきものである。

シナードットはアイスクリーム同様で、たゞ材料を異にし、牛乳と鶏卵を用ひないで、砂糖水を主としたものであり、喰べ方は前同様である。

第十五節 ソースと薬味の常識

ソースと薬味を無意味に用ふるのは主人なり、料理人なりに對して非常な侮辱を興ふるものであるが、日本人はよくこれを濫用する。

ソースの作り方は洋式料理第一の秘訣といはれ、従つて料理人はこの製法に苦心修練し、名料理になるとそれに適應する獨特のソースが用ひられてある。然るに日本人の多くは、出された料理を一口も味はない中からソースや薬味をかける。これでは折角料理人が苦心した料理を減茶々にするものである。勿

論人には甘味好きもあれば鹹味好きもあるから、料理人はその注意を料理に加へ、心持ち甘い位にして若し鹹味好きの人ならば、卓上の鹽を少し加へればよい位にしてある。されば正式の宴會には、食鹽の外は一切卓上に出さぬのである。これを無遠慮に出來合のソースや、薬味を無暗に振り掛けるなどは、餘りにも無稽であり、餘りに無智である。尤も正式の宴會でなく、普通の食事ならば、一應料理の味加減を試みてから、卓上に出された食鹽や薬味を用ひて差支ない。

第十六節 各種果物の喰べ方

果物を食後に喰べるのは歐洲に於ける一般の習慣で米國だとこれを朝食に食するが、普通宴會ではデザート・コースに入つてから、間食物及び菓子類の後に食することになつてゐる。次に

是等果物の喰べ方について述べて見やう。

林檎と梨 先づ最初縦に二分し、一片をそのままに他の一片を更に二分し、その芯を去り、フォークで刺しナイフで皮を剝いて喰べ、順次この要領とする。日本風に初めからクルクル坊主に皮をむかない。非公式の宴會や單獨の食事などの場合は、フォークで刺す代りに指で持ち皮を剝いても差支ないが、



方べ喰の物果

最初から全部の芯と皮をとつてから、一つづつ喰べるのは無作法とされてゐる。これは一片でも喰したとき、皮を剝いて残すなどは不禮儀だからである。また桃などもこの要領でよい。

蜜柑類 日本蜜柑のやうに外皮の剝き易いものは手で剝いても差支ないが、噛んだ内皮や核を口から皿へ吐き出すのは無作法であるから、左手で口を掩ひ、そつと剝いた外皮の中に捨つべきである。ホーブルオレンジやグレープ・フルーツの如く、外皮の剝きにくいものは横に二分し、酸味があつたら

ば粉砂糖をかけ、オレンジスプーンでその汁だけを掬つて吸ふのである。

瓜 瓜類は先づ横二つに縦断し、匙で掬つて食するのが簡便であるが、四つ切又は入つ切の場合はナイフとフォークで喰べる。種を口から直接に吐き出すのは禁物であるから匙かフォークで受けて皿の片隅に置くべきである。各人の嗜好によつて食鹽、砂糖を適宜用ふるも差支ない。

柿 最初柿をナイフで削り取り、堅いものは林檎と同じ要領で喰べ、軟かいのは匙で掬ふて喰べる。 莓 莓は砂糖とクリーム又は牛乳をかけ、匙で潰しながら掬つて喰べる。

バナナ バナナはナイフで両端を切り、兩側と上部の皮を去つて、下の皮は其儘とし、その上でナイフを以て切り、フォークで刺して食する。

葡萄と櫻桃 最初果物籠から適宜に自分の皿に移し、一粒づつ右手でむしり取つて食し、左手で口を蔽ひ、外皮と核を右手で受けるか、或ひは指で取り出して皿の片隅に置く。

果物の砂糖漬 汁の有無により汁のあるものは匙、ないものはフォークで食するが、パイナップルは必らずナイフを用ふ

べきである。

胡桃類 アーモンド、アラジル、ヘーゼル、ピーナツツ、ウオルナツツ、栗など色々あるが、何れもナツツ・クラツツカーといふ金物で挟み割つて食する。然しピーナツツのやうに殻の比較的柔かいものは、指で割つても差支ないが、曲で噛み砕くのは禁物である。

すべて果物を食するとき注意すべきは、果物用のナイフとフォークは銀製の小さい専用がある。これは果物の酸によつて、普通の鋼製だと、錆びやすい上に黒くなるから、それを避けるためである。

第十七節 指洗鉢と爪楊枝の心得

指洗鉢 料理が終ると指洗鉢に水を入れ、皿に載せて出すから果物を喰べるには、鉢だけを自分の少し左側に移し、皿を真正面に持つて来てその上で喰べる。もし果物を喰べないときは鉢は皿に載せたままよい。



方ひ使のルーボーガンイフ

ある。作法としては最初右手にナフキンを取り、右の指先を洗ひ、今度はナフキンを持ち替へて右の指先を洗ふ。尤も洗ふといつても、ジヤブ／＼やるのではなく、たゞ指先だけを濡してナフキンで拭くのである。男子ならば極く唇を指先で濡し、ナフキンで拭いていゝが、婦人はそれをしないのが

證になつてゐる。

尚ほ指洗鉢は水又は微温湯が普通であるが、上等の宴會になるとレモンを輪切にして浮かせたり、香水を滴下したりするところから、馴れない者は飲物と間違へるのである。

爪楊枝 爪楊枝は日本の小楊枝と同様のもので、使用の作法も大差はないが、使用後は静かに二つ折として、果物の皮等と一緒に捨てさすべきである。使用後耳に挟んだりするのは無作法である。尤もこれは外國人の列席する宴會では出さない方がよく、殊に外國婦人にこれを薦めるのは非常な失禮とされてゐる。

第十八節 紅茶と珈琲の飲み方

紅茶と珈琲とは大抵角砂糖と牛乳(上等ならばクリーム)が附物であるが、必ずしも入れなければならぬといふものではない。各人の嗜好によつて選擇すべく、普通は給仕が一々これを開くことになつてゐるが、多人數の宴會や公式の宴會等では、一々註文を聞いてゐるわけには行かないから、角砂糖を二箇茶碗の受皿に載せ、客の嗜好に任せ、牛乳だけは別に廻つて注ぐことになつて居る。分量は給仕の注ぎ工合を見てゐて、それ



方え据の碗々茶紅

でよいと思ふとき一寸右の食指を擧げて合圖する。チョコレート、ココアも牛乳の注ぎ方は同じであるが、異なるのは紅茶には必ず冷たい牛乳を用ひ、珈琲やココアには熱いのを用ふる。これは各特有の味と香氣を失はないためである。

以上の飲物は必ず茶碗に入れて受皿に載せ、匙を添へ飲物の方則により客の右側から出すが、この匙は砂糖や牛乳を攪拌するためで、これではこの飲物は料理のビーフナイ・イン・カップと異り、何杯代りを請求しても差支ないから、更に代りを注文したいときは匙を受皿に載せ、反對に不要のときは茶碗の中に入れて置いて意思を表示すれば、給仕は匙の置き方によつて客の意を知り、一々註文を聞く手数を省略する例になつてゐる。

第十九節 給仕を呼ぶ心得

各食卓にはそれ／＼受持の給仕があつて、常にその客の様子に氣を付け所用を辨する任務を持つてゐるから、永くその場所を離れるやうなことはない。従つて何か用があり、給仕を呼ばうとしてもその姿の見當らない際は暫らく受持の場所へ給仕が戻つてく



給仕の呼ぶ方

へ給仕が戻つてく
るのを待つ方がよい。然かし急を要する場合は給仕が氣の付かぬ場合は、靜かに給仕の顔に注目しながら右の手の食指を擧げ、一二回手前

第二十節 挿花に就ての心得
洋式の宴會には大抵卓上に花を飾るが、その種類は切花、盛花、生花、花造、敷花等があり、すべて食堂内の裝飾で決して勝手に手にすべきものではない。これに反し挿花は卓上裝飾用の花とは全然別で薔薇、菫、勿忘草、カーネーションなどにアスバラガス(食用のアスバラガスと同名異種)の葉を配合し、銀紙で元の方を捲き、上等の香水をふりかけた小さい花束で夜會、舞踏會などの宴に限つて特に準備し、豫め特定した席の皿へ、いろ／＼な形に挿んだナプキンの中に一個宛入れて置くが、男女により花束に大小があり、婦人用のは比較的大きく且つ華美である。
これを挿花と間違へて、裝飾用の花をお構ひなしにちぎり取るのは、これこそ落花狼藉である。然かし特に主人が手づから取つてくれるとか、御自由にお取り下さいとかの言葉があつたらば、取つて襟にさしても差支はない。客から強請るのは以ての外は無作法である。

第廿一節 中座と退席の作法

食事中は一切この席を離るゝなかれとは、洋式宴會の禮式であるが、何時どんな突發的急用が起らないとはいへないから、そんな場合に幸ひ主人(或は主婦)が隣席にゐれば、そつと小聲でその理由を告げて立ち、若し主人(或は主婦)の席と離れてゐたら、わざ／＼その席まで出向かず、隣席の人または給仕に、中座の理由を後刻主人に傳言してもらふやう小聲で細みに、他の客には挨拶せず靜かに席から離れるのが法である。然かしこれが便所へ行くのであつたら「一寸失禮を……」といへばよく、決して便所なる言葉を用ひてはならない。

退席については公式の宴會ならば主人が先づ起立し、即頭の敬禮をして離席し、來賓の上座婦人、又は上座者を案内して退席するから、來賓もつゞいて食堂を出て別席に入り、暫時休憩談話の段取りになる。非公式のときは先づ婦人達が退席し後ち男子の順である。つまり宴が終れば、食事中差控へてゐた奥座が許されるわけで、食後休憩室(應接室)へ行かず、そのまま食堂で喫煙するのが殆んど例となつてゐる。英國では特に婦人が氣をきかして退席する習慣があるが、佛國や米國ではこれを婦人敬遠策として攻撃してゐる位で、一から十まで英國を似似する必要もないから、そこは任意煙草の煙をさまで苦にしない婦

人ならば、居残つて談話を交はす方がよい。婦人が退席する際は、他の客は勿論その夫もまた起立して、これを室外に出るまで見送るのが禮である。

以上は食堂内の喫煙を述べたもので、別席へ案内するならば矢張り主人が先導して離席するのが法であり、又共同宴會などであつたならば、上座者から順次退席するのが至當である。食後餘興があるならば格別、さうでない場合は別席へ退いて休憩談話も二十分ぐらゐで切り上げ、主賓又は上座者は主人主婦に挨拶して辭すべく、主賓又は上座者がいつまでも愚圖々々してゐられると、後の客はその人に先立つて歸るのを失禮とされてゐるので、お附合に殘つてゐなければならぬ苦痛を與へるからである。然かし已むを得ざる要用で辭去するときは、主人主婦にだけその理由を告げ、他の來賓には黙して退出するのがよい。これは懇ひ挨拶すると、他の來賓に辭去を促がすやうなことになるからである。

食後餘り時間を費すのも失禮であるが、さりとて直ちに辭去するのは、變態に對する不満でもあつたのではないかと、不安の念を主人に抱かせる虞があるから、然るべき談話は時間を見計つて交はさねばならない。辭去の際馳走の禮を述べ人もあ

るが、これはその必要はない。たと集りの愉快であつたことを述べるのみに止めて置くべきである。

第廿二節 答禮の仕方

宴會が済んだらこれに出席したと否にかゝはらず、宴會の翌日、もしそれが出来なくとも一週間以内には必ず答禮のため、主人主婦を訪問して招待の謝辭を述べなければならぬ。然かしこの謝辭なるものは、宴會辞去の際と同じく日本式に馳走の禮をいふのでなく、宴會の愉快であつたことを間接に述べればよく、それが何より招待者の厚意に酬ゆる作法である。日本では招待を受けたら、直ちにこれに答禮すべきが作法であるが、歐米ほどには規律が正しくない。

答禮には必ず名刺を持参することになつてゐるが、もし招待者側が夫婦で、被招待者が男子であつたらば、招待者側の夫婦に一枚づつ自己の名刺を置き、また被招待者も夫婦でその妻のみが答禮に行くときは、先づ先方の主婦に面會し、辭去の際自分の夫の名刺を主人に一枚、主婦に一枚、さらに自分の名刺を主人に一枚、都合三枚置いて歸るのである。主婦に面會の出來なかつた場合には、主婦にも一枚置くべきである。

答禮は出來得る限り自身で行くのが禮で、代理人に名刺を持たせてやるのは略式である。これがため特に自身答禮に來た印として、名刺の右上隅を内側に折るのが法となつてゐる。

第廿三節 朝餐會と午餐會

宴會といへば儀式、祝典、公式、非公式を問はず大抵晚餐で、社交的の會食でも主たるものは矢張り晚餐であるから、食卓上の禮式はこれを手本にすれば、其他の會食にも適用出来る。以上主として晚餐に於ける作法を説述したのはこれがためであつて、この上に朝餐會や午餐會のことを説明するのは、食卓上の作法としては地足かも知れないが、略式は略式なりに手輕なところもあるから茲に附記して置く。

朝餐會 單純な會食で親友、知人など内輪同士のみが食卓を共にする場合も多く、夏などは盛んにこれが行はれ、時としては主賓を招待し、正式の朝餐會を催すこともあるが、大抵は懸意同士の會食である。時刻は午前九時半頃から十時までの通例で、米國では十時から十一時迄とされて居る。これを正式に行ふ際は、時間も従つて後らしてするのが慣例であり、場所は自宅又はレストランとするのが通例である。

朝餐會を催すには、口頭で開催の旨を通知することもあり

また招待狀を發送することもあるが、何れにしても其時の任意で、通知は矢張り一週間以前が常則であるが、手輕の宴會であるだけに兩三日遅れても咎めるほどのものでない。但し正式の開催で貴賓を招待する際は、通知期日も常則に準ずべきは勿論、其際は特に招待狀を以て「某氏の爲に」と附記するのが必要である。招待狀には、別に諾否の回答を乞ふ旨の記載はしてないのが例であるとともに、通知を受けた人は、記載の有無にかゝはらず、何れかの回答をたすべきが例となつてゐる。

服装は男子は通常服で、モーニングが一番適し、婦人は外出用の服装で差支ない。料理は朝餐だけに簡單で、最初珈琲用の器具を排列して主人、主婦自からこれを圓め、其他の料理は食器とともに傍らの卓上に並べてあるので、來客自からこれを取る。レストランでやるときは無論給仕が持ち運ぶのである。

午餐會 晚餐會を開催するにしろくの關係上出席しがたき事情、例へば令嬢とか、獨身の婦人とか、老人とか、旅程を急ぐ人とかの都合から、略式としてこの會を催して晚餐會

に代へるのが多い。

案内狀は約一週間前が常則であるが、差迫つた場合は、多少通知期が後れても差支ない。諾否の回答はこれを求める語を附加するもしないも任意であるが、受けた者は直ちに回答すべきは前例の通りで、時刻は大抵正午十二時から午後一時までとなつて居る。

服装は男子なら通常服で、この場合にはフロック・コートが最適である。婦人は訪問服で、手袋は短かいものを用ひ、靴は男女共黒に限られてゐる。その他は晚餐會に準ずればよいのである。

第廿四節 夜會

夜會とは最も廣い範圍において儀式、祝賀又は社交上迎接のため知名の人士、知友人を招待して開催する集合で、大規模のものは國務大臣や各國代表者等が、祝賀のために開催するレセプションもあり、これには必ず舞踏が附物であるが、普通一般の社交界で個人主催のアト・ホームには、舞踏はやらないで音楽其他の餘興に止めることもある。

案内狀は大規模のレセプションには、晚餐會用招待狀を三

過問前位から送るのであるが、普通小規模のアト・ホームではアト・ホーム・カードを用ひ、通知期も一週間前より後れない程度ならば差支ない。大夜會ならば案内状には舞踏の語は別に記載してないが、小夜會ならば案内状の左下の隅に、必ず舞踏なり音楽なりの語を附記するのが例である。これが大夜會ならば特に舞踏の語を附記しないでも、必ずあるに相違ないが、小夜會ではそれが附記しないと婦人の服装の支度を惑はせるからである。夜會の案内状には回答を求めないのが原則とは言ふが、立食の席順や舞踏の番組作製上回答を求めらることもあるから、何れにしても直ちに出席の諸否は回答すべきである。時間は大抵午後九時又は十時が例となつて居る。

服装は夜會服、即ち燕尾服と絹帽であるが、舞踏の便宜のため屈伸自在な同型の高帽を用ひても差支ない。ネクタイは必ず白の蝶形、靴はエナメル製のティンナー・シューズでなければならぬ。大夜會では有勳者は本綬と勳章(略章)を用ふることもある(を佩び、小夜會ではこれを佩用しないのが例である。婦人は大夜會にはローブデコルターを着し髪に寶玉、羽毛を飾り白紗をかけ、帽は用ひず頭飾、腕輪、指輪は寶石を嵌めたものを用ひる。靴は絹製で同色のものを穿くのが法とされてゐる。

が、小夜會では黒い皮靴を用ひても差支ない。日本服ならば必ず白襟紋付を着用せねばならぬ。皇族御來臨の夜會には主人、主婦は必ず先きに奉迎し、主人は宮妃殿下の御手を執り、主婦は宮殿下の御手を執つてこれに隨ひ、皇族室に御案内するが、皇族御來臨の場合には一般の案内状にこの旨を併記して置くのが例である。かくて主人主婦から、知名の來賓を御紹介申上げるのが順序で、皇族御來臨の夜會では、主人主婦が主なる來賓を互ひに紹介し、小夜會では全部紹介の勞を執る場合もある。

舞踏は、番組作製して置いた番組順によつて行はれ、立食は通例十一時から十二時までに関われるが、それ以前主人主婦は豫め來賓の主なる男子婦人に手を引くことを依頼して置くのが例である。皇族御來臨の際なら、主人は宮妃殿下の御手を執つて先行し、主婦は宮殿下の御手を執つてこれに隨ひ、もし宮殿下が一方ならば、主婦が宮殿下の御手を執つて先行し、又數組の皇族方が御來臨のときは、主人は先づ御上席の宮妃殿下の御手を執つて先行し、御大席の宮殿下は、他の妃殿下の御手を執らせられてこれに次ぎ、同妃殿下は來賓中最上席の資格ある男子の手を

執られてこれに從ひ、主婦は御上席の宮殿下の御手を執つて後かゝのが例とされ、他の來賓は皇族方の立食場へ進まれる後から、徐々に讀いて行くのである。一般來賓のみの場合は、主人は最高位の婦人の手を執つて先行し、主婦は最高位の男子の手を執つてこれに次ぎ、他の來賓は互に婦人の手を執つてこれに從ふのである。

食卓は皇族御來臨の場合には勿論、顯官高位の來賓及び主人主婦のと、其他の來賓のとは別に設けなければならないが、小夜會にあつて顯官高位の來賓がなく、主客とも同地位の人のみであつたら、これを別にする必要はない。また夜會には衣箱預室(婦人化粧室、特別客室(貴賓室)、普通客室、ホール(舞踏場)、樂室附酒場、舞踏室附樂室、音樂室、特別食室、一般食室)等があり、何れも裝飾を施すのが例である。

第廿五節 アフターヌーンとアトホーム

午餐、晚餐の目的は一室に會して交誼を温めることを目的とするが、主要なる條件は會食である。これに反しアト・ホームは主要條件を會食とせずに、談話會のやうな意味で飲食品は紅茶、珈琲、菓子、果物、サンドウィッチ其他、手輕な料理を

準備するのみで、小規模のものなら茶と珈琲でも足りるのである。

アト・ホームの案内状は必ず主婦の名で出すことになつて居り、從つてこの集會は男子より婦人の數が多く、一種の婦人懇親會の觀がある。餘興としては小規模なら音樂位であるが、大規模のものになると、數百人の知己を招待して専門の音樂家を聘し、活動寫眞、舞踏を行ふこともある。案内状は小型のアト・ホーム・カードを用ひ、もし餘興があれば、左隅の下に附記するのが歐米の例であるが、日本文で書く場合は、案内文の末尾に附記して差支ない。また小規模のものならば、普通の書信用紙でもよい譯である。

服装は男子は通常服、帽子は山高が適當であるが、略して中折でも差支なく、ネクタイは白を除いた色物なら各任意でよい。婦人はローブ・ア・モンタントが普通で、靴は男女とも黒の短靴が正式であるが、黒でありさへすれば遠式ではない。赤靴や白靴は決して用ふべきでない。日本服ならば男子は羽織袴、女子は白襟紋付、時刻は大抵午後三時から六時までが例で、場所はアト・ホームの字義の通り自宅でやるのが慣例である。アト・ホームの氣輕なことは、來賓は時刻に餘り遅刻しない

以上、臨時參集で退席もまた臨時であり、且つ答禮は他日の接客日か、他の集会で遇つたとき述べればよいので、前に或まつて訪問をしなくともよいのが特色である。

第廿六節 茶話會

英語ではアフターモーニング・テイ、又はテイ・パーティといひ、略して単にテイともいつて居る。案内状は書状は正式だが、略して口頭、電話でも差支なく、アト・ホームと同様諾否の回答を乞ふ旨の附記はしないのが例である。時間は早くて午後三時、遅くて五時の間に開催する。

テイは即ち茶であるから、飲食物の用意は極めて簡便で茶、珈琲、チョコレート、菓子、果物、サンドウィッチ、アイスクリームなどを用ひ、酒はビール又はコクテールを用ひる。アト・ホームを婦人主催の懇話會とする、これは一層簡易な懇話會で、席間なども儀式張らず、圓形の卓子を幾箇か食堂内に置き、三々伍々相集まるに任せてよい。服装其他はアト・ホームと同様であり、散會時刻は遅くて九時頃までである。

第廿七節 園遊會

する會で、日本の披露會とその目的は同じである。案内状は新婦の両親または近親の名義で、必ず夫妻連名で式日の二三週間前に發する。

來賓服装は男子はフロック、絹帽、ネクタイは黒色は忌む。女子はローブデモンタント、和服ならば白襟紋付とせねばならぬ。來賓は先づ待合室に招ぜられたら、主人主婦に握手し、次いで新郎新婦に握手又は挨拶するのが例で、其他は晩餐會の作法に従へばよい。

第廿九節 宴樂及び餘興

食事中又は食後宴樂のあるときは、雜談を中止して靜かに傾聴すべきであるが、その宴樂に拙劣な點があつても兎角の批評を加へたり、演奏中に席を立つなどは主人の厚意に對する無禮のみでなく、樂手の勞に對しても甚しい侮辱を加へるものであるから、一曲が終るまでは着席して傾聴してゐなければならぬ。殊に主人が來賓接待の厚意で、特に催した音楽や餘興などには、技術の巧拙は問題外として、演技中はなるべく雜談を差控へ、一曲または一席の済む毎に、拍手喝采を送るのが禮儀である。

屋外に催す集會であるから、晴天を避ぶのであるが、當日になつて雨が降つたり、曇つたりすることがある。然かし既に日を指定して案内状が出てゐる以上、烈しい風雨なら兎も角、曇天や降りみ降らずみの程度の小雨ならば、開催するのが來賓に對する禮であり、來賓もまた遲延せず出席するのが作法である。

これにも大規模と小規模とがあるが、園遊會と名の付く以上他の會合よりは多人数を招待するのだから、案内状は主婦または夫婦連名で、遅くとも二週間前に出すのが歐米の慣例となつてゐる。然かし日本では歐米と事情が異つてゐるから、主人一人の名義でも差支なく、且つ案内状發送の期日も、一週間前くらゐまでは差支ない。

服装は男子は通常服のモーニング、フロック、帽は絹帽が正式であるが、山高帽も略式として日本では許されてゐる。靴は黒ならば短靴でも編上でも差支ない。和服ならば羽織袴、婦人は白襟紋付とすべく、婦人の洋装は華美なものを選ぶのが例になつてゐる。

第廿八節 結婚披露會

結婚披露會は新婦の實家の邸宅又はホテルなどで、知友を招待

第三十節 喫煙に就ての心得

宴會の際の喫煙は本來食後喫煙室でなすべきものであるが、晩餐會でも指洗鉢が出てからは煙草を喫んで差支はない。然かし同席に婦人がゐたらその許可を受けねばならぬ。歐米では婦人同席の場合は喫煙しないのが禮儀で教會、學校、病院、劇場、舞踏場、音楽會は勿論、汽車、汽船、電車内などでも別に喫煙室の設けがあつて、其處以外の喫煙は差支へる作法になつてゐるが、近來は上流婦人の間にも紙巻煙草を喫ふことが流行し、米國の如きは特に一流のホテルなどで、婦人喫煙室すら設備してある位だから、食後食堂の喫煙も許可さへあれば、婦人がゐても差支ないやうになつてゐる。晩餐會以外の宴會も、これに準ずれば大した間違はないが、食後でも婦人が多勢居合せたら遠慮すべきが紳士としての作法であらう。

尚ほ喫煙は自分一人でバツ／＼やるのは社交的でないから、隣席の人にも適宜自分の煙草入を出して薦むべきである。なほマッチは必ず自分で摺り、隣席の人が煙草を取つたら、それに先づ火を點けてから、自分のにつけるのが禮であるが、歐米では一本のマッチで三人が煙草に火をつけるのを不吉にしてゐる。

るから、氣を付けなければならぬ。日本人はこの葉巻に對する知識が乏しいが、元來葉巻は外部に巻いてある葉が大切で、それに小さな穴や一寸した疵があつては價值がないのである。それから葉巻に巻いてある帯紙は、その名稱を知るためであるから、付いてゐるまゝ喫んでも差支はないが、わざ／＼御丁寧に帯紙を一旦外して銀紙を除き、それへ又帯紙を嵌直すなどは、甚しい滑稽である。葉巻を喫みながら一口毎に、灰を落すのも滑稽沙汰で、上等の葉巻になると半分以上の長さまで灰は落ちないものである。紙巻煙草でも葉巻でも、口許に火のつくまで喫み續けるのは見苦しいから、適宜のところで割愛しなければならぬ。隣席の人から煙草を薦められたとき、遠慮は却つて先方の厚意を無にするものであるから、感謝を表して一本だけでもらふべきである。

第卅一節 洋式宴席の諸心得

食卓に着いたら相識と否とに拘らず、自分の左右及び正面の客とは努めて敬談を交はすのが禮である。殊にそれが外國人であつた場合などは、必らず自分の方から話しかけて交際するの

が作法であるが、もし言葉が通じないときは、附近の人に通譯を頼むとか、或ひは滑稽化せぬ程度の手眞似をやつても差支ない。然かし商賣上や事務上の話をなすべきでない。また他人を批評したり、隣席の人と馴れ合つたり、肩越しに席を距つた人と話したりするなども禁物である。暑いとき上衣を脱いだり、チョッキの釦を外したり、扇子遣ひなども禁物である。食事中疎忽で器物を破損などしても、主人に謝辭を述べるには及ばない。

日本式にその場で謝辭など述べると、宴席の歡びを殺ぐ慮れがあるからである。尤もその結果隣席の人の衣類を汚したりした場合は、例外であるから陳謝すべきが至當である。

食事中は他人の動作を注目してはならぬ。持ち廻りのとき隣席の人の様子などをジロ／＼見廻すは非禮である。また食堂内に犬猫などを連れて入るのは禁物だが、萬一紛れ込んで来た犬猫があつても、これに食物を與へたり、戯れたりするのも無作法である。

獻立表は何んの宴會によらず好個の記念物となり、殊に大宴會になると種々意匠を凝らし、費用を投じたものであるから、宴が済んだら必らず持ち歸るのが主人に對する禮儀である。

單獨の食卓または數人の會食なら別問題であるが、其他の宴會では來賓は一切給仕其他に心附を置いてはならぬ。家庭に招待されたときも同様であるが、獨り米國の習慣では、特に主人主婦から、使用人に心附を出さぬやうにとの注意があれば格別、さもないときには辭去の際給仕、外套預り人、門番、運轉手などに多少の心附を與へるのが例とされてゐる。

第四章 茶代と心附

茶代は日本の特殊習慣で、面白くない懸弊ではあるが、人間は感情の動物である。もらふ方で、與へる人と與へぬ人とに別して、待遇の差異を見せるとすると、理窟以外に虚榮も張りたくなるのは通有の弱點である。

ところで茶代を多く出すか少く出すかといへば、強ち多く出したからといって、それほど賞められる譯でもないし、また少し出して裏面にされる位なら、寧ろ出さない方が情口だとなる。取捨選擇が代數の式を解くより厄介な問題であるが、それにも増して厄介なのは、茶代を前に出すべきか後にすべきの問題である。一晩や二晩泊りなら、出立間際に勸定と一緒に置くのが通例となつてゐるが、永逗留となるとき

も行かぬ事情がある。然かし大體に於て後にする方が得策である。同時に先方をして、この客なら乾度茶代くらゐは出すと確認せしめて置けば安心である。

茶代や女中の祝儀は通例一般の客は誰れでも出すくらゐは知つてゐるが、料理番、風呂番などに氣のつく人は先づ稀れである。その稀れなところへ五十錢なり一圓なり、滞在日數に應じて心附を出して置く。すると一人の氣の付かない處へまで心附を出す位だから、茶代や女中に祝儀をくれるのは極り切つてゐる。と先方も安心して待遇に注意するであらう。

かうして置けば出立間際まで、當然茶代をくれる客として待遇してくれるのみか、料理番などへ通して買くと三度の食事にまで、その客の嗜好に留意してくれる利益もある。さうして出立の際滞在日數及び其間の待遇などに應じ、適宜の茶代と女中祝儀を諸支拂と共に下げてやればよい。

右で茶代の出し方の前後はすんだ。次はその率である。これは支拂金額の多寡及び滞在日數などによつて適宜に取計ふべきであるが、世間並としては茶代が支拂金額の二割から三割、女中祝儀が一割から二割といふ處で、これも支拂金額が三十圓以上になつてくると、當然その率は低下すべきで、さ

もないと茶代と祝儀に迫り倒されてしまふ。以上は主として二日以上の滞在に處する出し方で、一夜泊りや二泊りなら、こんな心配なく出立際に置けばよい。

心附 心附を盛んに振るまくのは米國で、家庭に招待された場合にも、その家の使用人などへ二弗三弗を與へる。従つてホテルや料理屋でも誰彼なしに成金ぶりを發揮してゐる。先づ飲食代總計の一割より少からざる律で二十五仙以上の心附を給仕に與へ、獨逸では全支拂額の一割以上、二割、英國は五分程度が標準とされてゐる。また外資預り人などへの心附は米國で十仙、英國では二片、獨逸などでは一割にこれには心附を出さない風習である。

右の割合で考へて、我國でもホテルなどに於て給仕に出す心附は支拂額の約一割、外套帽子預人は一回十位が適當のやうに思はれる。但し饗宴の際は會主から料金支拂の際總めて使用人全體へ、總額の五分以上を宴席の設備によつて、その率を増減して與へる慣例であるから、來賓は一々心附を出す必要はない。心附と同様なものが我國の料理屋、旅館などで女中に出す心附(祝儀)で、その率も心附と大差はない。また料理番や風呂番や下足番などに出す心附は、近來料理屋で

茶代を出す客が少なくなつたと同様稀になつたが、やるとすれば二十錢以上一圓以下の間で取捨すべきである。

日本ではこの心附に種々な名稱があつて旅館、料亭等の帳場に出すものは茶代、女中及び其他の使用人などに出すのは祝儀、頭などいふが、これを字義から解釋して見ると、茶代とは茶店などに休憩し、茶を出された代として遣つたのから始まり、祝儀とは何か祝ひのとき、喜びの品を頒け與へるのを現金に替へたもの、頭とは昔勝角力の頭髪に花をかざさせた古實から來たものと想像される。それが變遷推移して現今の如く、一般的に心附の代名詞になつたものである。

歐米に於けるチップの元祖といへば獨逸が本家で、最初は勞務者に慰勞の意で特別の金錢を與へたのが始めで、これをトウリングゲルト即ち酒錢といつたが、丁度日本の酒手と同じ意味である。これが佛國に流入してブールポール、矢張り酒代である。更に露西亞に侵入してナチャイは茶代となつてゐるが、日本の茶代とは意味が違ひ「茶でも飲んでくれ」の贈與である。其後英國に入つてから始めてチップとなつたが、これに二説あり一説には極く僅かの意から來たといひ、他の一説は「手早く用事を片付けてもらふ」の意であるさうだ。

第二編 美容の仕方

第一章 美容法

第一節 美の觀念の變遷

美しいといふことは、それだけで一つの大きな價值と役割を有つから、少しでも美しくありたいといふ欲求は、女性のみが獨占するものでない。たゞ現在までの社會情勢が、特に女性の美容を求め、美しさを望んだため、女性と美容とは離されたものとなり、技巧的にも進歩して來たのであるが、美の基準となると、随分漠然たるもので、その時代により美人の標準が異なつてゐる。

日本には天平時代には、丸顔で頬の豐かな肉體的美人が愛せられ、江戸時代に入つては歐式的面長な、柳腰の婦人が美人として歡迎され、日本式美人のサンプルとなつた。然るに近代では著しく生理的要素が加はり、均齊の取れた弾力ある體格と聰明美が第一に要求され、美人の概念を根底から覆へして、人工的な不健康な美が排せられ、自然的な健康美が要求されて

來た。即ち美の正統に立ちかへつたわけである。

第二節 肉體の美化

近代美容學の第一頁は、均齊のとれた弾力ある體格をどうして得るかにある。大體離れにでも、多くの長所と短所を有つてゐるもので、完全に美しい身體の持主といふものは、極めて少數である。故に一般的にいへば、自身の肉體の長所はますますそれを保持し、短所を補ふやうにしなければならぬ。

姿勢を常に正しく自然にしてゐることは、美的價值のあるものである。頭を高くし、胸を張り、背を眞直ぐにし、脚は膝の所で引きしめるやうにすると、美しい姿勢になり、歩行などの場合にも、それらを最も自然的に動かすとき、美しい姿勢が生れて來るのである。

大ぎに體格の美化に價值ある運動を擧げると、直立の姿勢で頸幹を屈したり、伸したりすることである。これは意識的に行はなくても、着物を脱いだり着たりする際、部屋掃除、寢床の上げ下しにも、自然に行はれる運動であつて、體格の美化に著しく効果のあるものである。尤もこの種の美化運動には、出来る限り伸ばすといふことが大切であり、立つてゐるときは腰

をしつかり浮かし、胸を張り、腹部を引いてゐなければならぬ。坐るときは上体を伸ばしてゐなければならぬ。

體軀の美化に最も効果あるスポーツは第一に水泳、第二に乗馬などである。これは全身の筋肉を、殆んど同様に使用するた

第三節 食物と美容

食物が美容に關係あることは、美容が健康を基礎とする以上

くしない程度で、美味しく、栄養的な食物を攝ることが必要であつて、それには食物を攝る質量と、運動とが釣合はねはなら

ない。偏食をせず、控へ目に攝り、運動に應じて少くし、就寝前は胃の負擔を軽くして置くことは一般の注意であり、肥満した

第四節 皮膚の美化

美しい皮膚は生々とした色艶と、滑らかな感觸にあることは勿論だが、夫等を得るためには紅、白粉を使用する技巧的なものよりは、醫學的な皮膚の美化がより以上に必要である。

ても便所に行く習慣をつけると、大抵はなほるものである。止むを得ない場合は下劑を使用するが、常時的に使用しないことが必要である。

次に著しく影響を興へるものは、婦人的疾患であつて、皮膚の色が牙えすどんよりとし、眼の周圍が黒ずんだりするのは多くこれに原因してゐる。便秘、分娩、産褥などによつて、皮膚の美しさを失ふのは事實であるが、その時期を經過すると、自然に美しさを取り戻すものである。母乳栄養をなすことは、美容上否とする傾向があるが、實際はかへつて母體の新陳代謝を高め、復舊作用を営むものであるから必要である。

以上の外に、栄養の悪いときは皮膚は強んで黄色を帯び、皮下脂肪が消失したときは、皺が出来ることも赤くなり、血液循環や呼吸作用に異常があると青くなり、貧血したり、腎臓や心臓に故障のあるときは、著しく蒼白くなる。是等を完全に除却して初めて美しい皮膚を持ち得るのである。

第五節 入浴

最近衛生上の見地から銭湯浴槽の湯を檢査して細菌数などを調べて銭湯の危険を説く學者もあるが、銭湯のためには今まで

どれほど清潔と健康を得てゐるかかわらないのである。住宅にそれほどの餘裕なく、燃料に意外の費用を要する都會住居の中流階級以下にあつては、誰も彼も浴室を設備して置くことは不可能であるから、銭湯がないとすれば垢の中から眼や鼻を覗かせなければならぬ。銭湯は都會住民になくてならぬ設備である。混浴であるから菌も居るであらうが、物事には利害が伴ふ。現在國民生活を標準とするならば、その利害比較は茲に記すまでもなからう。衛生の施設を完備させるのは甚だ結構であるが、銭湯の危険のみを説いて、浴室の設備のない都會住民を責かすのは少々罪である。

入浴は垢を去つて皮膚を清潔にし、血行をよくし、新陳代謝を促す保健上の良法である。皮膚の清潔は美容と密接の關係があり、皮膚が不潔ではいくら化粧しても、却つて垢と化粧物が混和附着して皮膚の分泌作用を阻止する。この衛生法からい

つても、また美容法からいつても、最も必要な入浴について的心得を左に擧記する。
浴湯温度 浴室の温度は攝氏二十五度から三十度内外を可とする。湯の温度は攝氏三十八九度以上四十三度までであるが、概して入浴好きの日本人は習慣によつて、西洋人よりは高温

度の湯に浴するのが例である。入湯時間 十分乃至十五分が適度で、熱い湯に餘り長く入つてゐるのは有害である。

浴湯の選擇 生理衛生などは疾病治療法としてならば温泉を推奨すべきであるが、單に美容法を主とする場合は鹽湯、鐵泉、硫黄分を含有する温泉には入浴しない方がよい。

洗 垢を去るには純良な洗粉か、玉子糖が皮膚のため安全で、石鹼はあまり用ひない方がよい。石鹼を用ふるならば、純良な品を選ぶのが必要で、遊離アルカリや他の不純物を交ぜたものは、皮膚を荒らすことが甚しい。

手 拭 手拭は軟かいものを用ひ、且つ決して顔を擦つてはならない。又在來の垢類なる臭類の布巾は、却つて皮膚の表面を粗雑ならしめる。

浴 浴後は乾いた手拭、タオルにて皮膚の湿りを速かに拭き、清潔な硼酸水、グロスマン、オデルミンなどを顔面に塗布すべきである。

第六節 洗面

洗面には、決して熱い湯を用ひてはならぬ。夏に冷水、冬に

熱湯などで顔を洗ふのは、顔面皮膚を刺戟してよくない。何時でも微温湯を用ふべきである。最も有効な洗面法としては、上等の無砂礫一合ほどを袋に入れ、微温湯に侵しよくしぼつた白湯を用ひること、またザラメ、氷砂糖を熱湯に溶解し、これを温めて微温湯にしたものを用ひること、礫砂の微温湯を使用することなどである。

右を洗面器に入れ、毎朝または化粧の先に洗面し、顔は後方から前方に向ひ、掌にて摩擦するのが顔面の皺を消滅させるに効がある。

第七節 素顔美

磨き上げた素顔の美は、化粧した美しさよりは數等奥床しく上品である。これには先づ身體を健康にしなければならぬが、その他の方法としては常に入浴を怠らず、また洗面は前記の方法により水は軟水を用ひ、入浴後もまた前記の方法で皮膚を洗ひ、殊に平素から荒れ性の婦人は、毎夜就寝前にリスリン若しくは漂白ナトリウムを顔面手足に塗り込み、毎朝これを洗ふやうにすれば脂肪や垢がよく取れて皮膚を美化する。

冬期寒風に吹きさらされると、皮膚は非常に荒れるから注意せねばならぬ。白粉を平素多く用ふる婦人は、皮膚の榮養に注意しないと鳥膚になり易いところへ、無暗に石鹼をつけてゴシ／＼磨いたり、白粉を多量に塗けたりしては、荒れを増すのみで癒るものではない。

第八節 整形美容

これは尖端的であり、又最も根本的な美容法であるが、實際的にはまだ／＼多くの問題が残されて居る。二重脣が魅惑的であると言つても、下手にすれば却つて厭味な顔になつたり、鼻術にしても外科手術は巧くいつても、他の顔の道具とそぐはない、冷たい感じの鼻になつたりし易いから注意を要する。たと齒列矯正だけは、美容的に効果はあるとされて居る。

第二章 化粧の仕方

第一節 白粉の塗り方

白粉は咽喉箇の下邊から、乳房の方へ全體に塗るのであるが襟の邊りから下部の方へかけて漸次濃くする方がよい。さうす

ると顔面を薄く塗つてゐても、生々とした化粧振りを見せることが出来る。若い人が顔を濃く塗つたときに、どうかすると顔の下處から掛けて黒い筋がつくから、塗るときによく注意することが必要で、薄化粧の場合は手拭か、軟かい紙で顔面を擦で置くことにも注意せねばならぬ。

入浴後の化粧は先づライラック水などを顔から顔面へかけて塗り、それを乾いた綿紗で拭き取り、顔へクリームを少量を塗つて綿紗で軽く拭き、その後へ白粉を顔面から塗り始めるのである。白粉を塗るには先づ水刷毛で鼻筋よりつけ始め、次に兩頬から頭へかけて薄く塗り、叩き刷毛を綿紗に巻いて白粉を拭き、濃い部分は水で拭す。それより掌に白粉を充分につけその手で顔の全體を平均に叩き氣味に抑へ、後へライラック水を水刷毛の代りにつける。若しこれが薄いときには幾度も繰返せばよい。

掌に白粉を塗るのは、粉白粉を顔面に塗るためではなく、手の脂肪を防ぐための必要からである。襟の方はライラック水を手につけて、それで充分に頸筋に繰返してつけて、その後を水刷毛で叩き、最後に上等の粉白粉を脱脂綿に撒き、抑へながら顔の全體へつけばよい。

第二節 口紅と白粉

口紅はチツクを指頭で唇へ揉みこみ、軟かい紙で軽く拭き取る。口紅は自分の唇の色に似寄つた紅を用ひた方がよい。白粉も色の黒い人は幾分黄色を帯びたものを用ひ、血色の悪い人は肉色の白粉、顔色の赤過ぎる人は緑色の白粉を用ひるなど、すべて皮膚の色と釣り合つたものを選ぶことが大切である。昔から片化粧と稱し白粉だけ塗るのは、不祝儀のときばかりに限つた位であるから、一寸紅をさして後を拭き取つて置く位はしない。折角の化粧も引き立たないものである。鼻の低い婦人は青味を帯びた白粉を、眼の際から鼻の峰の兩側へザツト引く。斯うすると目鼻が高く見えて化粧も引立つてくる。

第三節 雀斑を隠す化粧

雀斑のある婦人は、汗気の少ないクリーム耳掻一杯くらゐを顔の全體へ塗りこみ、雀斑のある部分へは頬紅を塗り、その上から粉白粉をつける。それでも雀斑の見えるやうなら更らにその上へ頬紅を塗るとよい。

第四節 荒れた顔の化粧

晴天が続いて空気が乾燥すると、殊に冬季などは顔が荒れて化粧も鮮やかに出来ぬものだが、これを防ぐには毎夜寝る前に加里性質を多量に含ませ石鹼を掌につけ、頸筋から顔面にかけて擦で廻し、その後を微温湯で石鹼氣を脱ぎ、水氣の無くなるまで拭き取つてからレモンクリームとか、コールドクリームを掌に受けて、顔面から頸筋にかけて薄く塗つて置けばよい。

顔面へ塗るときは指頭へ力をこめて、逆に塗り込むやうにして、頬から頬へかけて、徐々に塗る。かうして五六度も塗つてゐる間に、自然と暖かくなつて頬へ血の氣がさして来るから、さうしたらそのままで寝て翌朝顔面を洗ふとき、前夜のクリームを洗ひ落して朝化粧をするのである。

第五節 春の化粧

春先きは顔面に地荒れしたり、分泌物が生じたり、化粧が崩れるものである。これを預防して皮膚を美しくするには、麻布の練袋を使つて顔面をよく洗ふことが必要である。分泌物が

多いと化粧する下から脂肪が浮き出で、鼻の頭など俗に銀ばるといつて釣げやすくなる。それで春先きは寒い時分のやうに白粉下とか、クリームとかいふものを使ふ必要はない。顔面から出る自然の分泌物を白粉下に用ひる方が、白粉が釣げないで立派な化粧が出来るのである。

化粧をするには、顔面をよく洗つてから、水白粉を丁寧に塗り込む。厚化粧をするなら、薄化粧を幾度も繰返す方がよいので、一體に厚く塗つても完全には出来上るものでない。

第六節 夏の化粧

夏の化粧には、先づ皮膚の垢を洗ひ落すことが肝腎だから入浴するか蒸し西洋手拭で垢を拭き取るかして、充分に皮膚を柔らかく滑めてから、素化粧に取りかゝる。素化粧をするにはグリスリン製の白粉下とか、クリームをよく皮膚へぬりこみ、軟かい紙で一旦それを拭き取つてから本化粧をする。尤も脂肪性の婦人ならばグリスリン製、荒れ性の婦人なら脂肪製のクリームを選むべきである。白粉を付けるときは、白粉下のまだ充分に拭き切らぬを程度として取りかゝるのがよい。

水白粉を使つて薄化粧をするには、白粉下の乾き切るのを待

つて、指頭で水白粉を丁寧に塗り、濡れた手拭でソツト叩いてから極く少量の粉白粉を、刷毛でまだらにならぬやう軽く拭いて置く。練白粉を使ふ場合は白粉下の乾ききらぬ間がよろしい。斑が出来たら濡れた手拭とか、刷毛で取り過ぎないやうにして取る。粉白粉で薄く前のやうに叩いて拭き、頸と顔面では頸を濡く顔面の方は成るべく生地に近い薄目に刷くのである。

第七節 海水浴の化粧

海水浴へ出かける場合には、先づ顔の全體へクリームを刷けてザツト拭き取り、その後へ濃く白粉を刷ける。海水浴から歸つて来たたら鉛分のない清水で、植物性の洗粉なり米糠でよく顔を洗ひ、その後を清水で洗つて水氣を拭き取つてから、化粧水を塗つて白粉を刷けて置く。寝る前にも洗粉とか米糠で顔を洗ひ、化粧水を塗つて置くやうにすればよい。

海水浴や温泉場へ行き、皮膚の荒れたのや色の黒くなつたのは急に恢復するものではないから、氣永くソロ／＼恢復させねばならぬ。その應急手當として、汗が出たなら微温湯で押つた手拭で汗を拭き、顔を洗ふには微温湯で植物性の洗粉を塗つて洗ひその後へ糸瓜の水、胡瓜の水などを掌に滴して指頭で頬か

ら顔際へかけて逆に塗り込み、それへコールドクリームとか、マフサージクリームを指頭で薄く顔面へ塗りこみ、その上を西洋手拭で軽く拭いて置く。さうして白粉を刷けたら、その上を粉白粉とか、水白粉を薄く刷いて置くのであるが、出来るなら皮膚の荒れの恢復するまで、白粉を刷けぬ方が安全である。

第八節 秋の化粧

秋の日に焦けると、露の通りな白さにならないから、或るべく日光を直接に受けないやう、外出の時などには洋傘を用ひることを忘れてはならぬ。顔面を洗ふには米糠を用ひて静かに軽く洗ふのである。湯上りのときなどに、冷りとする秋風に當らぬやう注意も肝要である。化粧するには先づ顔面へマフサージクリームを塗つてよく刷り込み、その後を胡瓜の水を掌へ滴し、指頭で平らに刷り込み、別に洗面器へ微温湯を移し、一旦スツカリ洗ひ落して、日除けの化粧水をウツスリと塗り、その後を堅く押つた手拭で拭きとり、白粉を少し薄く塗つて濡れた手拭で拭かないやうにし、白粉が浮き上つたときは少し白粉を叩きつけて置き、頬紅を少し華やかに塗つて置けばよい。

第九節 頬紅

頬紅を自然らしく見せるには、白粉を塗る前に頬紅をつけた方がよいわけであるが、頬紅は肌にはチカにつけると紅やけが出来易いから、下地は化粧水だけでなく、クリームもつけて、頬紅が毛穴の中まで滲透しない、やうにする。それから水紅や煉紅は、粉製よりも紅やけの甚しいものが多いから成るべく使はぬこと。若し夜のお化粧などで粉紅では不十分な場合であつたら、良質の口紅をコールドクリームで伸ばしてつけると綺麗につき、頬と唇の色が同じでよい。

第十節 濃化粧

濃い化粧は白粉を三度に塗り、クリームを塗つた上へは掌で白粉を刷けてはならぬ。それは掌の温みでクリームが溶けて、白粉が寄るからである。こんな場合には、板刷毛で白粉をつけ、その後を牡丹刷毛で刷き、タルカムパウダーをたつぷり

掌でもんで顔面と頸とを叩き、白粉を毛孔に入れる。さうして浮いた白粉は、叩刷毛で打ちながら濡れた手拭で拭き取るのである。

第十一節 眉

眉は近代化粧をリードするものの一であるが、薄く自然の眉を修整する程度につけないと、顔の表情が全然異つて固定した眉を生じやすい。眉の引き方も勿論その顔によさはしく、丸顔の柔和な感じの顔に、ディートリップヒのやうな、吊上つた細い眉は滑稽であるし、豊かな肉付の顔には流行おくれでも、矢張りやゝ太目の眉が望ましい。

第十二節 アイシャード

アイシャードは眼を大きく、陰影の豊かな顔にするものであるが、下手に塗るときは眉の如く下品に見えるものである。色は日本人としては茶、青が最も無難で、紫などには手を出さないに限る。瘦せた眼の窪んだ人が使用するときには、ますくその感を深めるから注意を要する。

第十三節 頸首の黒くならぬ手入

多期になると頸首や手足が黒くなる人がある。これは幾ら洗つても毛立ばかりで一向綺麗にはならない。かゝる人は夜寝る前に、白粉を頸首や手足へ薄く塗つて、毎朝洗粉又は米糠で洗ひ落とすやうにし、一週間も続けてゐる間に、露の通り白くなるものである。

第十四節 顔の荒れの豫防

外出の際に素肌風の當るよりも、白粉の上からであれば幾分風あたりが弱くなるから、皮膚を保護する上からよいことである。白粉でなくとも、化粧水でもつけて外出するやうにし、冷たい風にあたつて来たときには、直ぐ暖かな室内に入ることは、皮膚のためによくないから、玄関とか家の入口で両手で三四度軽く擦で廻してから、暖かい室内に入るやうにすれば、荒れを防ぐことが出来る。

第十五節 小皺の防ぎ方

日本酒を少量づゝ顔面に塗つて置くと、皮膚が生々して来る

から小皺が奇らなくなる。殊に神経質の顔面のトゲトゲしくしてゐる婦人は、毎夜少しづつ酒精分を用ひて寝る方がよい。肉食するよりも菜食する方が小皺が出来ないものであるが、殊に海藻を食べると顔の光澤がよくなり、筋肉も美しくなつて毛髪の榮養にもなるとされて居る。

第十六節 クリームとベルツ水

大抵の人は顔を洗つた後でクリームやベルツ水を使ふ。クリームは皮膚を保護するためによいが、あまり保護し過ぎると皮膚を弱くする憂ひがある。それで一度クリームを使ひはじめたら、いつも丹精してつけなければならぬ。湯上りなどちよつと手後れをしたり、忘れたりして一度でもつけずに置くと、皮膚が弱くなつてゐるため直ぐ顔が荒れる。ベルツ水もよいが、長く使つてゐると却つて皮膚が硬くなる嫌ひがある。

第十七節 面皰と雀斑

面皰を治すには加里酸一〇〇に安息香丁幾六〇を混ぜて皮膚にすり込む。またアルコールにリズリンラウヘンデル精各五〇と、サルチル酸二を混ぜ塗布してもよい。黒子を取るには硝酸

を筆の先につけ、一日一回づつ黒子の頭へ塗ると一週間位で取れてしまふ。

雀斑は白灰の粉末を蜂蜜で解き、寝る前に塗りつけて翌朝洗ひ落し、これを根氣よく行へばとれる。

歯を白くするには礬砂十六匁を一升の水に入れて火にかけ、溶解したら下し、冷えぬ内に樟腦及び没薬一匙づつを加へて瓶に入れおき、毎朝盃一ぱい位を一合六匁ほどの微温湯に混ぜて歯を洗ふと、光澤を出すばかりでなく歯質をもよくする。

第十八節 マツサージの仕方

マツサーヂに使ふクリームの量は、顔だけに茶匙に三分の一、頸には三分の二位である。若し脂肪性の人ならば、多少少量に顔へ塗りつけて、指が自由に滑る程度でよい。マツサーヂは少くとも五分間はしなければ効果がない。その方法は

- 一 鼻の筋を縦に
- 二 口の周圍に添つて半圓形を交互させ
- 三 唇の兩端を中から外へ廻す
- 四 兩頬を外へ
- 五 鬚から耳の下へ向けて

六 眼の周りを目頭からグルリと一週回させる(こゝは特に軽く)七 頬は兩外へ

八 小鼻は鼻先へ向けて螺旋状に

以上を中指と薬指で約五六回繰返すのである。その後を石鹸で洗つては何の効果もない。脱脂綿かガーゼで、クリームを拭きとつてから、開いた毛穴を引きしめるために、アストリゼントローションで拭いて置けばべたつかつた。

第十九節 毛皮を纏つた時の化粧

毛皮のシヨールやオーバーも、嚴寒時にはお洒落の域を越えて防寒實用として一般化して來た。然かし大體日本人が毛皮を着こなすことは、却々むづかしいことであるから、化粧や髪型も特殊な注意をしないと、折角の毛皮も毫無しになり勝ちである。

先づ毛皮は何れかといへば、日本人のやうな黒髪には不調和であるし、また線の細い平面的な顔は、毛皮に壓され易いものである。アクセントの強い、そしてスツキリした化粧をすることが秘訣である。徒らに白粉、頬紅、口紅、眉墨などを惜しみなく使つた顔は、むしろ動物園さへ聯想させて滑稽な感じがす

るから、白粉は抜きにするか、つけてもチヨコレイト色位にし、眼や唇はどちらか一個所を強調すると、くつと立體感が出て効果的である。

次に髪はすつきりと上げること、耳の後や襟際のモシヤクした髪型は一番野暮であるから、襟元はぐつと上げ、ウエーブよりも大まかなカールやロールで纏めて、油をつけてしつとりと艶を與へるのである。

最後に毛皮を纏つたときに、如何にも寒さうに背を丸くしてゐるのは、毛皮の手前殊更みつともないから、必らずシヤンと眞直にして、颯爽と歩かねば釣合はない。

第二十節 不幸時の服装と化粧

不幸時にはいふまでもなく、服装は成るべく質素にしなければならぬ。式法としては草束ねに髪を上げて、白の着物に白の帯であるが、一段略して黒の着物に黒の帯を用ひても差支はない。

化粧は片化粧といつて、決して紅を用ひてはならない。唇にも紅でなく白粉をつける。その白粉も薄くつけるのである。髪には白元結は用ふべきでない。今では若い婦人が銀杏返し

の上に、黒の元結をかけてゐる者を見受けることがあるが、昔は夫に死別してからでないかと、黒元結は用ひないことになつてゐた。帯の結び方も白の着物のときはかけ下りのときのやうに結び、黒の着物のときは角の出しに、下の方に小さく地味に結ぶのが、哀悼の意になつてゐるのである。

第廿一節 化粧品は今昔

昔から爲の美は肌理を細かにして色を白くするといふので化粧料の一つとして使はれたが、爲の美の中の蛋白質が整肌、漂白の作用をするのである。またサトイモの葉の上に落つた露で顔を洗ふと、皮膚が滑らかになるといつて、田舎の娘などはよく朝戸外に出て、露で顔を洗つてゐるが、硬水の井戸水よりも、天然の蒸溜水の方がよいのは當然である。朝露ならば必ずしもサトイモの葉の上のものとは限つてゐない。

十五世紀の頃英吉利の婦人が用ひたといふ、マヌター・アレキス美顔術といふのは、若い小鳥を菓立しないう前に捕へ、四十日の間茹卵で飼育したのを絞殺し、タルク・アルモンド油などで包んで、蒸み出した汁を使ふのだが、恐ろしく手数のかゝつた化粧水である。

先年英國のある好事家が、今から五千年前の昔、即ち埃及のツタンカーメン王が、ルキリアの墓場に埋葬された頃の、埃及の一貴婦人の化粧クリームを掘り出したことがあつた。堅く密封された陶器の容れものの中に入つてゐたといふが、分析して見たところ原料は殆ど獸脂が九割、あと一割は樹脂であつた。「なんだ、そんなものが貴婦人の常用クリームなのか？」と輕蔑してはいけぬ。現在盛んに婦人が使つてゐるクリーム類も底を割れば、脂肪または脂肪酸を曹達で鹼化したものとか、いろ／＼の脂肪や樹脂をまぜて、香料を加へたものとかであるから、エニシダの匂ひがしたといふ大昔のクリームでも、馬鹿には出來ないものである。

洗臉の役目をするクレンジング・クリームといふのが出來たのは今から二十七八年前で、當時亞米利加の舞臺化粧には五十何種もの白粉が使はれてゐたが、一度塗るとなかく／＼結露には落ちない。そこでこの白粉を落とすために、脂の強いクリームが出來て、それを舞臺用コールド・クリームと呼ばれたが、第一値段が高い。白粉を試きとるだけのクリームであるから、安くても量が多ければ困るといふので、現在廣く使はれてゐるやうな比較的安いクレンジング・クリームが出來たのである。容

物も當時からこのクリームに限りブリキ鏡を使つたので、今もクレンジング・クリームは鏡入となつてゐる。

第廿二節 白粉の良否の見分け方

白粉の良否を鑑別するには、なか／＼手数のかゝるものであるが、要するに鉛分の含有してゐないのが無害なのである。これを最も簡単に検査するには、茶碗へ少量の白粉を入れ、これに半分ぐらゐの水を混和して攪拌し、硫酸少量とアンモニヤ二三滴を加へる。この場合鉛分を含有してゐる白粉は、忽ち黒色に變ずるからすぐわかるものである。

第廿三節 石鹼の見分け方と使ひ方

石鹼は日常生活に於て最も廣く使はれてゐる化粧製品の一つで、種類は多いが用途によつて大別すると、洗濯石鹼、化粧石鹼、工用石鹼、薬用石鹼等になり製造方法によつて大別すると、粹練石鹼と機械石鹼とである。粹練石鹼は粹練石鹼よりも、乾燥時間がかゝらないから、混ぜ物をすることが容易で従つて値段も安いが、石鹼の固まり方が十分でないため、水を吸収して形がくづれ易いのが缺點である。

石鹼の原料には種々あるが、普通の硬い石鹼は、油脂に苛性曹達を加へて製造する。良否を見分けるには、大體夫の標準によればよいが、色や香気は質の良否に關係はない。

一 游離アルカリを含まぬこと。石鹼の端をナイフで切り取り嘗めてみて非常に辛くピリ／＼と舌をさす場合は、アルカリ過剰の石鹼であるから、これを使用すると顔や手の皮膚を荒し、また衣服の質を傷める。

二 游離脂肪を含まぬこと。石鹼の表面に密着させて西洋紙で包み、一週間ぐらゐして取り出し、もし包紙に油がにじんでゐる場合は脂肪分の多い石鹼であるから、これを用ひると汚れが落ちないのみならず却つて油で汚すことになる。

三 澱粉や粘土等の不純物を含まぬこと。湯に溶かしてヨード丁幾を二三滴たらしめて、青色に變ずるものは澱粉が混せてある。また試験管に入れアルコールで溶かして見て、溶けるものは純粹の石鹼であるが、粘土は溶けずに沈澱するか

らすぐわかる。使用上の注意をいへば、品質さへよければいゝので、家庭用としては香料のために高價となつてゐるものを用ひないこと。また一度に多くつけるよりも、先づ少しづつにつけて顔

を洗ひ、再度繰り返すとよい。頭部や女の髪などは殊にさうで、一旦湯で洗ひ次に少し石鹼をつけて洗ひ、今一度洗ふと石鹼は少なくてすみ、落ちも一番よい。尚石鹼入れは使用後必ずよく水気を拭き取つておかねばならぬ。

第三章 毛髪の手入

第一節 毛髪之美

折角眞直に伸びてゐる黒い髪をわざと焼くなどをしてあて縮らす風が最近流行するが、あれは日本人の體格と皮膚、色の美を損ずるばかりでなく、二千何百年の歴史を有する習慣風俗からいつても感心出来な



正装用の髪と髪飾

い。性来の縮毛、赤毛、癖毛で満足に日本髪を結ひ得ない人が、その缺點を彌縫する手段として

てならば已むを得ないが、満足な頭髪を持つてゐる人まで、頭に僅の集を造る必要はないと思ふ。昔支那の褒姒が肺病であつたか胃病であつたか、始終胸先に痛みを覚えるので自然眉の間を翳めてゐた。その風情が雨に憐む海棠の趣があるといふので後宮三千の美妃が、みなその眞似をしたといふ話があるが、燒はこれに類した愚かさである。日本の婦人としては矢張り鳥の瀬羽色、漆のやうに艶々としたのが美しい。

第二節 毛髪の手入

毛髪の手入は毛根に血行をよくすることが大切で、それには毎月二度は髪を洗ひ、毛髪に附着してゐる塵埃や分泌物などを除却しなければならぬ。これは音に毛髪之美を保つばかりでなく、不潔と不衛生から免かれる必要な心がけである。その上空気の流通をよくするために、時々解いて風を通さなければならぬ。毛髪洗滌料としては鶏卵の黄味、または卵白を塗つた後ち微温湯で洗ふか、或は布海苔に饅頭粉を交へて微温湯で洗ふかして、最後の濯ぎ湯の中に樟油二三滴を落して濯ぐのがよい。

樟油の濃精に布海苔を混せて洗つても、毛髪を痛めず軟かに黒さを増すといはれてゐる。

石鹼、曹達を用ふるのは、毛髪之脂氣を去つて折れ易くし、且つ赤くするから差控へる方が安全であるが、已むない場合石鹼で洗ふならば刺戟のない純良な石鹼を微温湯に溶いて濯ぎ出す。石鹼でぢかに頭髪をゴシゴシ洗つてはならない。

また毛髪を洗ふにあまり油氣が脱けてから、力一杯揉むと毛髪を損める。毛髪之澤山ある人が癖毛になるのは、無暗に揉み過ぎるからである。洗ひ髪をなすには西洋手拭で幾度も水氣を拭き取るか、自然に乾くのを待つ方がよく、日光へ晒すと赤くする虞れがある。さうして乾いた毛髪には、樟油を頭之地から毛髪全體に萬遍なくすり込むのである。

雲脂を取るため純良の酒精をガーゼに含ませ、頭之地を丁寧に拭くのは血行をよくする上にも有効であるが、毛髪に酒精が直かにつくと赤くなる虞ひがある。

第三節 癖直し

雲脂を除くため、櫛の齒を立て、頭部之地を掻くと、氣持のよいものであるが、櫛の齒を立て、髪を作る原因になる。又

癖直しに熱い湯を用ひるのは衛生上害になるから、成るべく熱い湯は用ひない方がよい。雲脂の多量にある人は、癖直しの湯へ石鹼を少し加へ、布片に溼して頭部之地肌を撫でると清潔になる。毛髪は毎日梳く方がためになるやうに思はれるが、毛髪のためには餘り櫛数は使はぬがよい。埃さへ被らなければ、三日に一度ぐらゐの程度が適當で、梳く際には毛髪之赤ばんだ細い婦人は、生際から一寸ぐらゐ後の方を梳くやうにせぬと、次第に生際が薄く脱けあがつて来る。

第四節 脱毛の豫防

夏でも運動さへ怠らなければ食慾が進み、食慾が進めば髪が落れるから、古い毛が脱けて新しい毛に生え代り、毛の脱け落ちることは決してない。暑いからといって運動を怠ると秋になつて毛が落れる。働いて能く食へ養生さへ上げれば、春夏秋多いつも毛の脱けることはない。次に副食物は寒中には脂肪の多いもの、夏は淡白したものを選び、夏ならば月に二回、冬ならば二ヶ月に三回づつ毛髪を洗ふのが適當であるが、特別に汚れるやうな仕事に従事する人は、勿論これ以上に洗滌しなけ

ればならぬ。

第五節 潮水に毛髪を濡った場合

海水浴などでは潮水へ毛髪を濡けぬやう注意することが肝腎であるが、若し毛髪が潮水に濡った場合は、樟油の搾り滓、鹽粉、布海苔などで毛髪を洗ひ、洗つた後を清水に純良樟油を四五滴落して洗ひ、水気を拭ひ取つてから少量の樟油をつけて置くと毛髪は赤くならず黒い光澤を保つことが出来る。

第六節 夏の髪のかみ方

夏期は櫛巻が一番であるが、丸髪は東髪よりも入毛が少ないからよい。夏期は頭部を軽くするやうに心掛けることが必要である。夏期には毛髪の脱けることは心配するが、日に三十本から五十本ぐらゐは普通で、決して病氣のためではない。

第七節 涼しい東髪

東髪にはいろ／＼な芯を入れるから、熱と汗のために息苦しくて頭部が時々痛くなることがあるが、これを防ぐには黒色の薄絹を小さく三角形か細長く縫ひ、指輪を入れて口を閉ぢ、



社交ダンスの踊り方

ソゴ、フレンチ・タンゴがあるやうに、時代によつて次々に新しいステップが考案されてゐる。大體に於てスロー・ト

ロツト、タイトク・ステツプ、モダン・ウォルツ、モダン・タンゴ、ブルースの五種を心得て居れば、どこへ出てても恥を掻くやうなことはない。

スロー・トロツト 踊りの基礎をなすものは歩行とスリー・ステツプで、他のステツプはこの二つの組合せか變型であり、音楽は四分の四拍子の緩やかなもので、リズムに強弱長短はあつても、伴奏は強弱々々と正しく反覆して聞かれる。ステツプの踏出しはこの第一と第三でやるので歩行には各歩とも二拍子を費やし、スリー・ステツプや廻轉には、緩速と緩歩は二拍子、速歩は一拍子を用ひる。基本的ファイギ

入毛の下へ入れて置けば、風の吹くたびに何となく微かな香りがして、汗の臭ひも取れ熱も除れてよい氣持になる。

第八節 病人の毛髪

病人でも身體を動かさぬ程度に、毎日毛髪の手入れをせぬと恢復後に目立つて毛髪が脱けるから注意が必要である。禿頭は頭部を重曹水でよく洗ひ、イヒチヨール二・五とラノリン二・五・〇を混和して軟膏として用ふればよく、又電氣療法も効果がある。毛を濡くするには硼砂一匙に酒石酸四グラム、オルモンド油四グラム、ベルガモット香油一滴を、三合餘の髪油に注いでよく洗へば美しくなる。

第四章 社交ダンス

ダンスの種類 現代一般に行はれて居る社交ダンスは、フォックス・トロツト、ブルース、ウォルツ、タンゴの四種類に大別されるが、これ以外にも、フォックス・トロツトにはスロー・フォックス・トロツト、タイトク・ステツプ、ルンバ・トロツト、ミドウェイ・リズム、ウォルツにはヘチチーション・ウォルツ、モダン・ウォルツ、タンゴにはアルゼンチン・タ

ニアは歩行、スリー・ステツプ、フェザリー・ステツプ、右廻り、左廻り、逆ウエーヴの六種である。

タイトク・ステツプ この踊りはテンポが幾分速く、一分間五十二小節ぐらゐの伴奏される。その輕快にして愉快なリズムは踊る者をして華やかな情調に浸らしめるのである。

基本的ファイギニアは歩行、ツリー・ステツプ、右廻り、左廻り、四分の一廻り、ジグザグ、クローズ・シヤツセ等であるが、必ずしも以上全部を知らねば踊れない譯ではなく、一二は缺けてゐても差支はない。

ブルース トロツト同様四分の四拍子であるが、スロー・トロツトよりも一層緩やかでアクセントも一、三よりも二、四の方について居り、テンポが緩慢なため初心者にも踊り易い。

基本的ファイギニアは歩行、シヤツセ廻轉である。ウォルツ ウォルツは社交ダンス中最も古いもので、現在のモダン・ウォルツまでに幾多の變遷を経、テンポも六十小節から三十六小節にまで緩くなつて居り、餘程経験を積まないと輕快には踊れない。

基本的ファイギニアは歩行、右廻り、左廻り、チエンヂ（スリー・ステツプ）で、音楽は四分の三拍子、リズムは正しく

一二三、一二三となつてゐて一が強く、二三は緩く聞える。ステツプは常にこの第一拍子の強で踏出し、原則として第三拍子で兩足を揃へる。然かしヌリー・ステツプの時は揃へない。

またこの踊りに必要なものは浮揚で、即ち第一歩の終りから爪先まで立つて身體を浮上げ、第二歩で浮いたまゝ足を運び、第三歩で足を揃へて身體を落すのである。

タンゴ 最近のタンゴはモダン・タンゴで、アルゼンチン・タンゴは殆んど顧られない。タンゴの曲は情調纏綿たる哀調で組方も他のダンスのやうに兩人正しく向き合ふのでなく、互ひの身體が何れも少し左寄りに位置し、寧ろ男子の右膝が婦人の右膝に近く向き合ふ。歩行も他のダンスは足を床から離さないが、タンゴは必ず足を少し床から離して歩く。

そのファイギニアの重なるものは歩行、プロゲレッツィヴ・サイド・ステツプ、左廻り、サイド・プロムナード、バック・コルテで、音楽は四分の二拍子、一拍子一步を原則とし、歩行以外は一拍子に二歩行く場合がある。即ち速く緩で一歩子二歩、緩歩は一歩子一步である。タンゴはブルースと同じくらるで、歩幅がブルースより幾分か狭くなる。

ルンバ ルンバは中央キューベの民踊で、千九百十四年頃既に世界を風靡したが、身振りの多い野趣に富んだシャッセが、近代人の意に適ひ再び流行を來したものである。

トロット同様四分の四拍子で、一分間四十四小節から四十六小節ぐらひ奏する。重なるファイギニアは歩行、右廻り、左廻り、クロツク・シャッセとチターション、リンク、コルテ、ルンバ・ターン、サーキユラ・ターン等であるが、後の二三は知らなくても踊ることが出来る。

第三編 服装の心得

第一章 服装と禮節

第一節 我が國現代の服装

現代我國の服装は、實用服としては洋装時代といつても過言でなく、最も保守的な家庭婦人の服装でさへ、夏季は殆んどホームドレス全盛時代の觀を呈して居る。然かし無條件に取り入れた洋装も、その發祥地たる歐洲地方とは、夏季に於ける氣候状態を著しく異にし、また冬季に於ても室内裝備の不完全な我國の住宅に於て、そのままの洋服が衛生上特に體温調節補助機關としての役目の上に、大きな缺陷のあることに氣づいたやうで、言はゞ今や服装再吟味の風潮が見えてゐる。夏時に於ける男子のノー・ネクタイ運動、冬季に於ける婦人子供洋服の保潔問題などがこれを反映するものである。

儀禮服としては男子は、公式上のもは祭服を除いては、洋装を以て禮装と規定されて居るので、自然一般通常禮服としても専ら洋装となつたものであらうが、女子は公式にも和洋二様

式が採用されてゐるためか、傳統を重んずる婦人の禮服としては斷然和服であるといひ得るのである。然かしながら一面社交服としての洋装も、次第に増加の傾向を示して居る。

第二節 習慣と作法

「形正しからざれば威重からず」は古今東西を通じての金言である。然かし形を正しくせよとは、何も美服を飾れとの意味ではない。服装を整へるのは威容を正しくすることで、自己を正しく保ち、正しく示す必然の手段である。

ところでこの服装には各民族によつて異つた風俗、習慣、作法があり、また時代の推移により、生活の必要に應じ改廢されるべきものもあらうが、必要なくしてこれを破壊するのは、民族の傳統歴史を無視し、自己の矜持を失ふものである。

自己を正しく示し、また他人を正しく見るには、先づ以て服装に於ける正しい習慣と作法とを知らねばならぬ。

第三節 和洋共通の心得

服装は常に正しく、常に清潔にすることを怠つてはならぬ。垢の付いた衣服を着てゐては、他人に對して不快の念を興へる

のみでなく、自己の健康にもよくないのである。「服装の皺は心の皺なり」との西諺を味ふべしである。

服装はその基準を自己に見出さねばならぬ。他人が着て似合つたからとて、それが自分にも似合ふであらうとの考へは間違ひである。身長の高い人と低い人、瘦せた人と肥つた人、色の白い人と黒い人などの差によつて、似合ふべき服装も相違があり、身長の高い人が格子縞を着たり、肥つた人が横縞を着たりすれば、餘計に天性の弱點を暴露する。服装を撰擇する前に、先づ自己の特長と缺點をよく知るのが肝要である。

百合の清楚、牡丹の濃艶、自然の美は配合に無理のないところに發揮される。徒らに商人の宣傳に惑はされ、流行にかぶれるのは自己没却の甚だしきものである。身體に似合はぬ千金の美服よりは、自己の身體に合つた浴衣一枚の方が、どれほど配合の美を得るかを考へねばならぬ。

第二章 和服の着方

第一節 舊慣との差別心得

日本人として當然守らねばならぬのは、和服に於ける作法で

ある。元來日本人と歐米人とは、骨格において根本的に相違があつて、何千年來日本人の體格と習慣に適應するやうにこしらへられた和服と、明治の初期より一般に行きわたつた洋服と何が似合ふかは、眼の判断があまりにも明らか過ぎる。然かし實際生活上の必要から、その似合はぬ洋服を着なければならぬ場合が多くなつた現代では、時代遅れの國粹保存を擔ぎ出すのも目先の利かない愚かさであるが、さりとして生活に何等の必要をも認めないのに、好んで似合はぬ洋装をするのはそれにも増した愚かである。

これを反對に考へて、外人が和服を着けたさまを見ると、随分滑稽に思はれる。それと同じく日本人が洋装したのを外人が見たら、可なり滑稽を感じる無作法もあらうと思はれるのである。出来れば和服を着、日本語を使つて世界を歩きたいのであるが、それが出来ないため、不似合の苦痛を忍び、生活の必要上洋服を着るのであるから、必要のない人は和服を着けてゐる方が作法上安全な方法である。

第二節 時代に順應の作法

時代に伴つて生活の手段や方法は變つて行くから、その必要

に應じて服装の作法が變つて行くのは是非もないが、改善を加へる前に、一應據つて來つた舊慣なり作法なりを知つて置かねばならない。これを思はずして無意味の破壊を行ふことは民族歴史の冒瀆である。

近來盛んに和服の改良が唱導されまた實行されるのは結構なことであるが、またその必要以外に脱出して和服の特長、變遷の歴史などを没却した舊慣破壊も少くない。かゝる風潮は改善ではなくして改悪であり、却つて外人の笑草になるであらう。常識の第一歩としては、自己の服装における舊慣と作法位は知つて置かねばならぬ。

第三節 和服の禮装

用途	儀式	訪問
帽子	山高 中折	山高 中折
上着	黒色、染紋、五ツ紋、色合は夏物には薄可	黒色、染紋、五ツ紋、色合は夏物には薄可
下着	白又は鼠色(冬) 白無地(夏)	白又は鼠色(冬) 白無地(夏)
襟	下着の色合と同じ	下着の色合と同じ
羽織	黒色、五ツ染、紋、紐は白	黒色、五ツ染、紋、紐は白
帯	角帯	角帯
袴	袴	袴
足袋	白	白
履物	草履	草履
扇	用ふ	隨意
外套	インバ	インバ

時代により且つ階級によつて多少の差別はあり、衣冠束帯に笏を持ち、十二單衣に槍扇を翳した大官人の禮装や、素袍、大紋、長袴などは、現代離れして一般民衆には頗る遠いから、此處には現代に即して一般に遵守される和服の禮装を記するに止めて置く。

男子の禮装 無地紋付に袴または紋付の羽織である。紋は着物の羽織共に五つ紋を正しとし、略しては三つ紋をも用ひる。着物の地質は春秋多は羽二重、夏は絹または麻帷子を用ひ、色は春秋多及び夏の絹においてはすべて黒、麻帷子には白又は薄き水淺黄をも用ひるが、これは白を以て正しいとせねばならぬ。十六歳以下は股斗目を用ひたが漸次廢され、現今では多くの場合縞物を以て代用するやうになつて居る

下着は白を正式とするが、上着と同じものを用ひても差支ない。羽織の地質は春秋多は羽二重または斜子、夏は絹で四季を通じて黒の無地紋付である。

徳川時代は主として羽二重を武家が着用し、一般町家は斜子を用ひる風習もあり、現今では地方によつては昔ながらの斜子を着用してゐるが、着心地の點からも、また保存の點からも、羽二重の方が優つてゐる。羽織紐は白の太白が正しいが、略して白の平打を用ひても差支ない。参考のため前表に詳しく表記した。

婦人の禮装 徳川時代には婦人の正装としては、士分以上は小袷の名残から来た袴に、白無垢(年の若い婦人は縮緬に赤裏合せ着を白無垢の上に着た)で、一般町家では紋付縮緬様または裾模様、略しては小紋の紋付なども着たが、現今では



装束の人婦

無垢を着るの
は上流
社會の
婚儀以
外に見

受けられず、一般に裾模様の紋付を以つて正式の禮装としてゐる。

襲は三枚が本式で、下着は白が正しいが、大抵は下着にも同じ模様を置き、具つ略して二枚とし、模様も裾模様から漸次高樓模様に變化して、最近には胸にまで及んだものもある。振袖は婚儀以外十六七歳以下の晴着に着用される。紋は五つ紋が正式であるが、略して三つ紋をも用ひる。然かし總紋は正式の禮服に用ふべきでない。地質は羽二重、縮緬、夏は絹で色は振袖以外黒が正式である。然し最近の傾向として、染直しの利く絹関係から色物が多く用ひられてゐる。

婦人の禮装に羽織を用ひるのは違法である。禮装のみでなく何んな場合にも、羽織を着用して他人に羨するのには違式である。この違式の無作法が一般的に及んだのは、徳川末期江戸橋下の花柳社會の流行が、一般町家に及ぼしたものといはれるが、それすら常着の上に用ひて寒さを防いだものに過ぎなかつた。現今の如く訪問、外出、甚しきは盛装の一つに誤解してゐるなどは、在來の習慣を無視する無作法のみでなく、下肢の短かい日本婦人の體格の缺點を補ふために、美化された帯の特長を没却するの愚さを敢てするものである。

に婦人が夏羽織を着て得意とするに至つては、自から和服の傳統と特色を失ひ、すべての調和美を破壊するものといはねばならぬ。

用途	上着	下着	袴	帯	羽織	扇	足袋	履物
通常禮服	黒又は色物の模様五つ紋染紋	白又は上着と同色同模様の	白	丸帯	絶対用ひ	用	白	草履
訪問服	色物の模様物、縫紋は三つ又は一つ	適宜	白、色物模様物	抱合帯	用ひるも	隨意	白	草履、下駄の場合に表附
凶事	黒無地	白又は黒	白	黒丸帯	絶対用ひ	用	白	草履

第四節 縞物と紺に就て

男子が禮装に縞物を以つて無地物に代へることは、徳川時代一般町家の風から來たものであるが、その縞物も無地物の代用であるから、微塵縞または堅縞の細かいものを着用するのが本來で、縞柄の荒きもの、格子または横縞の如きは禮装に避くべきである。

縞は贅澤な大島縞にしても常着に過ぎないから、他人に接する略装としても縞の着物は遠慮すべきである。然かしこれとて現代の如く、和服の作法が紊れてゐるときは已むなく寛大に見

禮装の袴は男女共に白が正式であるが、略して袴だけを白にしても差支ない。例により左に婦人の禮服を表記する。

るとしても、羽織だけは無地または縞物を以つてするのが作法である。これは歐米において突墜の場合、背腹服を着替へることの出来ない場合は、帽子だけを絹帽に改めると同一の身嗜みである。對の大島を着用して、これ見よがしに得得たるは笑ふべき無作法で、従つて縞に白足袋を穿き、袴をつけなどするのは甚しい違式である。尤も紺の盛装は同地方における慣例から訪問または略式禮装として差支ないとされてゐる。されば學生などの略式禮装または訪問服として、盛装やこの代用品たる久留米縞などを着用するのは、或はその當を得たものであるといへるのである。

第五節 浴衣の今昔

浴衣は湯帷子の轉訛したもので、昔の汗衫と同じく汗取りの具である。然かし汗衫が後世官女または、童女の表衣として初夏に用ひられたのを思へば、浴衣が現今の如く湯上り以外に着用されるのもまた怪しむに足りないが、汗衫が後世表衣に變化したのは、汗取りに生絹の帷子などを用ふるやうになつたため、この點からいふときは浴衣が現今の如く、浴衣の本旨を失つたのとは、趣を異にしてゐる。

浴衣は素肌に着るのが本當で、下に襦袢を着、足袋を穿き、甚しきは浴衣の上に袴をはくなどは、簡易主義からは結構であらうが、禮儀、作法を無視する簡易は考へものである。

地質は絹にもせよ縮緬にもせよ、浴衣の本來から素肌に着すべきで、そこに三伏の涼味を味ひ得る譯で、浴衣着て他人を訪問するなどは、最も慎まねばならぬ。

第六節 帯の變遷

男子の禮装には必ず角帯でなければならぬ。その結び方については昔は武士と町家の者との間に差別があつたが、現時は

一般に町家の結び方たる兩かけ結びが行はれる。兵兒帯は薩摩の兵兒が締めたから起つた名稱で、維新前後から一般に傳播したが、次第に變遷して白縮緬になり、錦紗になり、派手な紋模様を染め出すに至つて、兵兒帯の意義は全く失はれたのである。

婦人の禮装は丸帯に限り地質は縮、厚板、絹珍などと種々ある。晝夜帯は日常晝夜の常着に締めるもので、禮装には用ふべきでないことはいふまでもない。

第七節 袴の心得

男子の禮服用としての袴は、襦袢袴が正式であるが、元來が折目の正しさを示すものであるから、地質は仙臺平、博多平、五泉平などが多く用ひられた。然るに近來は都平其他の流行が濫出し、殊に最近はお召、結城の類まで袴地に應用され、夏にはまた着袴なども流行し、袴の本義を失ふに至つた。

セルの行燈袴は明治末期から流行を見た。これは正式の禮装に用ふべきものでなく、防寒用兼着物の前を汚さない經濟用である。

第八節 帽子

公家、武家の大禮服に對する冠、烏帽子などは別として、近古結髪時代には帽子を被らなかつたが、結髪が斷髪になつて見ると、頭の上が淋しいのと、洋服との對照上、和服にも帽子がなくしては不恰好になつて來たので、遂にこれを被るのが作法の慣例になつて來た。然かし絹帽では和服の禮装に不似合なので、山高帽を禮服用に定めたやうなもの、帽子における確定律はまだ存在してゐる譯でなく、夏は麥藁帽を用ひたとて替め立てするほどの遠式ではないが、世間並に山高や中折を用ひるのが作法上無難であらう。

第九節 履物

足袋 足袋は白を以て正しとすべく、紺足袋は常着以外用ふべきでない。地質は男女とも羽二重、キヤラコ、白木綿などで、地質の異つたものまたは色變りのものは、他人に對して禮を缺くものである。防寒用としてコールテン足袋も時代向ではあるが、以上の心得を知つた上で穿くべきである。

草履 禮装に對する正しい履物は、男女ともに福草履である。

るが、これは現代的でないから舊慣を重んずる嚴格な家庭以外には殆んど用ひられない。これに代へて男子は疊表の駒下駄で「のめり形」のが通例とされ、夏期は簾表を用ひる人もあるが、これは略の略である。略式ならば舊慣上雪駄は當然許さるべきものであるが、簾表の雪駄は作法上慣むのが禮であらう。鼻緒は白の鹿皮ならば如何なるときに用ひて差支ないが、現今では鼠、茶、黒などを用ひても怪しまないやうになつて居る。

下駄 簾下駄や堂島下駄などは、南部の糸征でも平素穿きで、決して禮装に穿くべきものでないが、略装として紺の簾下駄に、木綿袴をつける地方習慣に従ふ場合には、疊表の下駄では對照がとれないから、當然簾下駄を用ふべきである。

婦人の禮装に對する下駄は、年齢により木履または「あとまる」を選むべきで、兩列は略の略たるものである。鼻緒は白が正式であるが、これは男子ほどに舊慣を守る必要なく、色物を用ひても差支ないとしても、成るべく單色を選むのが無難である。

雨天のときは勿論男女とも足駄を用ひて差支ない。この場

合爪袋は黒に限られ、近來女用の爪皮に見受ける模様のものは禮装としては遠式の無作法である。

第十節 扇子



扇の使ひ方

男女ともに禮装には必ず扇子と懐紙を用意すべく、これは洋服の場合の手袋と同じ作法であるが、男子用としては白扇の大和骨が正式で、女子は塗骨にして金銀地が正式である。

第三章 洋服の着方

現代の二重生活は欧米の模倣から來た憚みであるが、それが對外關係が密接になり複雑になつた今日では、已むを得ぬ生活上の必要もあり、法令を以つて禮服が洋服に定められ、

公式の宴會が洋食を用ふるに至つては、最早無意味の模倣では済まされぬ。

自己を知るには自己の習慣を知り、他人を知るにはまた他人の習慣を知り、相共にその禮儀作法を尊重するのが共存共榮の道であるから、短を去り長を採り、生活の向上を計る上においては、彼我の慣例作法をよく理解せねばならない。

元來洋服を着、洋食を食ふ現代人は、當然その作法や禮式の一般を心得て置かねば、所謂沐猴にして冠すの嘲笑に甘んじなければならぬ。絹帽に燕尾服を着込み、自動車で繰り込んで見たところで、赤靴をはいたり、黒のネクタイをかけてゐては、折角の威容をしてすべて滑稽化し、却つて人格まで疑はれるであらうことはいふまでもない。

第一節 禮装の區別

制規の大禮服や一定の制服や軍服は、特殊に屬するものだから茲には省き、普通禮装といへば燕尾服で、これは法令を以つて一般儀禮の際に、着用すべきものと定められてゐる。

フロック・コートは日本では禮服のやうに誤解してゐるが、これは訪問、接客用の通常服裝で、禮服といふべきものではない。

第三節 フロック・コート

フロック・コートは通常服で一名プリンス・アルバートといひ、英國では一般に廣く着用されてゐるが、米國ではモーニングのために壓倒されて、老人または寺院専用の服裝とされてゐる。元來が晝間専用の通常服であるから、午前中または夕食後には着用すべきでないが、日本では無頓着に夜でも着て怪しまない。正式の宴會または外人など同席するホテルや、船中などの食堂へ出るには、燕尾服または略してイキシードを着用すべきである。

地質は上衣とチョッキは黒、ズボンに縞を原則とするが、縞式には黒の三つ揃ひを用ひる。但し縞のズボンを穿いたとして、違式として咎められるほどのこともなく、夏はまた白チョッキを着ても差支ない。

第四節 モーニング・コート

モーニング・コートはフロック・コートと同じく通常服であるが、フロック・コートを午後夕食までの通常服とすれば、モーニングは午前中の通常服である。ところが我國は午前午後

い。略式禮服としてはタキシード・コートを着用すべきが作法モーニング・コートもまたフロックに次ぐ通常服である。この區別は洋服を着る上において、是非心得て置かねばならぬ。

第二節 燕尾服

燕尾服はフルドレスまたはイヴニング・コートともいふが制規の大禮服に對して小禮服などともいはれる。元來は晝間服で夜間公式の宴會、結婚式、披露宴、舞踏會、團圓會、音樂會または婦人同席の宴會などに着用する禮装である。英米兩國では晝間専用の禮服とされ、英國では「イヴニング・ドレスを夕食前に用ふるなかれ」といはれる位だが、其他の歐洲各國ではその範圍を廣くして、一般晝間でも着ることになつてゐる。我國でも特に法令を以つて、燕尾服は晝夜の別なく一般の禮服と定められてゐるのであるから、公式の場合にはこれを着用すべきである。

地質は黒の三つ揃ひが正式であるが、近來は四季通じて、白のチョッキを着るのが流行し、その地質も上着と同じく羅紗を用ふべきを、リンネル地を代用しても、敢て違式ではないとされ居る。

區別なく、夜間までモーニングを着用して平然としてゐる。尤も米國などもまた午前午後これを着用してゐるが、もとく米國は歐洲各國に比して禮儀作法の入釜しくない國である。それ



方着のグンニーモ
でも夜間
モーニン
グを着用
するなど
はあまり
見受けな

いのである。
モーニングの上衣は黒、ズボンは縞をもつて上品とした無
縫とされてゐるが、鼠、茶、霜降乃至縞の色物を用ひても差支は
ない。尤も色物または縞物を用ふる際には三つ揃ひが原則で、
夏は白のチョッキに白の縞ズボンを着ることを作法上許され
てゐるが、白無地のズボンだけは差控へなければならぬ。

第五節 タキシード・コート

燕尾服が正式禮服とすれば、タキシードは略式禮服即ち半
禮服とでもいふべきものである。一名ディンナー・ジャケットと

もいひ、船中またはホテルの食堂に出席する際や、或は觀劇
音樂會などに出るに燕尾服の代用として着用し、公式の場合で
も服装を指定されなるときか、且つ婦人を変へない宴會などな
ら差支ない。着心地も燕尾服より軽快であり、非公式には如何
なる場合にも差支ないから、外人と接觸する機會の多い者は一
層を着用すべきである。



方着のドーシキタ
上衣だけ
を、白の
リンネル
地に着替
へること
が流行し

てゐる。

第六節 背廣服

背廣はビチネス・コートまたはサックコートともいひ、純然
たる事務服(略服)であつて、和服に替へると羽織なしの着流
しに當るものである。従つて改つた席へは遠慮すべきが當然

で、殊に夜間の宴席または婦人の列する席などへ着用するのは
論外の沙汰といはねばならぬ。

背廣は事務服だけに地質、色合などに何等の制限もないが、
黒または紺の三つ揃ひが一番無難でもあり上品でもある。ズボン
を上衣と異にする場合は、必ず上衣より薄い色、縞ならば縞
きものを選まねばならぬ、白の上衣に黒のズボンなどは、海軍
軍人か船員は例外として一般に着用すべきものでない。

日本人は夏になるとよく白無地の背廣服を着るばかりか、甚
しきは他人を訪問して自他ともに怪しまないが、是等は洋服に
對する無知識を暴露するものである。白の背廣なるものは、熱
帯地専用のもので、無作法を以つて目されてゐる米人ですら、
避暑や郊外散歩位に着用するに止まり、市中では一切これを
着用してゐない。

第七節 ドレッシング・ガウン

これは寝衣であるから自己の室内のみで着用すべきで、室外
に出づべき服装ではない。

一般日本人としては平常家庭でこれを用ふるまでに至つてゐ
ないが、ホテルなどでこれを着るやうなことがあつたら、必ら

ず自室の扉に鍵をかけることを忘れてはならぬ。ドレッシング・
ガウン一枚で室外に出るが如き無作法を、婦人などに見せたり
しては、物笑ひの沙汰位では、濟まなくなることを承知して
ゐなければならぬ。

第八節 チョッキ

暑熱の夏でもチョッキを着るのが洋服の作法であるが、それ
は他人に接する上の作法で、自己の室内で打寛いでゐたり執務
してゐたりする場合は、チョッキを脱いでゐるやうが、上衣を脱
いでゐるやうが差支ない。これに反し如何なる場合、如何なる時
においても、他人を訪問するのには一應案内を乞ふなり、叩扉
するなりして、室内に入るのが作法であるから、そのとき應接
の服装を正しても間に合ふ筈である。萬一無断で室内へ闖入さ
れ、服装の素れてゐるところを見られたとしても、それは先方
の無作法であつて此方に何の罪もないが、先方が正當の順序を
經て面接を乞ふ以上、こつちでも服装の素れてゐるのを正しく
して應接すべきがお互ひの禮式であるのに、日本人は往々應接
室でチョッキなしで面接してゐるのを見受け、甚しくなるとチ
ョッキなしで他人を訪問する者さへあるやうである。

第九節 外套

外套は戶外専用のものであるが、戶外でも儀式の際は雨天、雪中、嚴寒の場合は例外として、必ずこれを脱する心がけを忘れてはならない。なほ長上の者に對して、鄭重に挨拶する場合などもこれを脱ぐべく、先方が自分より目下の者であつても、先方から禮を正しく外套を脱いで挨拶されたら、自分もまたこれを脱いで應對するのが紳士としての禮である。

禮服に對する外套はインペネス或ひはトンビが適當してゐるが、普通のオーバーコートでも差支ない。然かし胸はシングルの隠釦とし、黒無地が作法上無難である。其他の略服における外套ならば、地質、色合、柄柄なども各任意に選擇して差支はないのである。

第十節 ワイシャツ

ワイシャツはホワイト・シャツの略であるから、その名の如く白を原則とし、略服以外は色物や、縞物は連式の無作法とされてゐる。

地質はキヤラコを正式とするが縞でも差支はない。但し背廣

服は元來が事務服であり略服であるから、色物または縞物で差支なく、地質もボイルでもフランネルでも隨意である。

ワイシャツのカフス及びその胸の部分は、英國式に正しくいへば硬いものを用ふべきであらうが、現在では硬軟何れでも任意とされてゐる。如何なる場合でも略服でない限り、その都度新しいものを着用すべきが作法で、背廣服でも一週間に二度位はワイシャツを取換へなければならぬ。

第十一節 カラー

洋服が如何に新調のもので、カラーやワイシャツに垢の附いたものを着てゐては、折角の威儀も殆んどその價値を失ひ、和服で襟垢や、袖口の切れた襦袢を着てゐると同様である。これに反して假令洋服は少々古くても、この二つのものが新しく清潔であれば恥しがることはないとされてゐる。特に禮装の際は朝取替へたばかりのカラーでも、これを新品に改めるのを可とする。元來カラーは背廣服にあつても、毎朝取替へるのが原則である。

カラーにはシングルとダブルとがあり、この選擇について日本には誤謬が傳へられてゐる。或雜誌に「老人はシングル、背

年はダブル」と記載してあつたが、これは甚しい間違ひである。儀禮の正しい英國では老若を問はず、通常服以上は多くシングルを用ふるのが例とされ、比較的儀禮に無頓着な米國では燕尾服以外タキシードでも、モーニングでもダブルを用ふるのが老若を問はぬ流行となつてゐる。然かし一般的にいへば通常服以上はシングルを用ひ、背廣服にダブルを用ふるのが、作法上無難である。勿論シングルには背廣服でも差支ない。それはカラーとしてこの方が正式だからである。従つて燕尾服、タキシードには是非シングルを選ぶべく、フロック、モーニングにもまた正式にはシングルを用ふべきである。

カラーは服装の清潔を表示する第一の目標であるから、當然純白なリンネル製を正式とし、色物、縞物などは職人または労働者に限られた下品なもので、紳士として決して用ふべきでない。最近日本ではソフト・カラーが流行してゐるやうだが、これは元來が夏期に、執務に汚れやすいカラーを洗濯に便するがために案出されたもので、當然背廣服に限つて用ふべきものであることはいふまでもない。

何れのカラーを用ふるにもせよ、あまり高いカラーで首を絞められてゐるやうなものも嗜好が悪く、さりとてあまり低いカラ

一をつけて顔の下に空地を拵へてゐるのもまた不禮儀である。この高低を選擇するには、流行を眞似るより先づ自分の頸に相談し、それによつて似合ふべき高低を定むべきである。またサイズの合はぬカラーをつけてゐるのも頗る滑稽であるから、先づ自分の頸にあてゝ小指一本を入れ、あまり窮屈でない程度のサイズを選むべきである。

第十二節 帽子

帽子は燕尾服やタキシードには絹帽を正式とする。フロック、モーニングの通常服にも絹帽を用ふべきであるが、日本人は略して山高帽を用ひてゐる。然かしこれは元來が通常服だけに何れに用ひても差支なく、夏期にあつては麥稈帽もまた通常服には許さるべきであらう。

絹帽は場合により、縞または黒の三つ揃ひ背廣服にも用ひることもあるが、これは途中急に公式訪問の必要が出来て、禮服と着替へる服のないとき、取敢ず帽子のみを禮帽に改めて行くといふ場合で、和服で袴だけをつけて行くと同様である。

日本人は山高帽を略式禮帽と誤解してゐるらしいが、これは禮帽ではないから正式の禮服には用ふべきでない。本來和服に

しても紋付羽織袴の正装に、帽子を被るとすれば絹帽でなければならぬが、和服には對照が取れないのと一つにはフロックなどの通常服に、山高帽を被つてゐるのを見て、フロックを半禮服と誤解したと同様、山高帽をも略式禮帽と誤解して用ひたのが習慣となつたものである。

背廣服は略服であるから中折、山高、鳥打、麥拜、ヘルメツト、パナマ何んでも差支ないが、鳥打はその名の如く鐵帽であるから、狩獵、旅行、郊外散歩などの他は用ひないのが適當である。英國で平素これを常用するのは勞働者か小店員位である。また中折帽は背廣服専用といつてもよい位で、通常服以上には被るべきでない。

パナマ帽は歐米において老人の用ひるものであるが、日本では價格の高い點から曲解し、紳士が用ひて平然としてゐる。若い人には輕快清新な麥拜帽の方が配合がよい。ヘルメツトは主として熱帯地方で、日光を防護するためのもので、登山、乘馬など夏期の白服や、霜降の旅裝または略裝などを着用の場合に限られ、その他の服裝には不適當のものである。

帽子は室外で被るものであるから、室内では脱するのが作法であるが、ホテルとかビルディングその他の洋館の廊下、通路は

屋内とはいへ室外であるから、當然帽子は被るべく、これを被らない者はその從業員と見て差支ない。

敬禮の際には右手で帽子を取り、内側をツボンの方に向け、軽く身體に觸るゝ程度が適當である。途上或ひは廊下などで長上に出會した際も、必ず脱帽すべきが作法であるが、あまり話しが長くなつて長上から着帽を勧められた場合は、遠慮せず軽く會禮して被る方がよい。殊更に遠慮してゐると、先方でもまた被る譯にゆかず、却つて禮を失するものである。

エレベーターで自己が同伴以外の婦人と乗合せた際には、必ず脱帽するのが作法とされてゐるが、知人でない限り會禮するに及ばず、たと帽子を右手に取るだけでよい。尤もこれはホテル、クラブなどの場合をいふので、ビルディングなどの事務所的建物のエレベーター内では、婦人が同乗しても脱帽するに及ばない。それは事務所に来る婦人は大抵女事務員であつて、假令その中に眞のレディがあつても、それを識別するのが困難なため、ビルディングに来た婦人は、みな女事務員と看做して、淑女に對する敬意を省くのである。絹帽に限り脱帽して臺の上置きに置くときには、必ず内側を仰向けにするのを忘れてはならぬ。

第十三節 ネクタイ

燕尾服に限つては特に白色蝶形のネクタイを用ひるが、この白色蝶形ネクタイは燕尾服以外には絕對に用ふべきものでなく、且つ使用は一回限りで新品と取替ふべきである。地質は麻製が正式である。またタキシードには黒の蝶形が正式である。

フロックやモーニングは通常服であるから、黒の蝶形でなくとも連式とされないが、元來シングル・カラーには蝶形の方が作法上無難であり、且つ色彩上黒が一番上品であるから、シングル・カラーをつけたときにはこれを選ぶのが適當であらう。

葬式や追悼會などにフロックを着る場合は、黒蝶形が正式であるが、黒色のネクタイであるならば、ダビーとても致して連式と替へるほどのこともない。背廣服におけるネクタイは各自の任意であるから、自己の好みに従つて差支ないが、あまりケバ／＼しいのは下品である。米國人は派手好で色彩のバツとしたのや、種々の模様あるネクタイを用ふるが、歐洲では一體に地味で、色彩も目立たないものが多く用ひられてゐる。

ネクタイ・ピンについていふと、これを蝶形ネクタイに用ふべきでないに拘らず、無知識か無眼着か、日本人は蝶形でも、

ダビーでもお構ひなしに挿してゐる。ネクタイピンは蝶形ネクタイに挿すべきでなく、従つて禮裝などには忘れても用ふべきでない。その他は何のネクタイによらず、これを挿すも挿さぬも當人の勝手次第である。

第十四節 釦のかけ方

燕尾服やタキシードにおける上衣の釦は、これを掛けないのが正しいが、フロックやモーニングはかける方が正しい。但し隨機隨處であまり儀式張らない場所ならば、掛けないでも差支はない。

背廣服は略服であるから、釦は掛けても掛けないとも隨意であるが、目上の人に接するときや先方に敬意を表する場合などには、釦を掛ける方が禮である。尙ほ制服の場合は背廣でも詰襟でも釦は掛けねばならぬ。

釦は燕尾服以外定まつた方則はないが、ワイシャツの胸釦だけは燕尾服着用の際を除いて、その他は金釦にするのが不文律となつてゐる。燕尾服に於ける釦は白が正式で、以前は瀬戸物の白磁消を用ひ、一回毎に新品と取替へる習慣があつたが、現今では貝の釦が流行し、それも次第に貴澤になつて、ダイヤモンド

ンドを嵌入したり、白金や金で釦の周圍を飾つたりするやうになつて来たので、一々これを新品と取替へるなどは、成金気分
の横溢してゐる米國でも見受けられない。カフスの釦及びチヨ
ツキの釦にも、現在は貝釦が全盛である。燕尾服はいふまでも
なく、他の服装にも同質同型の釦を選ぶのが作法である。

第十五節 シャツ及びズボン

襦袢でも、ズボン下でも、直接肌に觸るゝものであるから、
清潔を尊ぶ以上四季を通じて白にして洗濯を怠つてはならぬ。
略服ならば薄色ぐらゐは差支ないが、毛織製やネル地の黒ずん
だものは、労働者以外に着用すべきものでないとされてゐる。
言ふ迄もなく襦袢の袖口が、カフスからはみ出してゐるなどは
洋服着用上の禁物である。

西洋ではズボン下を穿くので猿股は用ひないが、水泳のとき
または花柳病に罹つたときはこれを用ひるのが慣習である。然
かし元來が人の眼に觸るゝものでないから、ズボン下を用ひた
とて、更に猿股を用ひてならぬ譯でなく、潔癖な日本人として
猿股を穿くことは、咎むるところでなく寧ろ獎勵してよい位
であるが、外國へ行つたとき何の氣も付かず猿股を洗濯に出さ

らものなら、花柳病患者と間違へられる虞れがある。

第十六節 靴と靴下

燕尾服またはタキシードの禮装には、ティンナー・シュース
(夜會靴)といつて、エナメル皮の短靴に黒リボンの飾りのあ
るのが正式である。然かしエナメル皮の短靴であれば釦止でも
差支ない。フロック、モーニングの通常服には、黒の短靴であ
れば差支なく、日本では編上や深ゴムを用ひる者が多いが、深
ゴムなる靴は西洋では百姓専用のものである。

背廣服にはどんな靴でも差支ないが、略服だからティンナー
シュースだけは不釣合であり、また紺の三つ揃ひで臨時半禮服
の代用をなすときは、矢張り赤皮の靴は遠慮すべく、短靴にも
せよ、編上にせよ、黒色を選むべきである。白靴は白のズボン
と共に夏期の戶外運動か、避暑地以外には用ひぬものとされて
居り、禮儀作法のあまり入笠しくない米國ですら、市内の往來
ではこれを用ひないやうである。靴は常に清く美しくすべく、
高價な靴でも汚れてゐては何にもならない。

オーバー・シュースは雨天の泥除であるから、これを穿いた
まゝ室内に通るのは無作法である。尤も日本家屋なら靴ごと脱

いでしまふからこの心配はないが、外國人を訪問したり、ホテ
ルなどへ出かけるときは注意が肝腎である。また日本では、編
上の靴紐を踵の上部にとまきして結ぶ人を見受けるが、あれ
は旅行の道中ならいざ知らず、市中を歩くには不恰好である
から一定の長さに結下ぐべきである。

靴下は通常服以上は黒が一番適當で、禮服用の際には黒の編
製に限られてゐる。略服のときは各任意であるが、調和の點か
らいへば靴と同色を選むべく、假令同色でないまでも似寄りの
色を用ふるのが無難である。色變りの靴下は野卑に見えて紳士
の用ふべきものでない。刺繍を施したものや、青、赤などの派
手なものは、婦人専用の靴下である。西洋人は靴を脱いで靴下
を見られるのを非常に嫌ふ習慣があるが、これは日本人と異つ
て室内にゐても、靴下を脱ぐ場合は襪臺に上るときより他にな
いので、絕對に人に見すべきでないとしてゐる習慣からであ
る。従つて上部さへ満足であれば、爪先や踵は少々ぐらゐ切れ
てゐても平氣である。靴下からは悪臭を發するから、寝るとき以
外は靴を脱がない。これを心得てゐないと、親切にスリッパを出
して、却つて先方に迷惑をかけるやうなことになるのであ
る。ズボンと靴との間の足首のところに用ふるスパッツは、半

ゲートルのやうな羅紗の脚絆が最初佛國から流行し始め、今で
は歐米に相應流行してゐるが、これは短靴に砂などの入るのを
防ぐため、旅行または海岸散歩のときに用ひ、通常服以上に
着用するのは遠式である。

第十七節 手袋

手袋は何んの服にも用ひるが、取り分け禮服に手袋をはめて
ゐないのは、甚しき無作法である。

燕尾服には白革製、タキシードには白または薄鼠の革製を用
ひ、フロックやモーニングには鼠または茶の革製を用ひるのが
歐洲の慣例になつてゐるが、葬送その他凶事には黒が用ひら
れる。背廣服には白の他は何色でも差支ないが、服の色より薄
くするのが原則である。

夜會及び舞踏會のときには男子は必ず燕尾服に、白手袋を
振めてゐなければならぬが、休憩のときとか、見物をしてゐ
る場合は、手袋を脱いで左手に持つてゐても差支ない。握手の
際は左手はそのまゝにし、右手だけ手袋を脱いですればよい。

第十八節 ハンカチーフ

ハンカチーフは必ず純白なものを用ひ、地質は麻または半麻製が多い。絹製または模倣入りは女子専用のものであるが、燕尾服用のときは男子でも純白の絹製を用ふることもある。色物は淑女でもあまり濃い色のものは下品として、これを持つことを憚るぐらゐであるから、男子がこれを用ひるのは自から人格の劣等を告白する醜態である。ハンカチーフの形状は成るべく小さく薄いのが喜ばれ、厚く大きいのは労働者の用ふべきものとされてゐる。

ハンカチーフは上衣の胸部のポケットに入れ置くべきであるが、汚れたハンカチーフはズボンのポケットに仕舞ひ込み、目に觸れぬやうにせねばならぬ。

第十九節 男子の禮服

以上述べ來つたところに基き左に男子の禮服を標示しやう。

手袋	ネクタイ	カラ	シャツ	ズボン	衣	帽子	名稱
白革	白色	シングル白色	〔雙胸式、白無地 白組紐釦〕	同上	公定式の通り	船形 前立付	大禮服、武官、大禮服、正装
〔白リンネル(内) 白革(外)〕	白色	〔シングル、立襟 白色〕	〔雙胸式、白無地 白組紐釦〕	衣と同一又は白	黒羅紗	絹高帽	通常禮服 (燕尾服)
〔白絹(内) 白革(外)〕	黒條形	〔シングル、折襟 白色〕	〔雙胸式、白無地 白組紐釦〕	衣と同一又は白	黒羅紗	絹高帽	通常禮服時式 (タキシード)
〔風革、茶革、表 の時は黒〕	色合形状共隨意	〔シングル、立襟 白色〕	〔雙胸式、白無地 釦隨意〕	衣と同一又は白	絹	〔絹高帽、山高、 中折〕	通常服 (フロックコート)
〔風革、茶革、表 の時は黒〕	色合形状共隨意	〔シングル、折襟 白色〕	〔雙胸式、白無地 釦隨意〕	衣と同一又は白	絹	〔絹高帽、山高、 中折〕	通常服 (モーニングコート)
〔風革、茶革、表 の時は黒〕	色合形状共隨意	〔シングル、折襟 白色〕	〔雙胸式、白無地 釦隨意〕	衣と同一	黒羅紗	山高、中折	通常服時式 (社交舞會)

帯	靴	外 套
公定式の通り表 の時は黒紗で柄 を包む	紺エナメル黒短靴	マンストリー及び パンネス
	夜會靴、紺エナ メル黒短靴	マンストリー、イン パネス、黒色の 外套
	夜會靴、紺エナ メル黒短靴	マンストリー、イン パネス、黒色の 外套
	紺エナメル黒横 釦止 エナメル付黒短 靴、深ゴム	適宜
	エナメル付黒短 靴、深ゴム	適宜
	エナメル付黒短 靴、深ゴム	適宜

以上の如く通常禮服の一通りを具へることは、我國においては一般的には困難であるので、文部省内生活改善中央會では禮服の標準を如く簡易化してゐる。

男子禮服 洋服の場合には無地背廣、モーニングコート或ひはフロックコートを用ひ、凶事ときには喪章を附けること、袴飾りには凶事には黒色を用ひること、帽子は吉凶とも山高または中折とし、夏時は夏裝帽などを用ひてもよい。靴は吉凶共に黒を用ひること。

第二十節 婦人の洋裝

婦人の洋裝は男子よりも種類が多い。一寸例を擧げてイヴニングドレス、夜會服の總稱、ウキッシュタン、ドレス

(訪問服)、ウオーター・ドレス(仕事服)などの大別があり、各國の慣習によつて種々の型に細別されてゐる。然かも夜會服の禮裝には必ず絹靴を穿くのが式であるとか、ウイッチタン・ドレスにはボンネットを被るのが原則であるとか、各服裝によつて作法がある。然かるに多くの日本の婦人は、それを一切お構ひなしで、洋服でありさへすればよいといつた態度にガールズ・エンパイア・ドレス(女子用洋服)を大人が着たり、イタエストラパン(乗馬用スカート)を訪問服につけたりして済ましてゐるのは、浴衣の上に丸帯を締めるが如き滑稽である。儀禮を重んずるのは文明國人の作法である。日本の婦人には日本の婦人に似合ふ和服があるのだが、時代の流行として日本においても、婦人の洋裝が年々向上しつゝあるから、左に

第四章 裝身具

第一節 懷中時計

懷中時計には型に制限なく、片蓋であらうが兩蓋であらうが任意であるが、現今では片蓋流行で兩蓋は時代遅れの觀がある。型もあまり大きいの中厚いのは流行しない。

腕時計は歐米は勿論日本でも非常に流行してゐるが、これは元來婦人用であつたのが軍服、制服または外套着用の際一々上着の釦を外して時計を出す不便さを除くため、男子の間にも用ひられて來たのであるから、通常服以上に用ふるのは本來は無作法である。

懷中時計の鎖についても別に何等の制式はないが、燕尾服着用するときだけは鎖は用ひず、絹または革製のリボンを用ひ、タヤシードの略禮服にも、本來は鎖を用ひないのが正式である。

第二節 指環

指環は婦人専用の裝身具であるが、指環の起源を尋ねるときは、婦人専用のもののみでなく、男子もまたこれを嵌めて一種

の護身用武器としたもので、西紀前既に希臘ではこれに毒藥を仕込み危急存亡の場合これを噛んで、自分の最後を潔くしたこともある。これがだんく變形して、その用途も武器から、裝飾用になり、婦人の裝身具になつたのである。男子として指環を嵌めて差支ないのは、婚約及び結婚の指環のみで、これは女子と同じく左手の薬指に嵌めるのである。



方めはいし正の輪指

婚約の指環はエンゲージ・リングといひ寶石入りが普通である。また結婚の指環はウェディング・リングといひ、金の細い溝鏤形で鑲目又は切れ目がなく、端なき終りなき物に限られてゐる。婦人の指環はこの二つを除いては任意であるが、左右の手にあまり洋山嵌めるのは下品である。殊に日本の婦人が平打の指環を嵌めてゐるのは、鎖のメダルに金貨をぶら下げてるのと同様、下卑た嗜好である。最近日本でもバースト

ン(誕生石)を選択することが流行して來たが、これは西洋で寶石十二種を選び、十二ヶ月に割當て、各異つた意味を附したもので、その起源は第十八世紀に波蘭に流行し始めたのが、歐米に普遍されたといはれてゐる。寶石及びその意味は各國により多少の相異があつて一定してゐないが、多く知られてゐるのは左の如くである。

- | | |
|------------------|-------------------|
| 一月 柘榴石(不撓、友情) | 二月 紫水晶(誠實、平和) |
| 三月 綠柱石(確乎、勇氣) | 四月 サファイヤ(金剛石(貞操)) |
| 五月 エメラルド(愛、不折) | 六月 眞珠(長命) |
| 七月 土耳其石(成功、不惑) | 八月 赤瑪瑙(幸運、和樂) |
| 九月 橄欖石(喜悅) | 十月 綠柱石(幸福、安全) |
| 十一月 トッパーズ(友情、忠節) | 十二月 ルビー(愛、成功、名譽) |
- この外左の如く記した書もある。
- | | |
|------------------|-------------------|
| 一月 柘榴石(貞操、眞實) | 二月 紫水晶(平和、誠實) |
| 三月 血石、綠柱石(聰明、沈着) | 四月 金剛石(清淨無垢) |
| 五月 エメラルド(幸福) | 六月 眞珠、月長石(健康、長壽) |
| 七月 紅玉(情熱、純眞) | 八月 紅瑪瑙、橄欖石(和合、愛情) |
| 九月 青玉(徳望、慈愛) | 十月 電氣石(忍耐、克己、溫和) |
| 十二月 黃玉(友情、和樂) | 十一月 土耳其玉、瑪瑙玉(不撓) |

不屈、沈勇

是等の寶石は指環、ネクタイピン、カフスボタン、頸飾、腕輪などにも適用し、寶石商の宣傳で各國に流行するに至つたがこれを一々規則通りに用ふるとなると、今度は七曜の寶石、時間の寶石などとますます細別され、恐らく何十種と寶石を用意してゐるものでなければ實行不可能となるであらう。

指環は婦人でも二個以上嵌めるのは卑しく、數多く嵌めるよりは、自己に適當した最良のもの一個を嵌める方が上品であるその嵌め方についても、處女がルビー入りを用ふるは婦人に對する熱情を表示するものであるとか、眞珠入りの指環は既婚の婦人が夫に對して無二の眞心を表現するものであるとか、人差指に嵌めるのは未婚者は配偶者を物色中の意であるとか、小指に嵌めるのは一生結婚しない意であるとかいふが、これなどは作法といふものではなく一つの傳説で、體裁上からいへば指環は、左右の薬指及び左の中指以外に嵌めるのは不釣合なのであることを言ひ觸らしたものであらう。一般的には未婚の人は左手の薬指以外は何れに指してもよく、既婚者はこの反對に薬指にさすべきである。

第三節 寶石

寶石の持つ色と光にそえられる神秘的な感觸は、魅惑的な存在の一つである。ダイヤモンド、ルビー、サファイヤなど昔から珍重されてゐるものは勿論のこと、昔は上流の人々の間では見向きもされなかつた黒ダイヤモンド、ジルコンなどもたとひ價は安くともダイヤモンドとはまた別個な感觸を有つものとして、近代人に愛好されて來たために、近頃の寶石界は非常に複雑多様になつて來てゐる。

寶石は勿論天然石が主となるものであるが、裝飾用として使用される石は適當な硬度と、光澤と、色とを持ち、無傷なものほどよい。ダイヤモンド、ルビー、サファイヤ類はその冠たるものである。従つて随分高價であるが、近代一般に使用されるものはそれらの天然石を科學的に分析し、天然石を材料の一部として作られるシムセティックスが殆んどである。人造石は硝子に着色したものであるため、科學的成分は随分異なるが、シムセティックスの方は硬度、光澤などすべて天然石と同一で、只僅かに光りの屈折狀態が異なるだけであるから、専門家でなければ

鑑別は出來ないわけである。

次に、若い婦人や、知識的な人々の間に愛好されてゐるジルコン、黒ダイヤモンドなどの安價な寶石は、ウラル山脈方面に多く發掘されるもので、比較的硬度が低いものである。是等はその時の氣分により、衣服によつて自由に調和し得る色を選ぶことが出来るのと、ダイヤモンドに比して遙かに個性的な感觸を抱かせるために使用されてゐる。

夏向は青味を帯びたサファイヤ、エメラルド、ヒスイなどが使用され、冬向は暖かい感觸のルビー、ガーネットなどが使用されるが、ダイヤモンド、眞珠はその季節を問はないものである。

金剛石は元來が夜會の寶石とされて居る。歐米にあつての盛裝は、大抵夜がその主なる機會でこの際金剛石を飾つて裝身具を用ふるのが慣例である。然かし日本ではさう歐米の定規通りには行かないが、せめて盛裝以外はこの寶石を用ふるの見合せるのがよからう。

近來は翡翠と珊瑚が流行して帶止、根掛、簪など日本式の裝身具に盛んに用ひられる。尤も珊瑚は昔から日本で用ひられたもので、我國は世界で有名な産地であるが、翡翠は支那から輸入されたものである。共に規則的に用ひる季節が定められてあ

る譯ではないが、色の感觸から珊瑚は所謂ウォームカラーで温かい感觸がし、翡翠はコールドカラーで寒い感觸がするから、従つて珊瑚は冬によく翡翠は夏にふさはしい。他の寶石類も色の感觸に留意して用ひられたいと思ふ。紅玉は處女にふさはしく、眞珠は既婚の婦人にふさはしいなどいふものから受ける感觸をいつたものである。

第五章 衣服の着方

第一節 一般の心得

着物を着崩れせぬやうに着るには、第一に襟袷や着物の仕立方に注意し、殊に着崩れは襟袷は身體に合ふやうに仕立ることが肝要である。それには普通一尺六寸五分のゆきならば、着物は身巾八寸、袖巾八寸五分、襟袷の丈は身巾八寸五分、袖巾八寸にして、袖附を着物より五分ひかへて置くと、振もゆきもきちんと合ひ、恰好よくなる。

襟芯は半襟につける人が多いが、これは半襟よりも三寸ばかり長くし、伊達巻でしつかりと巻いてしまふと、姿勢が出來て着崩れすることはない。襟芯には襷子を三枚重ねて入れるのが

よいが、襷子ばかりで三重でなくとも、襷子一枚に三河木綿を重ねてもよく、また晒木綿を重ねてもよい。襷子を芯に入れた襟つきは形のよいものである。

長襦袢は踵一杯に丈をはかつてそれだけに仕立て、長く仕立て、腰で端折るのは禁物である。長襦袢の後に細い紐などをかけて置く人もあるが、それだけではシツカリと止らぬから、紐はつけずにしなやかな伊達巻で抑へる方がよい。

着物はあまりかぶつて着ると見苦しい。仕立てるとき自然に肩のところ、後が落ちるやうに注意する。普通に丈の眞中で襟肩二寸五分にあけ、山の印も袖附の印もして、たゞ縫ふときに裏表とも二分五厘づゝの空縫いで内場をして置く。二分五厘づゝ結局五分だけ後ろの方が短くなるから、襟肩が五分だけ後ろにつつて、肩の形が自然によく見え、然かも大きに後前にしたときも少しも故障がない。

帯は背の低い人は、少し普通巾より巾を狭く仕立て、小ぢんまりと結び、背の高い人はこれと反對にする。袖丈でも背の高い人は、充分長くして置くと、背の高いのが目立たぬし、背の低い人は思ひ切つて詰めるのである。また肥つた人には腰締がよいが、あまり派手なものは餘計に肥つて見えるものである。

着物を着るには先づ襟の襟を合せて伊達巻でまきつけ、次に着物をほどよく襟を抜き、端折を前よりも後を下げる心持で締める。この端折紐一つで帯を締め上げた形が善くも悪くもなるから、出来るだけ固くしつかりと一つ結び、それをもう一つ輪にして結んでる中に締めたのが緩んで来るから、一つ結びしたならば、その儘右から持つて来たのは右へ、左から持つて来たのは左へ返して、ちよつと挟んで置くと決して緩まない。結ぶところは太抵前に持つて来るので緩みもするが、右左いづれでも腰骨の處へしつかり結べば決して緩むものではない。腰紐を結んだら端折のたぐまりを思ひ切つて下へ引き下す。成るべくは人の手を借り後をこき下してもらふと帯の落付がよくなる。帯揚の芯はあまりコックしたものでなく、程よい形のものを選び、帯揚の枕に脱脂綿などを芯に入れて、長さ三寸ばかり、太さ直径一寸三分位の小枕をこしらへて背中にあてがひ、背負ひあける時、この上に帯揚を載せるやうにすると、背負揚がびつたりと背中についてづり落ちない。

第二節 二枚製の着方

二枚製は着方の手順によつて非常に恰好の良否が出来るが、

恰好よく着るには、先づ長襦袢の半襟を成べく頸筋に巻きつけるやうに着、胸の加減で半襟をフックリと見せ、着物は二枚とも襟を同じ幅に折り、下着の襟先と上着の襟先とを揃へて出来るだけ密着させる。次に上前の身幅を身幅に合せ、下前は襟先を上げ加減に着れば裾の返りの恰好がよくなる。さうして伊達巻で胸と胸の形を、身幅に調和させるやうに巻きつけるのであるが、この場合扱衣紋の工合で、年齢や髪のかみ方などの都合を考慮しないと、品のよい形にはならない。以前は下着を上着の下から一分ほど出すのが流行したが、現時は二枚ともびつたりと合せることが流行してゐる。

第三節 長襦袢の着方

長襦袢の着こなし如何によつて、全體の恰好が大關係を及ぼすものである。長襦袢に襟をかけるに、襟よりも芯を二三寸長

くすれば、襟芯の先端が伊達巻によつて固く抑へられるから襟が崩れない。襦袢の細紐ですべての恰好を取らうとすると、これは單に衣紋を作るので襟までは抑へられない。それで伊達巻で恰好を取ることになるが、あまり肥つた乳の大きい人は、長襦袢の上から五六尺のガーゼで、乳の邊りから身體に巻きつけると、恰好がよくなる。着者に腰紐をする際は、骨盤の上にかけて背後の方を、下げ勝ちに一廻りまはして骨盤の上で一結びし、更に兩端を逆に反して挟んで置くとかぬ。また伊達巻をするに背後の紐を、端折の中へ兩方から引き込むやうにすれば態とらしくならぬものである。前の方は端折の前が隠らまないと、下に下前のを端折の上の方へ丁寧に入れ、伊達巻を確かと締めると恰好がよいものである。

第四節 腰帯の締め方

腰帯をあまり上部に締めると胸の長さを短かく見せ、腰部以下のみがだらりとして全體の均整が取れない。地質は絹や縮緬などよりも、メロンヌの方がよく締るものである。何れにしても端折りの下部に隠れるものであるから、すぐ弛みのくる絹よりもメロンヌを選んだ方がよいのである。

第五節 帯の締め方

帯を恰好よく結び上げるには、長襦袢の着付をしつかり揃へ、着物全體の調節を正しくして置かないと、いくら恰好よく結んだ帯でも、すぐ弛みが来て始末に困るものである。一般向きの大袷結びの恰好は、上部の兩耳を下げて少し左の方に曲げ、舌もあまり長くなく小ぢんまりと結ぶ。上の兩耳を下げやうとするには、帯揚げを結ぶときに、兩手で兩耳を落すとわざ／＼織を寄せなくとも、びつたりと工合よく背中について、寂かな恰好になる。

第六節 帯揚の結び方

帯の結び恰好は帯揚げの遣り方にこつがある。それには帯の輪になつてゐる二枚の下部の一枚の方を、少し隔らせて帯揚げに當て、帯止めをかけの折れて三角になつた處にあて止めること、決して崩れることはない。背の低い人は成るべく幅の狭い帯を上部の方に小さく締め、袖附を少なくして、袖丈を成るべく小さくすると背を高く見せる。肥つた人は縦縞の小細い着物を着ると、幾分か姿をよく見せるものである。

第七節 洋装の仕方

洋装は日本の婦人には適しないが、参考のためその下着の順序を述べれば、先づ第一にコンビネーションを着、次にコルセットをつけて靴下を穿く。コルセットは體格の相違で下肢の短い日本婦人は、あまり堅く外人風に絞めつけると却つて恰好が悪いことを注意すべきである。その次にはブルーマスを穿いてそれからスリッパを着、その上に着る順序である。

第八節 洋装の一般作法

歐米諸國の洋装についてその一般作法を二三述べて参考に供して置く。但これは男女共通である。

- 一 午前中家に在るとき又は旅行するときは、日中の訪問着は着用せぬ習慣になつて居る。
- 一 二十歳以上の姉妹間においては同じ服装をすることを避ける習慣になつて居る。
- 一 午前中は光澤のある羊皮の手袋は用ない事になつてゐる。
- 一 若い女の服装は淡泊なものを尚とされてゐる。
- 一 他家を訪問して滞在する如き場合でも、男女とも他人の家

では平常着に着換へぬことになつてゐる。

- 一 食の時は男子は必ずフロックコートを着用する。
 - 一 食事に招かれたときは、大暑中でも男子は外套を着用し、食堂に入る前に、別室に外套と帽子と手袋を置くことになつてゐる。
 - 一 イブニングドレスは午前中には着用しない。また夕刻でも六時前の時刻には用ひない。
 - 一 散歩服は男子はフロックコートを着用し、日曜のビクニツクなどにもフロックコートがよいとされてゐる。
- 我國でも洋装した女性が儀式に臨み、また神社佛閣に参拜の場合、帽子を被つたまふのであるのは、日本精神に反するものとして問題になつたが、昭和十三年五月の全國農務部長會議で、今後以上の場合の洋装女性には、必ず脱帽することに決定した。また洋装で日本座敷へ入る場合も、日本人としては脱帽するのが禮儀であり、坐るにしても西洋人を真似て、疊の上へ横坐りなどせず、正座すべきである。尚ほ洋装で婦人が日本座敷へ通された場合は、タイトのスカートでは足が大きく見えて失禮になるから、寛やかなスカートでふわりと廣げるやうにすれば優美である。

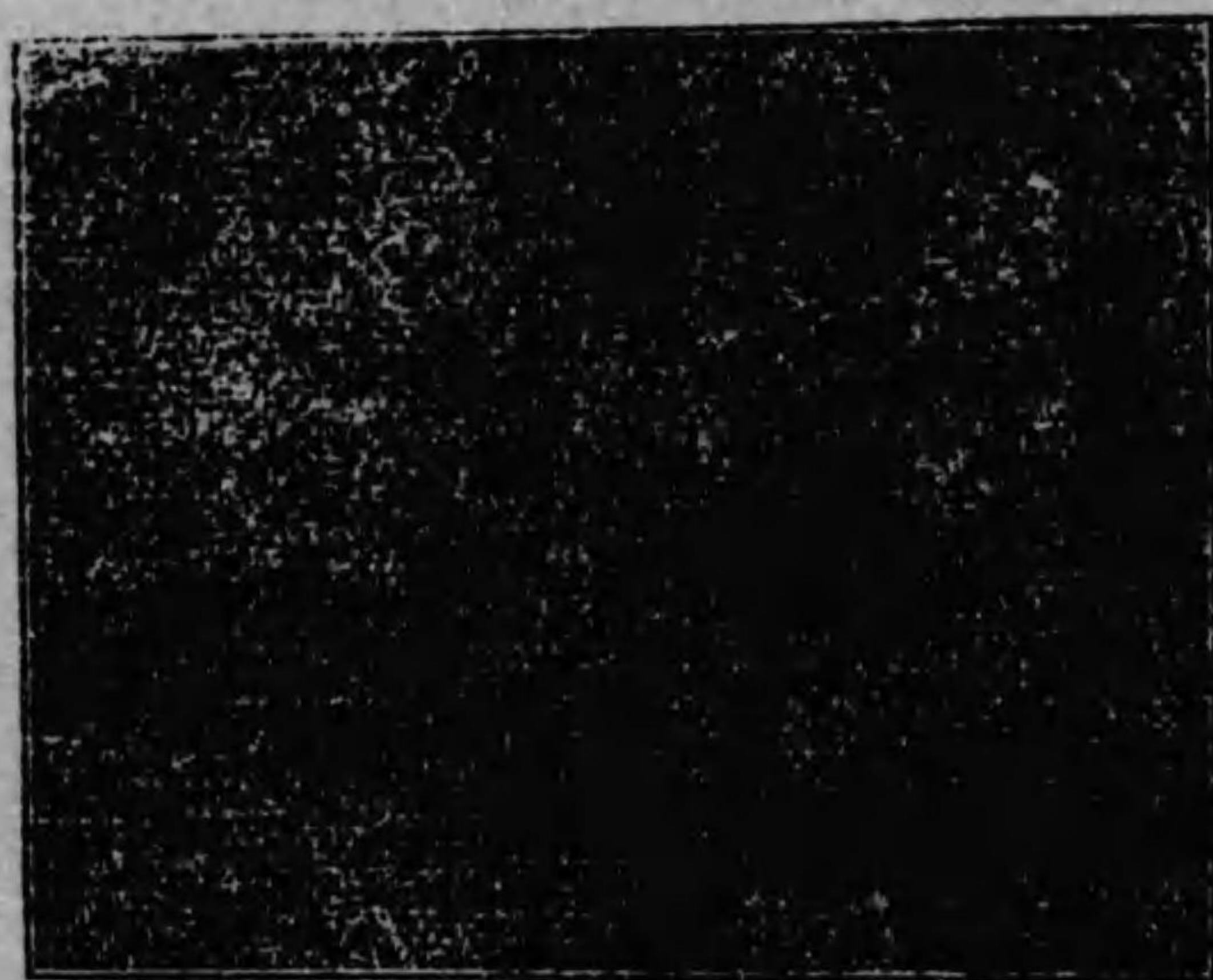
第四編 住宅常識

第一節 將來の民衆住宅

住宅の三條件 住宅の根本義はいふまでもなく避難所であり、寢所であると同時に文化の進むにつれて、慰安所であることも附加へなければならぬ。この三つの中何れの一つが缺けても、完全な住宅とはいひ得ない。而してこの三條件を満足せしめるためには、次のやうなことを要論としてゐる。

- 一 不安を感じないことをして一代的結構物であること この二つの事柄を如何に満足せしめるかと住宅問題の難點であり興味のあるところである。
- 二 保健上適當の按配 これは言ふまでもなく必要な條件であるが、實際の場合に直面すると相當むづかしい。

三個人趣味の横溢 家は住む人の趣味嗜好を没却してはならぬ。例へそれが低級なものであつても、住む人の氣持に適すれば、住宅としての生命は存することになる。



工費八百五十五圓で出來た住宅

さて住宅は避難所である以上、不安を感じずるやうなものであつてはならぬ。不安とは雨、露、寒暑、震災、火災、風害、水害などの自然現象から来る脅威を防ぐは勿論、他の動物の侵入、殊に泥棒の職を避けるやうにしなければならぬ。

穴居時代の人類の住宅には盜難がなかつたが、他のものにつくため安全な場所を選んだことは、野獸と同様に考へられる。地上生活を営み始めた頃の住居は鳥の巢を見て想像が出来る。人間が經濟生活を営むやうになつて泥棒なるものが出現して、これが寧ろ他の動物以上に厄介なものとなつた。今日では泥棒にも色々種類があつてコソ泥、強盜、ユスリ、押賣からギャングに至るまで千差萬別で人間生活に不安を與へるものが出來てきた。一方他の動物の

侵入がなくなつたとはいへ、鼠疫の害は依然として絶えず、蚊、南京虫、蚤、蠍等の不愉快なもの、侵入が澤山ある。是等一切の害から免れる結構物を作ることが、住宅の第一条件となる。それには近代的な建築材料たる鐵、コンクリートの類で固めることが必要であらう。

ところが現代人の生活が複雑多岐であり、日進月歩の今日大抵の場合親と子の思想なり趣味嗜好なりが異なり、いはゆる新舊思想の衝突は一般的である。親の好むもの必らずしも子の好むところではない。親の頭と子の頭が一致せぬのが普通である。殊に現代では封建時代とちがひ親も大工なら子も大工ではなく、職業も違へば環境もちがふ。また今日の職業も種々雑多で、その多くは定住を許さぬものである。それで今日子孫のために美田を買ふことがあつても、子々孫々の住むための家を建てることは、屋の骨頂だといふことになつてくる。そこで不安を感じざる結構物と、一代的結構物とを、同時に兼ねる建築構造材料に適當なるものが見當らず、また假りにそれがあつたとしても、經濟上一般的の満足にはならぬ。こんなことから「住宅の國立、公立」などの叫ばれるのも無理からぬことである。

理想の住宅 國立、公立説は單にこればかりではなく、現代の世相なり生活相なりにも、大きな原因がひそんでゐるが、兎に角あれを思ひこれを考へると、結局住宅はアパートメントであることが理想に近いといふ結論に到達する。即ち結構物は永久性のものとし、一代々好きなところに移り代つて行く。否一代でなく年齢、境遇、職業、地位等によつて、夫々自己に適するところへ移つて行くことにする。それにはアパートメントにも、多くの種別が必要となつてくる。

最近單身者アパートとか、婦人アパートとか、或ひは一會社の何々寮とかいつたやうなもの、出來だしたのは、この種別への第一歩と見るべきである。従來のアパートと稱するもの、多くは、過去における米國式アパートメントハウスの模倣に過ぎなかつたが、米國式アパートメントでは、社會的に種々の弊害を伴ふが、獨逸のジードルンク式のものなら日本の國民性にも合ひ、さらにこれに一步を進めて、日本人向きに改良すれば、理想に近いものを得られるであらう。

非現代的な借家 今日の中流社會の大部分と、下層階級の人人は殆どその全部が、借家住ひをしてゐる現状にあるが、借家の多くは大家が不勞利得を目的としたもので、不親切な感

築で高い家賃をあげることを目的としてゐるから、こんな家で「文化生活？」をしやうと考へることが間違つてゐる。泥棒が這入るのに都合よく出來てゐる。寒い冬が來ても、ヒーターの設備がない。便所が濘置式で、汚物と同居しなければならぬ。野蠻人の生活と異なるところは、電燈とガスがあるだけのこと過ぎぬ。

先年ベルリンの國際住居協會から「日本人の最小限度の住宅に関する種々の統計を送つてくれ」と依頼して來た際、月収百圓の夫婦者はおろか、三百圓の月給取りの生活ですら國際的に報告すべき「最小限度の生活」にまで達せぬ生活をしてゐる現状にある日本だから、こんなものを報告すれば國際だと思つて「日本には最小限度の生活様式はない」といふ滑稽な返事をしたことがあつたと言ふ。

日本では一般人が、文化生活をするにはどうしても、アパートメント式によらねばならぬ。たゞアパートを利用出來ぬのは小賣商人、手工業者、町醫者の類で、是等の人達には、完全なシテイハウス建設を考慮しなければならぬ。シテイハウスを大きなブロックの、アパートとすることが經濟的である。

アパート アパートメントといへば、蜂の巢のやうなビルディングを想像するが、それは古い考へである。スツットガルトのジードルンクを見ると、極めて明朗で衛生的で、合理的で快適である。この種のものアパートと呼ぶことは無理かも知れぬが、廣義のアパート群である。他人と同居することを厭がる排他性の多分にある日本人でも、建物の構造、設備、配置の如何によつては、アパート必ずしも不快とするものではなくなるであらう。

そこで個々の家を十個或ひは二十個連結した建物を一つのブロックとし、これを數個乃至數十個集めた住宅群を作り、そこに共同の庭園、運動場、娛樂場等を設ける。種別はブロック内に設けるのも、或はそれらのブロックに種別をつけるのも場合々々で異つてゐる差支へはない。獨身者用は一室でよいが、結婚をして家族が殖えて來れば二室、三室のところに移り、社會的地位の向上するにつれて隣接間、客間と數室を備へたところに引越して行くがよい。建物は従來のやうな西洋式でなく、また日本在來の古い式でもなく、近代生活を營み得て、然かも日本の氣候風土に即した様式を、案出すことが建築家の責任である。

アパート生活のよいところは、安い費用で文化の風に浴する生活の出来ることにある。故にアパートの經營は、不勞利を得る目的とするものでなく、國家または公共團體によらねばならぬことになる。アパート時代が来れば山間に海岸に週末住居、夏の家の如き木造の、簡易なペンガロー式のものなどしく出来て、人々が幸福な生活に恵まれるであらうといふ結論に到達する。

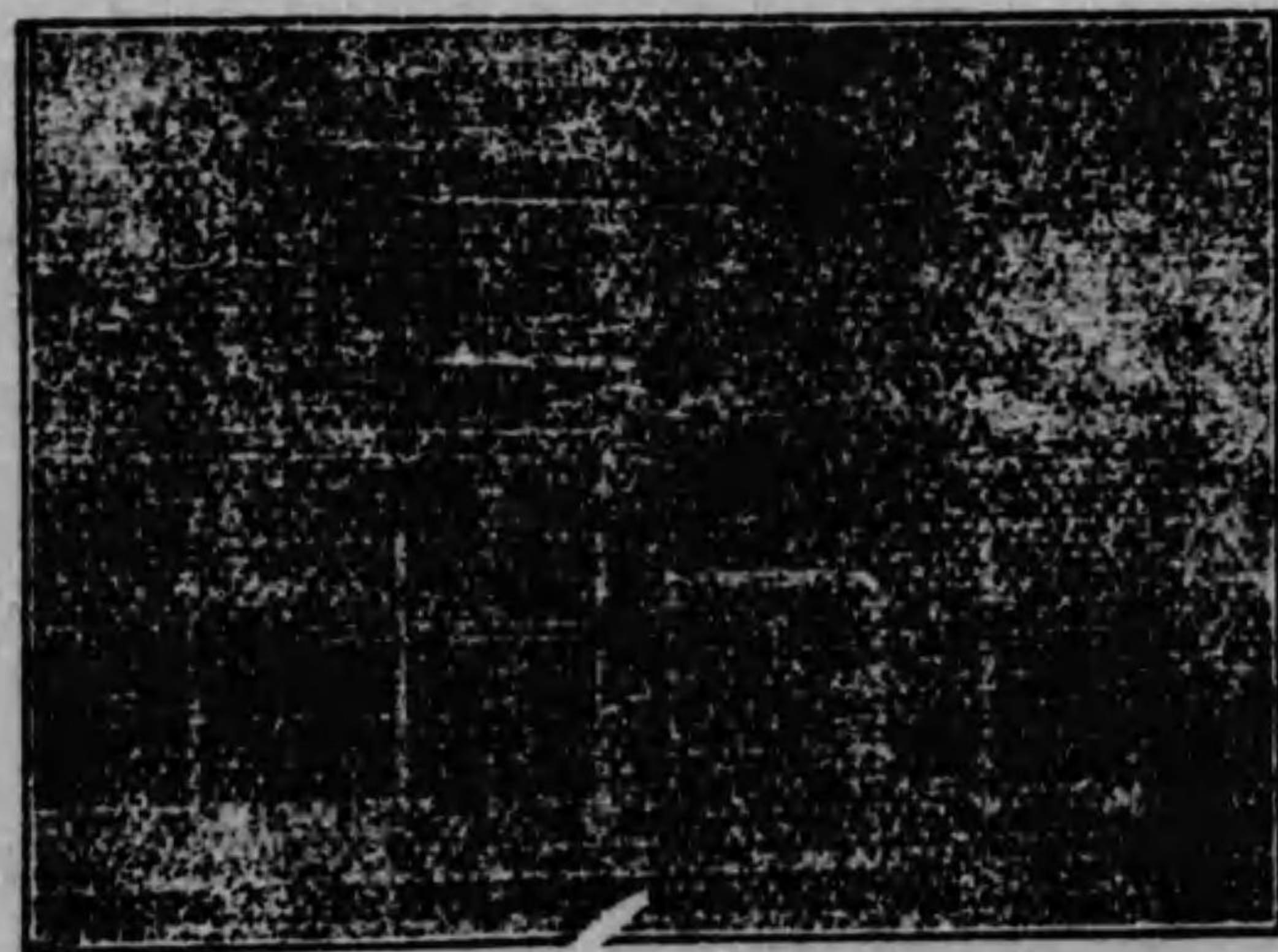
第二節 住宅の設計改善

新らしく家を設計し、建築する場合は充分に考慮し、各自の生活にふさはしく、住心地のよいものがある程度まで望み得るが、是等の出来ない借家住まひの人達でも、家を求める場合、住宅の理想に、一步でも近きものを心掛ける必要があり、割合たやすく行はれる改善は進んでなす必要がある。その手引きとなるべきものを挙げて見る。

方位 先づ住み心地よき家の條件は第一に方位である。日本家屋にあつては東南が開け、西北が壁またはその他によつて、外部と断たれてゐる場合が最もよいことは誰もが知つてゐる。この方位の家は、夏は太陽が屋根の上を射すため、室内

内に光線が入らない上に、季節風が入るから涼しく、冬は太陽の光線は斜に室内に入り、季節風は西北に廻るため暖かいのである。

東北の方位を鬼門とし、便所その他一切の不淨物を置かないのも、また巽即ち東南の方位に便所、井戸、納屋、倉庫等を設けないのも、迷信として一笑されない科學的根據をもつてゐるわけである。通風、採光も自然これに關聯して来る。



工費二千圓で出来た住宅

採光と通風 我國の住宅は、多くこの點に不備

を持つものである。縁側に面した座敷でも、その間口の廣さに對して、高さが低くかつ紙張りの障子、襖等のために光線や空氣の流通を妨げてゐる。そのためには窓、入口の高い家がよい。通風は壁、天井、建具等に隙間の多い日本家屋では

特別の設備をしなくてもよいが、洋風化した家屋では、換氣孔を設ける必要がある。

排水 排水は衛生上から見て、家屋より遠くに排除出来る装置が好ましく、一般的に我國の排水設備は不完全であり、非衛生的なものが多い。雨水等は樋によつて地上に導くことのみで満足せず、家屋を中心として敷地の境界線の方に傾斜をつけ、敷地の周囲で他の排水管、または溝に流れるやうにして欲しい。

取 間取りの良否は、その家の生命ともなるべきものであるから、その部屋にふさはしい位置に、各部屋があるやう設計されねばならぬ。

書齋と居間 これらの目的のために使用される室は、他のどの室よりも静かな、落ちついた部屋であることが理想であり、そのためには書所や居間などから、なるべく獨立したところが望ましいのである。尤も應接室を兼ねる場合には、玄関に近いことが必要である。都市住宅に最も多い二階建てでは、二階にこれを求めるのがよい。方位は東北に面して窓を開け、西南からの強烈な光線は避けるやうに工夫すると共に、良き眺望を得られることが、他のどの部屋よりも必要である。

居 間 これは理想的にいへば寢室、主婦室、居間の三室に分割されるべきものであるが、最も大衆的な間取りとして、やゝ理想に近い諸點を求めると、主婦は終日室内にゐることが多いから、特に採光の充分なる位置を占め書所、子供部屋等、いづれの部屋にも近き場所をあてねばならぬ。最近の傾向としては、家庭團圓の中心ともなるべきものとして、家中で最も明るく、快適な部屋をこれにあて、家具調度も選擇し、心易い訪問客などをこれに招する事などが行はる。

子供室 これはさほど廣くなくてもよいが、庭園に面した窓を持ち、主婦室に隣接する部屋を當てなければならぬ。東南がひらけ、窓は出窓にして低くし、室が常に明るく、新鮮な空氣に溢れてゐることが望ましい。裝備品等も、高價な大人めいたものよりも、子供らしい感じと、丈夫で少々悪戯してもよいやうなものを選ぶべきである。窓をいへば子供室は手軽に庭園に出られる設備が望ましい。

書所と寢室 一家の榮衰を計る食物の調理場であるから、最も衛生的であり、働き易きものであらねばならない。その位置は主婦の居間や玄関、女中部屋等に近接することが大切で

あり、方位も東南を理想とするが、それは他の居間に當てられなければならぬから、なるべく東か南に傾いた場所を選びたい。窓は家具の取りつけ、他の設備に差支へない範圍において大きくし、やむを得ない時は、天井から採光することも必要である。窓には夏季金網を張つて煙の出入を防ぎ、カーテンによつて、日光の直射を避けるくらは、是非行はれたいものである。

室の大きさは、近時次第に小さくなる傾向があり、従来のダマツ廣い臺所は、努力の不経済として排斥されつゝある。またその様式にしても立衛式がよく、流し、調理臺等とすべて適當の高さに設け、隅がんだり、屈み加減になることは、努力の不経済となりやすい。

臺所を狭くして、廣く利用することが要するに必要であり其のためには室の三方に、臺所用具を使用し便利なやうにおき、作業面の高さを一定して、立つたり、隅がんだりしなくともよいやうに設備することは、仕事の能率を高めるものである。食器棚、調理臺などその部屋の壁面に据ゑつけておくことは、利用されてよい流行である。天井は鼠、其他の侵入を防ぐために、是非他の室同様張る必要がある。床は洗滌の

利く酷からいへば、コンクリート等衛生的であるが、床板またはリノリウム張等にすれば、暖かい感じがしてよい。殊に土間式のものよりも、他の部屋同様の床の高さを持つ場合は夫等がよく、土間式よりも遙かに衛生的で能率的である。浴室と便所 浴室は水に縁のあるものであるのと、他の居間との關係上、必然的に近接し易いものである。方位はその向きを保つためにも、東北の光線を受けるのが最もよく、西向にならぬやうに工夫すべきである。

次に採光と換氣のために、外部に面した部分に、適當な窓を設け、井戸と便所の距離は、三間以上にすることは、市街建築物法の施行規則の中にも定められてゐる事項である。浴室は天井を傾斜させ、その中央に蒸氣抜の装置をすれば湯気が籠るやうなことはない。風呂目はタイル張り、洗ひ場はコンクリートにし、その上に木製の床板を敷けば、最も衛生的である。

便所は水洗式が理想であるが、その一般化を望めない現代としては、汲み取りの邪魔にならぬやう、外部から床と壁との間に孔をあけ、これに圓筒を立て、屋根よりや高く導き、その端に自動的の扇風装置を施すのが衛生的にも、經濟

的にも便利である。

住宅の傾向 住宅の様式は次第に簡易化し、間敷を多く取りも廣く少くし、一室にて従来の二室以上を兼用させることが多く、家具類も出来るだけ建築そのものに取りつけ、實際の面積より以上に、廣く使用する傾向にある。居間を廣くし廳接室、主人主婦の書齋、仕事場を家具の配置によつて、兼用する等その著しき例である。

第三節 室内裝飾

意のままに改良し、裝飾化することの出来ない家屋を、せめて室内裝飾だけでも自分の生活にふさはしく、潤ひあるものにしたと言ふことは、誰もが心掛けてゐるものである。勿論それはその人の趣味性によつて決定されるものであるが、室内裝飾の原則とも言ふべきものを、成るべく具體的に説明して見る。

第一規準 第一に室内裝飾は、色と形と質との調和をはかると共に、生活者に對して益あるものであらねばならない。その根底となるべきものは、その部分の氣分を巧に構成することである。即ち玄關、廳接間等は部屋の性質上、明るい中にも上品と、幾分の嚴肅さを感じさせるやうな室内裝飾が望まし

く、それには温かい色彩を選ぶと共に、家具類を少くし、そこに威儀と謙讓を示すのである。

これに反して居間、讀書室等は落ちついた和やかな氣分が必要であり、自然壁の色、カーテン、額等も調子の柔かいものであらねばならぬ。

以上のやうな洗練された氣分構成に必要な條件の一つに、裝飾品はすべて同一程度にあることが必要である。安價なものと同價なものを同居させることは、兩者の價値を互ひに減ずるものである。

第二規準 第二は洗練された雰圍氣を作るには、色彩や形の上で統一の必要である。半圓形の彫刻に楕圓形の花紙、網戸色の絨毯に紺碧の獨立等は効果的なものである。弱い調子の色の絨毯には、足の低いゆるやかな安樂椅子が必要であるやうに、すべてがその調子で行かねばならない。

第三規準 第三は實際の大きさと、目の感じとは必ずしも一致しないことである。いくら嵩ばつた大きなものでも、その構成ぶりがきやしやであり、優雅な線をもつ場合は、小さくきやしやに感ずるものである。故に小さい規模の部屋を廣く、大きく感じさせるには、壁地は無地、又はそれに近いもの、

家具類は輪廓の優雅な華奢なものを使用すればよい。これは日本風の部屋に、洋風裝飾を施す時は非必要な知識である。何故なら日本家屋は、洋風裝飾に適合するには、多く小規模すぎるからである。

この反對に部屋を小さく感じさせるには、色彩は暗色系にし、家具類はどつしりとした物を選ばよことになる。

第四規準 第四は家具、絨毯、繪畫、照明、花瓶等は原則として形態、模様とも室の大きさに比例しなければならぬ。

第五規準 第五は、家具裝飾品の置き方である。小さな類は斜めにおくのも一つの價值を有ち、見る者にくつろぎを與へるが、絨毯、大きな家具等を斜めにおくことは、多く亂雑にして下品な感情しか與へないものである。

第六規準 第六は、對照の利用である。同一系統並びに同一調子に終る場合は、多く單純なものとなり、新鮮味を缺いて來るが、そこにある部分、對照をなすものがあれば、非常に印象的に引き立つて來るものである。然かし對照法を利用する場合、それが裝飾の中心をなす部分に限られてゐることが必要である。

例へば美術的に非常な價值ある繪をかける際、その裏紙の

色がクリーム色であり、壁紙がそれと對照をなす淡風であるとする、その中心は裏紙と壁紙の接線に集り、繪そのものの裝飾的價值は、甚だしく減じて來ることを知らねばならぬ。

又くだらないクッションと椅子、テーブルの色とが對照をなす場合は、クッションのくだらなさ、一層目立つて來るといふやうなこともあり得る。次にまた對照の度が弱すぎる場合、ものによつては安定感を缺くことがある。壁と天井は對照がはつきりした方が、安定感を與へるのである。尤もあまりに對照がはげしすぎる際は、雜然たる感じを與へるものである。

第七規準 第七は、光線の取り入れ方である。光線は必ず主となるべき箇所は一に限るので、弱いところには弱い色彩と、柔かな調子が必要であり、強いところにはその反對の裝飾法が望ましいわけである。

第四節 裝飾品の選び方

壁・壁紙 これらは住居者に落ちつきを與へ、他の裝飾品を引立たせ、室内の雰囲気を作成するに重要な部分を占めるもの

であるから注意を要する。壁は大體日本家屋に調和するやう

無地であり、色彩も比較的無難であるが、壁紙の方は種類が多

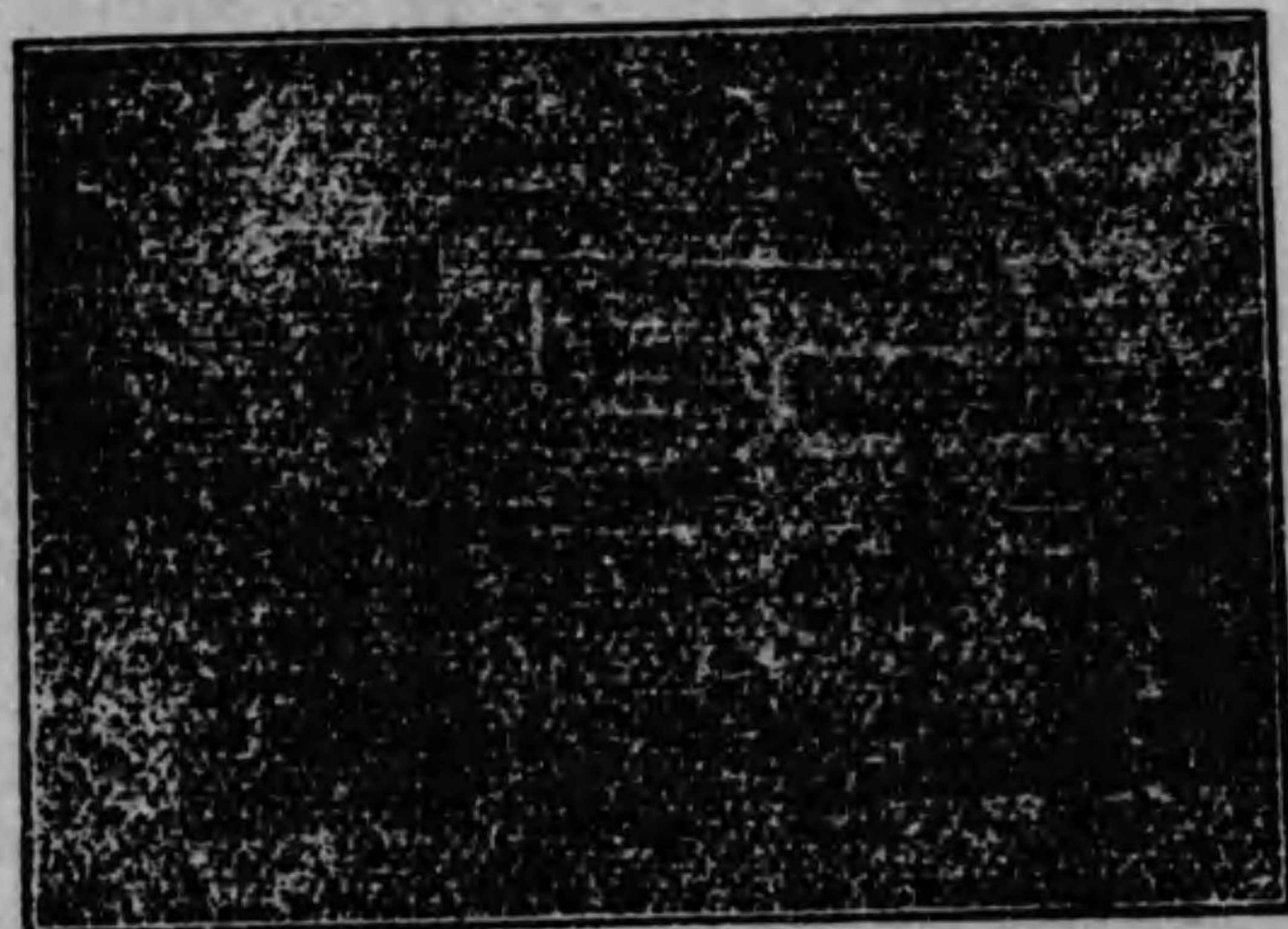
く、選擇が自由であるから、それだけ難かしくなつて來る。壁紙の模様の大きさ、地質の厚粗等は、その室の廣さに比

例するものであり、模様と色彩は床、天井のそれと逆比例すべきものである。繪畫其他の裝飾品の背景としては、あまり光らない目の細かな無地もの、又は模様の目立たないものが多い。然かしそれが大きな室で、裝飾品がまた大きなものであれば、同じ無地物にしても、地質の荒いものが必要とする。日本の襖は、洋間の壁紙と仕切を兼ねるものであるが、色は大抵白またはそれに近い系統であり、模様も寫生風である點等、日本家屋とのよき調和を保つてゐる。

カーテン カーテンは日光を調節し、その部屋に安らかさを與へるものであるから、視力の集中點となりやすい。大體薄地カーテンは澄明な快適な光線を感じさせ、厚地カーテンは安靜の感じを深めるものである。だから重々しい部屋にはベルベット、ウール等の壁の多い、どつしりした物がふさはしく、日本風の明るく軽快な室には、薄地カーテンが必要となつて來る。また壁面等に模様が多い場合、カーテンは單純な

感じのものがよい。

敷物 これも亦安易な感じを與へる、落ちついた弱い調子のものがよい。大體部屋の安定感を得るためには、床面を最も暗い調子のもにし、上に行くほど明るくして行くことである。そのためにも暗い調子の色が必要である。



工費二千六百四十四円出た住宅

この他に、その表面が平坦であり、圖案が調一であるものを選ばねばならない。表面が平坦でなく寫生風の陰影あるものは雜然たる感じを與へ、圖案の調一を缺くものは、模様が見様によつて逆様になるからである。

家具 範圍が廣く、一々具體的にはいへないが、他のものに調和するやう色彩、又はその形によつて窓掛、敷物、壁紙其他の裝飾品と類似するものを配置しなければならぬ。概して色彩または形狀に類似する時は、その部屋に安靜と氣品

を興へ、兩者一致する時は、その効果はさらに大となる。

裝飾品 室内の裝飾品は、一種の刺戟材であるから、これの配置は、その周囲と對照になるやうに工夫すると効果的である。故に目立つた形態や色彩を選んでよいわけである。模様の表面に對しては無地物がよく、無地色の表面に對して模様ある裝飾品は効果的である。

同様に室内に飾る草花、花卉などもこれに準じてよく、上品で華麗な室には牡丹、藤、梅、蘭などの清楚な、または華麗なものがよく、簡易な田園都的な住宅の室内には、チューリップ、コスモス、ダリヤなどの野生的なものが効果的なものとなつて来る。是等は小鳥などと共にその部屋に一脈の生氣を投げかけるものである。

最後に書棚の中に配列する、書籍の裝飾的な價值について述べる。書籍の高さがほぼ同一であれば、最も統一を得るが、それが出来ない場合は、小さい部を棚の中央部に置き、書棚の兩端等や暗くなる部分には、表紙の明るい色をおき、暗い裝幀の本で詰つてゐる棚の中央に、淡色のものを置けば、著しく明るい配列になつて来る。要するに書籍の配列も、その部屋の氣分構成に役立つものである。

第五節 家具の選び方

家具が實用的方面と裝飾的方面とを兼用することは、日常に於けることであるが、元來家具の發達は他の工製品と同様、支那階級の支持によつて、發達したものであるために、各國とも裝飾方面がやゝ重用視されたことは否めない。それが生活の簡易化を唱へられる近代の思潮に押されて、家具も他のものと同様次第に實用化し、裝飾も單純な明快なものになつて来たが、一部ではまだ家具の裝飾の多少によつて、生活程度が推せられる状態にある。以上からも考へられるやうに、家具の良否如何は直接に、その人の生活内容を明示するものであるから、家具の選擇配置等は充分に心して行はなければならぬ。

家具の種類、形式は國民の生活様式、個人の嗜好等によつて随分異なるものであるが、その人の生活様式に最も便利であり適はしくあるものが必要である。一般的にいって、從來は洋家具を使用する際も、單に外國そのまゝの模倣であつたが、最近の洋家具は著しく日本趣味が取り入れられ、木材にすればその色目、木目等が、他の日本家具と近似したものを狙ふやうになつてゐる。また椅子類にしても簡潔な、單純な日本家屋に調和

するやう、種々の彫刻的裝飾を施し、家具そのものゝ線に、簡易な美しさを求めてゐるのである。それで日本家屋と共に發達した和家具は勿論のこと、洋家具にしても、種類は充分豊富にあるから、經濟のゆるす範圍において、實用的であると共に、趣味生活を豊にするものを選ばねばならぬ。次に具體的に選擇の注意をあげると。

材 料 家具の材料としては、和洋とも最も木材が多く、あけび、木、銅、大理石等があるが、その家具の使用目的によつて、適はしい材料のものを選ばねばならない。普通には、あけび、リード、銅等は涼しげなその構造から、グエラ、あづまや、ゴーチナ等にふさはしく、藤、柳の染色した家具は、やゝ洋風化した日本座敷にふさはしいものであり、銅製のものは事務室向のものとしてされてゐる。

最も多い木材についていふと、和風家具には杉、桐、桑等日本在來のものが多く、洋家具には松、樺、櫻が多く使用され、安價な點ではラワン等も随分利用されてゐるが、ラワン、松材等は質が軟かく、傷つき易い上に、光澤なく家具材としては、下位にあるものであるから注意を要する。

この外にチークやマホガニー等は實用的價值も、裝飾的價

値も具備した木材として使用されてゐるが、高價である點において大衆向でない。

家具と生活 大ぎに注意を要するのは、家具と生活の調和である。即ち寛ろいだ居間の家具は、明るく賑やかなものがよく書齋向の家具は、どつしりと落ちついたものが必要となつてくる。書棚、飾棚は書物並びに裝飾品の寸法に應じて求めなければならぬし、籠、食器棚は衣類や食器の寸法によつて、選擇の範圍が限定されて来るわけである。

次に椅子類では食事、休息、讀書などその使用目的によつて足の低い奥行の深いものほど、寛ろいだ氣分を興へるから休息用の椅子類はそれに適したものを選び、勉強用の椅子は適かにそれより高いものが選ばねばならない。テーブルの高さは常に、椅子に腰を下して、前腕を直角においた部分より、少々高い目のものが必要となつて来るのである。

時味すべき個所 家具の選擇に際しては、外見の美しさと共にその堅牢性も考慮されなければならない。大體日本製の家具殊に木材のものは、狂ひが生じ易く出來てゐる。これは我國の氣温、湿度等にも關係することであるが、選擇の際木割が太くて丈夫なのを第一に注意し、仕口の堅牢さなどは等閑に

され勝な敷にもよるのである。故に成るべく濕氣のために狂ひを生じ易い楡、鹽地、楠、椴等の雜木をさけ杉、檜、桐等を選び、木割の太さよりも、仕口の丁寧さを問題にすべきである。殊に前述の如き雜木使用のものは、特に接目の入念なるものを選ばねばならない。

次に金具、膠着けの部分に挙げられるが、膠はカセインを原料としたものは、耐水性に富むために、従来のものゝやうにはがれ易くない。然かしその識別は、信用ある店で買ふやうにするがよい。

新しい家屋様式 家具は時代により、生活によりそれに適應すべき様式を作つて行くものであつて、今後どうした様式の家具が生れて来るかは、随分興味ある事柄であつて、一般専門家間にははれてゐる事は、家庭様式の立體化に伴ふところの家具である。即ち平面的に徒らに場所を取らず、一つにして二を兼ねるやうなものが、今後の家具界をリードするであらうと言ふのである。

その極端な例は家具そのものを、家屋の一部の如く拵へつけてしまふことで、簡単にいへば書齋の戸棚は書棚であり、客間の押入れは飾棚となり、茶の間の押入れは茶籠箆を兼用す

ることである。勿論そのためには、押入といふ従来の概念は放棄されねばならない。

第二の例は書棚、もしくは箆箆は箱一個、または抽斗一個を單位とし、これを上方又は左右に組み立てゝ増大したり、普通の箆箆を横に半分出して、晝はソファアとして使用し、夜は寢臺として使用するが如きである。

以上のやうに家具は、質と色と形の三者が完全なるものを選ぶことである。

第六節 建具と住宅

住宅と建具とは、離すことの出来ない密接な關係にあるが、案外一般の人は、これに注意をしないやうである。住宅は建具がはいつて、初めて全體が引き締り、室が完全に使命を果すことが出来るから、安住の所となるのである。

近年流行してゐる文化住宅などには、極めて粗雑な建具を用ひてゐるものが多い。殊に都會地における借家に至つては、言語道斷ともいふべきものがある。尤も借家では家賃の關係上、不足も言へぬところもあるが、今少しどうにかならないものだらうか。これから素人として知つておきたい建具類の一般を述

べて見るが、建具はその使用の場所と用途とによつて違ふし、また和風住宅と洋風住宅とで非常に異なるのである。

第七節 和風家具

襖 部屋の仕切り、押入、地袋等に用ひられるもので、普通の障子より、やゝ太い棧を縦横に格子に組んで骨とし、兩面から布または紙の類を張つて、四方に縁を附けたものである。材料としては安物は椴、野夷松等、上物は杉、米松等を用ひ縁には檜を使ふこともある。また生地のもので塗りとがあり貼る紙にも種々あつて、一般に西の内、美濃紙、半紙等で下貼、袋貼をした後ち簾仙紙、大高紙、小高紙等の紙か葛布、芭蕉布、更紗等の布で上貼りするのが普通で、仕上りは彩色塗、墨繪、漆塗等を施すものゝほか白紙もあるが、部屋との調和が最も大切で、その用ひる場所により上品なもの、粹なもの、派手なもの等選擇が肝要で、俗態に流れぬやう注意したいものである。

中障子襖 襖の中程の一部を明り障子にしたもので、明り障子の所には紗やレース等を用ひる。

うに、座敷と廊下との境に使ひ、戸の方は帯戸にしたものが多。

障子 建具の中で種類の最も多いのは、この障子であらう。普通の紙障子でも全部紙を貼つたもの、腰を板張りとしたもの、上下を板張りにしたもの、中障子のもの、また下通り三尺位を板張りにしたもの等随分多い。その他ガラス張り、藪藪張り、油紙張り等の障子があり、虫よけのための金網障子もある。

雨戸 風雨を防ぎ、寒さを隔てるばかりでなく、盜賊の防禦にもなるのであるから、丈夫でなければならぬ。

襖戸 廊下への出入口とか、便所の入口等に用ひられ帯戸、舞良戸、板戸等もこれに近いもので、一枚板のものは板戸といひ、その上等のものを鏡戸といふ。

硝子戸 近年よく使用せられ採光、保存の上からは頗る便利なものであるが、外氣を正直に室内に傳へるから、防禦用には不向きであり、また不用心でもあるから、この缺點を他のもので補はねばならぬ。

第八節 洋風建具

戸 座敷から見れば襖で、廊下から見ると戸に見えるや

座敷から見れば襖で、廊下から見ると戸に見えるや

唐戸 最も多く用ひられるもので、四方框に、堅棧や横棧を適宜に配して、その間に鏡板をはめこんだものである。横戸と重打戸 極めて粗末な扉で、裏木戸か物置小屋等に用ひられる幅三、四寸の板を並べて、裏に三、四通り棧を打ちつけたものである。



工費千三百圓で出来た住宅

窓 洋風住宅では窓がその建物の價値を左右するといはれる程であるから、窓の建具は重要なものである。上げ下げ窓 窓を上下二枚の障子にして、左右二木の溝に沿うて上下するやうになつてゐて双方の溝の裏側には分銅箱があり、分銅を鐵條、または鐵鎖で溝の上端の滑車から釣り下してある。開窓とフランスマ 普通外開きのものと、内開きのものとがあるが、窓を二重にしたたり、横戸がある場合には、内開きにするか、上下窓にするかよい。

欄間障子 唐戸に附随したもので、普通硝子障子である。換氣用として廻轉式にするのが多いが、中には廻轉出来ないやうにすることもめる。戸 窓の外側等に取り付け戸締り、防塵、風雨等に備へるので、鐵製の捲上げ鐵戸(シャッター)など出来てゐるが一般向きとしては、何かと故障が起き易いから、まだ完全なものとはいへない。

第九節 住宅の照明

照明といへば、明るければ明るいほど良いと考へる人もあるが住む人の趣味嗜好によつて、またその室の用途によつて、適宜變へなければならぬ。趣味と實用との美しき交錯の中に、住宅照明の價値を發見せねばならぬ。照明を大別すれば自然照明即ち採光といはれてゐるもので、太陽の光線を利用するものと、人工照明即ち電燈、ガス燈、石油燈その他の燈火によるものとなる。これから述べるのは最も需要の多い、大體に能率的であり衛生的である電燈照明についてである。

室と電燈の大小 照明についての注意は第一眼の衛生である。暗いと衛生上悪いばかりでなく、能率上にも不利であるが、強過ぎて不衛生、不經濟になる。照明は夜も晝と同じ明るさにするのが理想的で、次に室と燭光との關係を表にするのと左の如くである。

室の面積二坪—二十四燭光、三坪—三十二燭光、四坪—五十燭光、五坪—百燭光。

電燈の差 電燈の笠は、光をなるべく下の方に澤山送つて、仕事をする場所を明るくするためであるから、色は白くて、形は碗を逆にしたやうなものが一番よい。色とり／＼に模様をしたものは、見た目には美しいが、能率は非常に悪く、氣分本位の場所以外には不向である。笠も口のあまり狭いや、廣く開き過ぎてゐるのなどはよくない。

スタンド 従来洋室では、一方室内裝飾の一つにもなつてゐるが、日本間でも今日ではこの傾きがある。普通のスタンドは廣書用には向かない。光は僅かにスタンドの直下だけしか照

さないから、寧ろ寢室とか、居間とか、應接間とかに使ふべきである。廣書用としては笠が半球形に出来てゐて、柄が自由自在にどちらへでも向けられるやうなスタンドがよい。

第十節 各室の照明

純日本式住宅と、今日流行してゐる和洋折衷式とは、照明器具も自から違ふのはいふまでもないが、純日本式のもの建築の構造上、理想的の照明とすることが出来難い。次に主として和洋折衷の住宅における照明方法を擧げる。門 燈 門燈は門から玄關までを明るく照らし、なほ門の外も門標も多少は照らすやうにすればよい。ポーチと玄關 従来餘り注意されない所であるが、玄關の内と外の二ヶ所につける方がよい。和風住宅で格子戸になつてゐるものでは、戸の上の壁をくりぬいて、そこに一燈つけて、内外を照らすやうにしてゐるものもある。また天井燈をつけたりブラケットを用ひたりする場合もある。

應接間 近ごろはスタンドとテーブルとが、一様になつたものがあつて非常に趣がある。應接間は第一印象のよいやうに照明その他の器具を備へつけねばならぬ。

客間 客間は應接間に代用されもし、場合によつては來客の寢室ともなるから、心を落ちつけて、シンミリと語り合ふことの出来るやうな明るさを必要とし、器具の意匠も他の調度品と、よく調和したものを選ばねばならぬ。光線の量から考へれば日本間は、周囲の壁の反射が少く、天井も明るくないから、どぎつい照明になり易い。こんな場合にはグローヴにするといふ。また照明器具を、思ひ切つて大きくするのも一方法である。客間にはスタンドを設けることも必要でありまた床の間の天井につける照明は、細心の注意をして、掛物等に對する感しを害さないやうにすべきである。

書 書齋は主人の讀書室であり、居間であり、また廳茶間を兼ねる場合がある。こゝには机にスタンドが欲しい、フロアースタンドも便利である。また人によつては、その趣味と嗜好により、スタンドを壁に壁全體を、明るく照らして讀書することもある。この場合は書棚の隅にある書籍の背文字が、壁に映る程度の明るさが必要である。

子供室 子供にも全體照明で、ほの暗いのを好む者と、机の上のスタンドの照明を好む者があるから、注意しなければならぬが、この場合陰鬱な氣質の子供でも、明るい全體照明を用ひて、周囲の調度品等も明るいものを選べば、自然性質が馴らなつて来る。

寢室 寢室の獨立してゐる場合には、壁の方の壁にブラケットをつけるといふ。その他ネオン・ランプを用ひれば、最も經濟的である。普通の日本式住宅では、居間と寢室とが兼られる場合が多いから、その場合は寢室としての気分も考へねばならぬ。寢室の照明は他の室に比べると、幾分暗い方がよいから、光を和げるやう工夫しなければならぬ。

居間 居間は家族一同が集まる室で、家人の慰安場でありまた團圓場である。照明は強い光よりも柔い方が望ましい。

洗面所 洗面所の照明は從來衛生、能率等の點から、最も重要視せられるべきであるに拘らず、一番閉却されてゐたが、出来る限り照明度を向上させねばならぬ。

浴 浴場は洗面所と同様の明るさが必要であるが、一般に輕んぜられてゐる。こゝにはグローヴを天井につけるか、ブラケットで取りつけるのがよい。

洗面所 一番よい照明の仕方は電燈を、大體鼻と同じ高さで鏡の兩側につけるのである。

暖房装置 火鉢、炬燵、爐、行火等を初めとして、各種ストーヴ、温水、蒸氣暖房等の大がよりなものに至るまで種々あるが、火鉢、炬燵、爐等は炭や薪によつて、有毒な一酸化炭素や炭酸ガス等を發するから、換氣に留意しなければならぬ。

ストーヴ 石炭や薪などを燃やす従来のストーヴの外石油ストーヴ、瓦斯ストーヴ、電氣ストーヴがある。近ごろの進歩した瓦斯ストーヴは完全燃焼をするから、有毒瓦斯の發生は少いが、瓦斯は燃焼の際水蒸氣を發散するから、長時間使用してゐると、水蒸氣過量のため蒸結して水滴となり壁、窓その他調度品を害するやうになるから、時々換氣を行はねばならぬ。電氣ストーヴはニクロム線などに、電流を通じて生ずる熱を利用したもので、衛生上ならびに便利上、理想的なものである。

して、テーブルの中央部を照すやうにし、周囲は比較的暗くすれば、気持ちのよいものである。その他便所、階段、廊下押入、庭園等の照明も適當にすべきである。

要するに照明法は實用方面だけでなく、裝飾の美的方面にも注意して、慎重に器具を選ばなければならぬ。

第十一節 暖房と冷房

室内の標準温度 室内の温度は衛生上から、また仕事の能率上からいつて、十五度乃至二十度ぐらゐが適當である。冬は暖房法、夏は冷房法を行ひ、その必要な温度を保つのである。

我國では、古くから暖房装置はしてゐても、最近まで冷房装置はされてゐなかつたが、今日大建築物には、大抵この冷房設備をするやうになつた。

室内の標準湿度 我々が愉快に感じる湿度は六十パーセント前後で、多季は外氣が乾燥するから健康上よくない。また夏季は湿度が高く、水蒸氣が非常に多い。殊に濕氣の多い日には不快である。これは外氣に澤山水蒸氣を含まれてゐるため、人體から蒸發する水蒸氣が、皮膚の表面に堆積し、皮膚からの蒸發を妨げるからである。

温水暖房 一般に地下室などの低いところに汽爐をおいて水を熱し、これを鐵管で各室の放熱器に送り、冷えた水は再び汽爐に戻るやうにしたもので、別に屋上または屋根裏などに膨脹タンクを設けて、破壊を防ぐやうになつてゐる。

蒸氣暖房 汽爐の構造は温水暖房のものとは同一であるが、汽爐の上部に出來た水蒸氣が管中を上昇して、各室の放

熱器に行くやうになつてゐて、別に膨脹タンクは置かない。蒸気暖房は清潔で衛生上よく、温水暖房に比べて放熱器から、相當離れても暖くなるといふ長所がある。

冷房装置 扇風機や室内の氷柱なども、小規模な冷房装置といへるが、大建築物に施すものは、その一部にこの装置をして冷気を送風機で各室に送り、更にこれを吸ひ出すやうな排気装置になつてゐるから、室内は絶えず新鮮な涼しい空気を保つことが出来る。

第十二節 冷蔵庫

普通家庭用の冷蔵庫といへば殆ど氷冷蔵庫で、電気冷蔵庫や瓦斯冷蔵庫の使用は特殊な一部に限られてゐるから、こゝには大衆的な氷冷蔵庫使用に必要な知識のみ二三挙げて置く。氷冷蔵庫の夏番鑑別 冷蔵庫内の温度は、絶えず零度から十度以下に保たれてゐることが、食物貯蔵に必要な條件で、そのためには外部の箱と、内部との間に詰められてゐる絶縁體が完全なものでなければならぬ。絶縁體としては普通キルケラントラ、絶縁紙等が使用されてゐるが、最も完全なものとしてはフェルト紙、空気、防水紙、木板、空気といった順序

の構造のものである。さうして内壁はエナメル又は磁器を使用したものが掃除に便利で、角は圓味を帯びたものを選ぶべきである。トタン等は安いのが、破損しやすく不衛生である。外部は金属よりも木製の方が耐久力もあり、冷蔵庫の目的上からもふさはしい。氷室は上部又は側方に設けられてゐるが、普通氷の直下が最も温度が低く直上は高いが、その差は横氷式のもの、遙かに大であるから、上部に氷を置く式の方がよい場合が多い。

冷蔵庫使用上の注意 冷蔵庫は庫内の湿度が、大になれば乾燥してゐる時より、遙かに氷の使用量が増加するから、その原因となるやうな湿かい汁氣の多いものを入れるのは避けなければならぬ。また冷蔵庫の中で、最も冷い場所は、氷の直下であるから牛乳、バター、飲料水など臭氣を吸収する虞れのあるものは、冷たくて臭氣もなく、湿度も低い直下におくべきで、野菜類はその反対に氷の上でもよい。但し魚肉類は最も底部におき、果物類は中間におくのが一番所を得てゐることになる。氷室には常にその半分以上を占める氷を入れて置かねば、却つて不経済である。冷蔵庫の手入 冷蔵庫は色々な食品を入れるため、兎角不潔に

なり易いから、一週間に一度、少くとも半ヶ月に一度位は、五立の水にソーダ一匙を溶かした液を布切につけて拭き、後ち清潔な布で拭き乾かすのが大切である。濡れてゐると腐敗菌が発生しやすく、冷蔵庫の目的を損ふ場合がある。尚この際やゝ濃いソーダ液で、排水管を洗ふことも必要である。夏季の暑い頃は、冷蔵庫内でも十度位に達することが往々あるから、そんな際には鉢に水と氷を入れ、その中に塩詰にした食品を浸けておくと、腐敗の虞れは絶對にない。それは氷の温度で食品が冷却されてゐるからである。冷蔵庫から一度取り出した食品は、他の品物と比べて腐敗し易いから、早く食することが大切である。また氷を布切で包んでおくと、氷そのものゝ保存には適してはゐるが、冷却の意味には副はな

いから、冷蔵庫に使用する場合は包まない方がよい。電気冷蔵庫 電気冷蔵庫は冷凍機といつた方が、その性質上應はしい。これは直接電気で冷却するのでなく、冷却に必要な瓦斯を壓縮して液體にする際の動力に電氣を用ひるのである。簡単に説明すると、電氣によつて瓦斯を壓縮すると高温になるから、それを空氣によつて冷却し、液體にするのであるが、液體になつたものが再び壓力を落とすと氣體にかへるの

で、その際周囲の空氣を非常に冷却するのである。だから冷凍機の中に水を入れておけば氷が出来来るわけである。電気冷蔵庫は氷使用の冷蔵庫に比して遙かに経済的で、湿度が食品の冷蔵に應はしい十度以下に絶えず保たれてゐる。即ち庫内のどこにおいても常に攝氏五度以下である。また濕氣が氷冷蔵庫に比して非常に少ないため、食品の保存力があるかに大である。また氷の出し入れなどの手間が、全然省けるなどの特長を備へてゐるから頗る便利である。

第十三節 家具の手入法

金銀器の手入法 金は舶來の赤粉といふ薬を布片に塗けて磨るか、マグネシヤを少し温めて用ひ、その後を他の布片でよく磨いてから、皮革で磨つて置くと、何時も新しいものゝや

うに光つてゐる。銀も矢張り金と同様に赤粉を用ひるか、アンタルニンといふ薬品で磨く。銀製のフォークやスプーンなども、赤粉をフランネルの如き柔かな布片に塗けてよく磨き、その後を乾いた布片でよく拭き込んで置くといつても美しく光つてゐる。

銀製の大皿やニッケル製の皿などは、プレート・ポリッシュといふ銀磨石鹸又は、アンタルニンといふ銀磨液で磨けば綺麗になる。然かし大きな銀製の器で彫刻のあるものは、梅酢を煮沸して極細楊枝に含ませて磨くとよい。銀製の書など彫刻のあるものは梅酢を煮沸し、それを毛の硬い極細楊枝に含ませて、彫刻の上をよく磨つて赤粉を塗つて磨くとよい。小さい銀製の器などは、梅酢を煮沸して用ひる代りに、書火の上に程よく熱して熱くなつた頃、布片に梅酢を含ませて拭きながら磨けばよい。

銀製の磨き方 銀製の器具を磨くには、鹽を布袋に入れて氣よく磨るとよい。銀製の茶入などの周囲が凹んだときは、豆を茶入の中に入れて清水を注ぎ込んで置く、豆が脹れる勢ひで凹みの通りに直るものである。

銀製の磨き方 銀製の器具は磨粉で磨つてもよいが、瑕垢が

出来たり地金が早く減るから、アモア煉製磨粉を用ひるか、糖味膏を塗つて洗つた方がよい。

銅製の磨き方 銅製の器具は磨粉で磨れば緑青も除れて綺麗になるが、落付いた黒ずんだ色は削けて赤くびかくと光り、銅製の價値を失ひ地金の減る虞れがあるから、糖味膏を塗つてよく洗ひ、乾いた布切でよく拭き錆させぬやうにすることが肝要である。又砥の粉と油とを混ぜて磨き、後を柔かい布片が軽皮で拭いてもよい。銅器に錆が生じた時は、その器の中に多量の清水を注ぎ込み、梅酢を容れて暫らく置く、容易く錆が除れるのである。

銅製の磨き方 普通の銅製物は、ダイヤモンドといふ舶來の鐵磨きで磨けば綺麗になるが、大きな物は布片へ石油を含ませて磨くとよい。鐵製の銅釜類は錆び易いから、使用後明礬一匙を一升ほどの水に溶かし、それを塗つて置けば決して錆ることはない。使つて庖刀類なども使用後、よく洗ひ淨めて拭いて置く注意が必要である。さうして梅雨期には米糠をよく塗り、その中へ挿込んで置けば錆びない。

鐵瓶を錆びぬやう保存するには、オリブ油、丁子油、樟油などを塗り、粗末な毛布か紙に包み、空氣中の濕氣に觸れ

ぬやうにして置けばよい。これを使ふ場合には石鹸をよく油氣を洗ひ淨めるのである。鐵瓶を永く保存して湯の風味を良くするには、時折り文火の上へ逆さに伏せ、内部を乾燥させるのであるが、又就寝前に鐵瓶の湯を捨て、逆さに火鉢の五徳に俯



入手の瓶鐵

伏せて文火にかけて置いて置いてもよい鐵瓶の光澤を出すには洗滌

で洗はず、毎朝蓋の上から清水を浴せかけて火にかけ、蓋を木綿の拭布で丁寧に拭く。

ナイフの磨き方 食卓用のナイフが錆びた時は、メタルポリッシュといふ錆落し薬をナイフに塗り、それに極く少量の油を塗り、その後を輕皮で幾度も拭くのである。

ナイフの柄は鹽とレモン液汁で磨き、若し柄が脱けた場合は松脂を溶かし、それへ少量のセメントを加へて柄の孔に流し込み、その上からナイフを押し込めばよい。

ナイフを使つた後は洗滌劑を溶かした湯に、柄が脱れぬやう双だけを浸け、少時経つてそれを別の湯で洗ひ、よく水氣を拭きとつた後を、ワセリンか他の油で拭き、フランネルの布片に一本づゝ包んで置くのである。

鐵瓶の磨き方 鐵瓶の面が曇つた時は、粉白粉を撒布して拭いても綺麗になるが、酒精を布片に滴してよく拭き、その後を乾燥した柔かい布片で幾度も丁寧に拭くとよい。清酒が無い時は清水へ炭酸酒を溶かし、それを布片に含ませて拭いても綺麗になる。鐵瓶の蓋とか弁などに油が溜り汚れた時は、石油を塗って拭き、その後を光澤拭布で拭いて置く。

鐵瓶の磨き方 鐵瓶類の鐵氣を抜くには、甘露又は米糠を中に入れ、多量の清水を加へて充分に煮込めばよい。又黒砂糖を水に溶かして煮ても、鹽粉を煮ても、栗や柿の皮を煮ても除去することが出来る。

洋杯の洗ひ方 洋杯は鹽を熱湯に溶かして洗へば綺麗になるが、熱湯湯にアンモニア水を滴して洗つてもよく、また酒

精を洋杯に少量滴して洗つても綺麗になる。すべて洋杯を洗つた場合は一回能く水気を拭き除つて、更に乾燥した柔かい布片でよく拭くことを忘れてはならぬ。

洋杯は鹽水で煮て使ふやうにするがよい。また新たに買入れた洋杯に湯を注ぐには、最初の間は湯を多量に注がず、少量注ぎ入れて洋杯が温まつたところで更に注ぐのがよい。また多季は先づ洋杯をよく火に晒して温めてから、湯を注ぐやうにしないと破損する虞がある。

鍍金の洗ひ方 鍍金を施した物は蒸を煮沸した湯で洗ひ、その後を柔かい布片で水気を拭き除つて乾燥させる。

フライ鍋の洗ひ方 フライ鍋、シチウ鍋、油鍋などは使用後直ぐ新聞紙か洋紙の清潔なものでよく拭き、その後へ少量の油を塗つて置くのがよい。若し黒く汚れた場合は少量の炭酸曹達に清水を加へ、それを煮沸してよく拭ひ、後へ清水をかけて十分に水気を拭き除り、今一回油で能く拭いて置く。

鍍銀の洗ひ方 鍍銀の鍍金を使ふ場合は必ず清水を注げて洗ひ、また使つた後は絲瓜とか洗帚で擦り、充分清水を注げて洗はなければならぬ。焦げついた時は木炭でよく擦つて落し、鍍金の外底の灰を洗ひとつて、乾燥した清潔な拭巾で

内外をよく拭き、棚の上に俯伏して置くのである。

鍍銀の洗ひ方 鍍銀の鍍金は白臘の鍍れ易いもので、それが鍍れると直ぐ緑青が発生して有害であるから、鍍れた場合は、直ぐ白臘を引くことが肝要である。また鍍銀で煮物をした時は冷えぬ中に他の器に移さぬと、毒を発生するばかりでなく、鍍金の保存にも宜しくない。

すべて白臘引の鍍金は、外底は洗帚に灰をつけて磨き、内部の方は清水を注げて能く洗ひ、その後を拭巾で拭いて置くのがよい。若し焦げついた場合は鹽を塗りつけて洗ひ、決して洗帚や灰などを用ひてはならぬ。洗つた後は乾燥した清潔な布巾で能く水気を拭き、棚の上に俯伏して置く。

鍍金の洗ひ方 アルミニウム製の鍍金は錆も発生せず、有毒の化合物も発生しないから衛生上安全であるが、酢と鹽とは弱いから酢を入れぬこと、煮物が出来終つたら直ぐ他の器に移し入れ、よく洗ひ置くことを忘れてはならぬ。アルミニウムは品質が殊に軟弱で凹み易いから、堅い物で擦らぬやうに注意することである。

硝子瓶の洗ひ方 瓶へ細かい砂利を入れて清水を加へ、口栓を堅くして幾度も振ると、大抵の汚れは除れる。馬鈴薯を細小



硝子瓶の洗ひ方

く裏目に残り、それを清水と一緒に瓶の中へ入れて振つても綺麗に洗

へる。また酢と鹽を注ぎ込んで擦り、少量の酒精を瓶の中に入れてよく振つてもよい。

漆器の洗ひ方 漆で塗つた碗は、微温湯に米糠を加へた中で手で洗ひ、熱い湯で洗はぬことである。洗つた後は乾燥した柔かい布巾でよく拭く。然し上等の碗類は一度乾燥した柔かな布巾で拭いた後を、更に奉書紙をよく揉んで拭いて置くことである。仕舞つて置く時は蓋と身との間へ奉書紙か、柔かい紙かを挿んで挿み置くことが必要である。新しい塗物は漆の香があるが、この香を消すには米の磨汁の極く濃いものを煮

沸し、それで二三回ほど注げば除れる。

風爐の洗ひ方 風爐には石、燧瓦、鍍銀など種々あるが、普通の家庭で使つてゐるのは瓦や土製の風爐である。瓦や土製の風爐は買求めた最初から、餘り強い火を用ひると直ぐ煤が accrue するから、最初の間は成るべく文火で温めて用ひ、日の経過につれてだん／＼強い火にすることが肝要である。

風爐の戸は火を移し入れて、火の起るまでの間は全體を開けて置き、煮物が大抵煮えた頃、戸を三分くらゐに閉ぢ、決して煮終るまで開放して置かぬこと。洋食調理に用ひる風爐は、一尺二寸四分の物で、その上に木のついたものを選ぶ方がよい。

割げたニス塗器 ニス塗りの物の割げたものは、先づ紙ナスリを一度軽くかけて拭き磨きしてから、セラックニスか、白ニスを綿で作つたタンゴに着けて塗りつける。またテレビンと油を等分にして器に入れ、その器を更に湯の中に入れて、直火でなく湯煎で溶かし、これを刷毛又はポロ布につけて全體を拭き上げると綺麗になる。

鍍金の臭氣抜き法 新しく買求めた鍍金の木の香を除るには、四五本の燈芯を飯櫃に入れ、その上から熱い湯を注ぎ込み、

蓋を被せて三時間くらゐ置き、その後を清水で洗つて置けば自然と木の香が消える。

掃除の使ひ方 新らしく買求めた掃除には少量の粗糠を入れ、少時掃木で掃つてから粗糠を捨て、その後を清水で能く洗つて使ふのである。

醤油の清潔法 醤油樽の呑口のところは、菌の発生し易いもので衛生上宜ろしくないから、酒精を拭巾に含ませて拭いて置く、酒精の無い場合は焼酎でも火酒でもよい。

木製器具の洗ひ方 木製の器具類は、布片に酢を含ませて汚れた部分を洗ひ、その後をベンチン油で磨くと光澤が出る。蟲害を預防するには第二クロール水銀を清水に溶かし、それを器具に刷毛で塗つて置く。この液は白色の器具に塗つても、色のつく心配は更でない。

紫檀とか黒檀などすべて唐木製の器具は、ベンジン油を麻布へ浸けて拭く。赤色の器具はベンジン油へアルカネットを少量加へて、薄い桔梗色に變つたところへ、黄臘とか白臘とかの小塊を加へて溶かし、その液を硬い糊位にして、それを大豆位の大きさに布片へ塗つて擦り、フランネルの布片で拭いて置くとよい。

白木箱の拭き方 白木箱や本箱などが汚れた場合は、熱い湯を布片に含ませて拭き、その後を別の乾いた白色の布片で拭いてから、イボタ蠟を塗つて光澤出しをするのである。桐製の箱等はフランネルか、柔かい清潔な布片へ酢をつけて拭けばよい。

彫刻物の洗ひ方 床の間に飾るやうな彫刻物は、柔かい刷毛で擦つて塵埃を拂ふ。若しそれで綺麗にならぬ場合には、濃縮枝へ酒精を含ませて洗ひ擦ればよい。

金銀物の拭き方 額面とか鏡枠などの金銀に光澤を出し、又は是等の物に附着した塵の拭き除るには、玉葱を横に二つ割にし、その割り口で徐かに擦つた後を、海綿とかフランネルとかの布片に清水を含ませて軽く拭くとよい。

ワニス塗物の洗ひ方 ワニス塗りの汚れたものはフランネルの布片とか、柔かい布片へ極く少量のオリーブ油を滴し、それで擦ると指痕などはすぐ消える。

火鉢の洗ひ方 夏季火鉢が不用になると一般に藏つて置くが、紫檀、黒檀、厚または銅製の火鉢なら、空拭きをする場合に燈油でも極く少量塗つて拭く。桐製の火鉢なれば乾燥した布片で、空拭きをして藏つて置けばよい。

樂器の洗ひ方 琴、三味線、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンなどは、濕器のある場所や風の通るやうな場所へ置くことは禁物である。琴は貼りつけてある部分が離れ、三味線は皮が離れ、ピアノは内部の木が脹れて狂ふから、平素は勿論特に梅雨前に注意して、置き場所を選ぶことが肝要である。

人形の洗ひ方 雛人形や武者人形などは、それを藏ぶ前に戲のつかぬやう、硫黄を燻べた箱の中へ暫らく入れて置き、程よく硫黄にいぶされた頃を見計ひ蓋の箱へ丁寧に藏ふとよい。尤も人形の顔や衣裳などが硫黄のために汚れたり、色變りしないとも限らぬから、白色の布片で全部を包んでいふした方がよい。箱に燻べた硫黄を入れることが面倒なら、狭隘い室内で燻べてもよい。蟲害の藥品を人形箱の中に入れて置くには、樟腦かナフタリンがよく、樟腦の粉末でも蟲除になる。

草履の洗ひ方 草履の蒲團が汚れた場合は、亞麻仁油と西洋醋とを等分に加へたものを布片に含ませて拭く。皮表紙の書箱には鶏卵の蛋白を泡立て、水を加へ、フランネルの布片に含ませて拭くのがよい。

動物の洗ひ方 花菱産の汚れは微温湯の中へ一握の鹽を加へて洗へばよい。絨氈の汚れは明礬でも炭酸曹達でも薄く微温湯

に溶かし、それで洗へば綺麗になる。

行李の洗ひ方 旅行の汚れたのは、鹽を硬い刷毛に塗つて擦り、その後を清水をかけて洗ふと綺麗になる。

麥藁帽子の洗ひ方 最初に帽子全体の塵埃を拂ひ霧を吹きかけ過熱飽和カリウム一瓦を、二十瓦の水に溶して塗り、その後を酢酸小盃一杯に熱い湯六合の割合で溶した液で洗ひ、尚ほデカリウサンソーダ一瓦を十瓦の水で溶した液で洗ひ、その後を充分清水で洗ふ。又硫黄の瓦斯で蒸し晒してもよいがこれは甚だしく同濃度の瓦斯が行きわたらぬ缺點がある。帽子を洗つた後で少し青味をつけるには、キンピロ(青粉)を水に溶かし、手に擦り上げて空の色ぐらゐに見えるのを度として染める。この染粉は普通の藥屋店で賣つてゐる。

雨傘の干し方 雨傘は半開きにして、日蔭に柄を下にして懸けて置く方がよい。梅雨期は雨水に鹽分が含まれてゐるから、傘の筋骨に鹽が生えたり、紙に斑點が出来たりして損み易い。これを長く保たせるには、外出をした後は必ず清水をかけ雨の鹽分を洗ひ流してから前のやうにして干すことである。油氣が紙に少なくなつた場合は、在の油を塗つて置くと耐久力が強くなる。

硝子窓の拭き方 硝子窓の戸は硝子磨粉で拭いてもよいが、布片に酒精をつけて拭き、大きに乾燥した清潔な布片で拭き、最後にセーム皮で清拭きをすれば一層透明になる。

桐箱の除菌 桐材につく蟲を樟腦やナフタリンで驅除できない場合は、患除香錠を用ひるとよい。これは陸軍被服本廠で研究したもので、同廠内被服協會で取扱つてゐる。被服に對しては非常に強力な防蟲劑で、書畫保存に對しても効力を持つてゐる。被服協會は東京王子區赤羽町陸軍被服本廠内被服協會である。

第五編 日用手紙文

第一章 手紙文作法

第一節 手紙文一般の心得

書翰の一般作法については、前にも既に述べた通りであるが、こゝでは更に女性の書翰を本題として、手紙はその内容をどういふ風に書けばよいかといふことを説明して見やう。

一般に女性に限らず男性でも、立派な手紙を書くといふことは難かしいもので、どうも巧く書けないといふ嘆息をよく聞くが、實際はそんなに難かしいものではない。それを難かしく考へるのは、要するに手紙を書くコツを知らないこと、自分の本心を曲げてまでも、成るべく美しい手紙をこしらへやうと考へるからである。

手紙の目的とするところは、自分の意思を正しく先方に通ずる點にあるのだから、先づ虚飾虚禮を去り、ありのままの素直な心持で、自分と先方の人との關係を充分考へた上、どういふ

風に物をいふべきかを先づ定め、思ふ通りのことを有りのまゝに書けばよいのである。さうすれば自分のいひたいことも、心持もすべてが、その一本の手紙の中にこもり、そのまま先方の人にハッキリと受入れられるに違ひないのである。

尤も思ふ通りのことを有りのまゝに書くといつても、一言一語違ひのないことは、いかなる人に對しても、その人を尊敬した心持で書かなくてはならぬ。さうすれば自然に禮儀も正しくなり、言葉づかひにも注意することになつて、正しく美しい手紙が書けるのである。

その次に大切なのは、要件をハッキリせしめるため、自分の述べやうと思ふ事柄については、行き届いた注意を拂ひ、しかも無駄のないやうに書かなくてはならぬ。いくら行き届くのが大切だからと言つて、あれもこれもと細大もらさず、隅から隅まであらゆる事を書き並べることになる、いかに筆の達者なもので、主客が顛倒したり、首尾が混亂したりして、終には主要な要件が何であるか、讀む者をして當惑せしめることになるであらう。

「これでは行届いてはゐるが無駄の多いものとなり、所謂過ぎたるは及ばざるが如き」、拙い手紙となつてしまふのである。

例を挙げていふならば、何かの打合せをする場合に書く手紙として、「明何日午後何時頃参上するといふ風に書けば、至極明瞭でハッキリしてゐるが、それを簡略して「明日何時頃参上」としたのでは、明日とは果して何日の意味か、また何時とは午前のか午後なのか甚だ明瞭ではない。さらばといつて念に念を入れ「昭和何年何月何日 即ち本日よりいつて明何日の、午後何時何十分頃参上のつもり」といふ風に書いたのでは、まことに無駄や蛇足の多い手紙で、讀む方にとつては煩はしいばかりか、人によつては腹を立てしまふに違ひない。

次に注意すべきは、親しい仲だからといつて馴々しい心持から、つい腹暴に書きなぐつてはいけないことである。これは不行固な手紙と共に、心易い仲だと兎角陥り易い弊風であるが、手紙は會つて話す場合と違ひ、文字だけで自分の心持を現はすものであるから、誤つたことや失禮にわたる事柄を、表情とか聲の調子とかで調和することが出来ない關係上、いろ／＼な誤解を生ぜしめる原因となるのである。

ことを忘れてはならぬ。それと同時に、感情の激してゐるときは間違を生じ易いから、さういふ時は筆を執ることを避け、心が平靜に返つてから書く心掛が必要である。

それから手紙は誰しも上手に書きたいのが人情だが、殊更らに上手に書かうとする間違ひの基で、つい「思ふことを率直に書く」といふ本来の趣旨を忘れ、作り飾つた虚飾の物になるから、この點は嚴重に戒め、努めてその弊に陥らぬやう用心し、それよりも成るべく多く書いて書き馴れるやうに心掛けなくてはならぬ。つまり無精をしないで手紙を書くことである。思ひついた時とか、用のあるときとか、人から手紙を貰つて返事を出す場合とか、さうした時には一日延ばしをしないでその時々、進んで手紙を書く習慣をつけるといふことは、手紙上手になる一つのコツである。

繰返すやうだが、本當に上手な手紙といふものは、殊更らに綺麗に作り飾つた文章ではなしに、思ふことをハッキリと正しく、相當の禮をつくして書かれたものゝことで、さういふ手紙を自由に書けるやうになれば、直接先方の人に送つて對談する以上に、自分の意思を受入れて貰ふことが出来るのである。

第二節 情は女子手紙文の生命線

女子の書翰文を書く上について考へなくてはならないのは、濃やかな情をつくした優しきものであらねばならぬといふ一事である。男子の書翰においても情を没却してはならないのは言ふまでもないが、女性にあつては特にそれが必要であることを強調したい。それは優しさが女性の生命線だからである。

そこで直ぐ、情をつくすにはどうすればよいかといふことが問題となつて来るわけだが、これを簡単にいへば、眞情を吐露すべしとの一言でつきるのである。つまり求めてわざとこれをつくすのではない。人から借りて来たものを自分の眞情の如く偽装してはならないし、また求めてさうしたのでは、決して本當の情味のあらじれるものではない。平生から自分の情を偽らない用意をし、その上の修練を積んで、時と場合とに應じ、必要だけの情を、隠如として表現せしめるやうにせねばならぬが、こゝで難かしいのは、情の状態なるものは元來その形の認むべきものがなく、従つてこれを表はすのが樂でないといふことである。

れを促へることが容易でないから、常に心掛けてゐて、何かに感動した場合、直ちにこれを言葉に現はしたり、文章に表現する修練を積むことが必要である。かうして行けば必要な場合に際し、その人々の天分に應じて、ある程度までは自分の眞情を流露することが出来るが、若し平生においてこの用意を怠つてゐると、必要な場合に臨んで自分の眞情を表現することが出来なくなり、結局借りものゝ心にもないことを、無難に飾り立てゝ苦しい情の表し方をし、田舎娘が白粉のコテ塗りをしたやうな、見苦しいものとなつてしまふのである。

ところでこゝに心得て置かねばならぬのは、いかに眞情を流露したところで、必ずしもそれがそのまま見た目に美しい文章にはならぬといふ一事である。言ひ換へるならば、眞情さへ流露するならば、いはゆる美しき文章が出来ると考へてはならないことである。眞情を流露した文章は、これを見る相手をしてこれに共鳴せしめ、感動を與へるのが目的であつて、目に見て、「美しい文章だ」と褒めて貰ふのが目的ではないのである。

例の本多作左衛門が陣中から妻女の許へ送つたと傳へられる「一、火の用心、おせん泣かすな、馬肥やせ」といふ書翰の如きは、誰が目に見てもこれを美しい文章といふものはあるまい

が、書翰文としてはその眞情があらまゝに流露してゐる感で天下の名文といはれてゐる。書翰文に情愛を現はすといふ眞の意味は、是等の例について考へても、凡そ理解が出来るかと思ふのである。

第三節 豊かな趣味を盛込むこと

文章は趣味のものであるが、殊に書翰文を書く場合にはこの趣味といふことを忘れては、相手に感動を興へることが出来ない。中でも女性の書翰において、ゆたかな趣味性を程よく取り入れたものは、思はず知らず惹きつけられる心地がして、尙かず讀まれるものであるが、これに反して無味乾燥な、何の趣きも、潤ひも、味ひもない事務的な書翰は、これを書いた當人が情愛に富んだ女性であるだけに、寧ろ無様な心地がして、嫌悪な心さへ起るものである。

元來書翰なるものは、普通の文章と違つて、單に思想や感情を表現するのみでなく、自分の意思を訴へて相手をして共鳴せしめんとする、一つの使命を帯びてゐるのであり、その目的を達するためには、第一には自分の思ふことをハッキリと正しく傳へること、第二には眞情を流露して、相手に感動を興へること

とが必要となる譯であるが、この二つの要素を充分發揮せしめるためには、豊かな趣味性を加へてこれを補ふことが必要となつて来るのである。

抽象的な議論はこれ位にして、早い話が一寸海水浴に友達を誘ふにしても

白鳥は悲しからずや海の青空の青にもそまらず深ふ。海が青くなりました。こゝまで書いて一寸用達しに立つたら、兄がコソコソ讀んでしまひました。「海はいつでも青いよ、夏にならなきやお前なんか海を見ないから、殊更青くなつたやうに吃驚して書くんだらう」つて、憎まれ口を叩きました。私言つてやりました「黄海だつて、紅海だつてあるぢやありませんか」すると「あゝ海は三原色だな」ですつて。

書き出しに秋水の歌なんか引出した詩的氣分が、すつかり、運致してしまひました。

兄とこんな話をし合ふのも、あとせいゝ三年よ、と母が取りなすのを聞けば、ほんとうにさうよ。泳ぎませうよ、いらつしやいませう。今年はヨットの旗の色も蝦茶に變へました。あなたのお好きな早稲田びいきなの。まげずに鳥糞子岩まで、メロールで競争しませうよ——。

と、いふ風に、趣味たつぷりに書いたのと、「この夏には返子あたりへ、海水浴に出かけませんか、御賛成ならば御返事下さいな」といつた調子で、フツキヲ棒に書いたのでは、いづれがどれ程効果的であるかは、誰の目にも一見して判然がつくことであらう。

文章はすべて趣味のものである。何等かの趣味、何らかの興味を添へることに心掛けねばならない。

第四節 折々の風物を活かすこと

徒然草の中に愛好法師が書いてゐる。

或る雪の降る朝、法師が靴の用あがつて、知人の許へ手紙をやつたが、急いだまゝにその面白い雪景色のことには一言も及ばず、直ちに用件のことのみを書いて送つた。すると先方から返事が来た。その中に、

「この雪いかゞ見ると、一筆のたまほほどの、ひがくしからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは、かへすゝも口惜き御心なり」と書いてあるのを見て、さすがの愛好法師も、一本參つたといふことである。

また同じ徒然草にからも書いてある。

書翰の時候に、時下酷暑の候など、あつさり片付けるよりも、此の頃の暑さに當地では十日以上も雨を見ずなど、書けば趣があり、またこの書を認める時青葉がくれに時鳥の聲を聞くなど、書いたのは、その時その人の有様もしのばれて何となく床しく覺ゆる。

それだけの主張を持つた愛好法師が、雪の朝の書翰に雪景色を書き漏らしたため先方の御機嫌をわるくして要求を断られたのは矛盾してゐるが、この矛盾はそのまま、書翰文に四季折々の風物を取り入れることの必要を力説してゐるものである。

實際においても書翰文の多くは、その時候について書く慣例となつてゐるが、風物といへば單に時候とのみに限らないのである。その時折につけて、眼前に展開された風物を取り入れると文章の趣きを一層ゆたかにして、感動性に富んだものを書くことが出来るのであるから、このことも常に心掛けてゐて、その相手により、また時と場合に應じて、適切に披配することが必要である。

然しさういつたからといつて、いかなる書翰にでも原則として、必ず四季折々の風物を取り入れなくてはならぬものゝやうに考へると、それはまた型に捕はれて形式的なものとなり、無理に

また普通の口語體にしても、自由に書き得るといふことから
つい用語なども免角體を缺きがちな傾向があり、時としては勢
ひに任せ、不知不識の間に粗暴になり易いものであるから、同
輩以上の人に對する場合や、女性が男性に對する場合は、
候文で認めた方が過失がなくてよからうと思ふのである。
尙ほ参考のため、左に二三名流の書翰文についての談論を記
載して置かう。

第七節 女子の書翰文について

一體今普通に行はれて居る書翰文體は、足利時代の俗語だと
申しますが、いかさま左様らしく思はれます。即ち其の當時に
創造された諸曲の詞と一つでありませうから。

又其の以前、藤氏隆盛時代の日記物語等の文中に在る消息文
は、格別對話の體と變るところを見出しませぬ。して見れば、
今われ／＼の間に行はれて居る書翰文も、矢張り言文一致に、
現今の語を多くが至當であります。左様すれば、男女文章の
差異も餘り多くなつて、そして男女の特性の自然の儘に、
豊よく寫し出さるゝ事であらうから、誠に工合が宜からうと存
じます。けれ共、元來言文一致の談論が喧しく、且其れが如何

しても理窟に合つて居るにも關はず、現今の社會に普く行はれ
ないのは、どうも、今の俗語が餘り濫りになつて居て、そして
まだ各地方の詞が餘りに區々であるからでせう。勿論、物品で
も、古くなつた物は何となくさびが附いて、假令つまらぬ品で
も、貴く見ゆるのと同じ事で、通俗に解らないやうな古代の詞
は、何によらず、上品のやうに聞ゆるといふ次第も慥かにある
には違ひ無いが、又決して左様ばかりではありません。現今
の詞は、古言に比して、濁音彈音が非常に多くなつたのみなら
ず、殊に關東の動詞には、入聲が多く、どうしても天然流暢な
るべき日本詞の特性を既に失つて居ります。左様かと申して、
今私は古代のやうな詞にせねばいけないと申すのではありま
せぬ。

唯、文章なるものが、果して、言文一致ならざるべからず、
否、寧ろ願くは言文一致たらしめたいと云ふならば、先づ現今
通俗の詞から直して、語彙を正しくし、言辭を選んでなるべく
高雅簡明にし、口を突いて出づる詞を速記すれば即ち文を爲す
やうに致して、そして先づ書翰文から、俗語の儘を移して差し
支へ無いやうに致したいと存じます。然しそれも詞の方をも正
しく直し、又音をも言文一致に書き試み、双方から相伴つて行

つたら宜からうと考へるのです。何となれば、最早既に講義や
演説の時に使ふ詞は、自から多少文章の方によつて居まして、
普通の對話に使ふ語彙よりも正しく、又言辭も氣をつけて選ぶ
傾きがあると思ひます。畢竟、通俗語が現今のやうに亂雑にな
つたのも、詞は、筆に書き止めぬものゝやうになつたから、我
儘勝手になり果てたといふ様な傾きがあると思はれます。現て
かくの如くして、口に云ふ所を筆に移すものとなれば、信用難
きな文章は、平易簡明なれと教へても、詞と文と、全く別々であ
るから、扱こそ文章を書かうとすると、やはり、文章語なるも
のを用ひて、そして、自ら善く解らぬやうな難かしい熟語を使
つたり、耳障い古言を用ひたりするやうな事になるのであらう
と考へます。然しながら、今は何事も過渡時代ですから、此の
岸から彼岸へ移らうとするに、梯子を作らずして飛んで往かう
とすれば、却て墮き倒るゝ事となりませうから、其れも是れも
餘々と願を遂げて進まねばなりません。其れで先づ今のところ
は、成るべく通俗語の中の正雅なるもの、又は文語中にも俗
耳に疎からぬものを選び用ひて、一寸語尾を變へれば、通俗語
として、用ゐらるゝやうな文章を書きたいと存じます。殊に書

翰文から先づ左様致したいのです。けれ共、斯くいふ我々も、
やはり筆を取れば、免角文語が湧いて出て、そしてつい／＼俗
耳に疎い文が出来るやうな傾きになります。是は久しい習慣で
ありますから、容易には改まりませんが、なるべく文章が平
易になりませぬと、さまざまの物學びするに、誠に難儀であり
ます。即ち其の事柄の解釋如何を考ふる前に、先づ其の文中の
熟字熟語の解釋から學ばねばならぬといふ事になります。故に
まづざつと右申した様な事から、研究して参りましたら如何な
ものでありませう。(文章世界 下田歌子)

第八節 文章上手と手紙上手とは別

一生の間自分が習ひ覺えたものゝうちで、一番便利を感ずる
のは筆を持つて文を綴る場合である。殊に葉書や手紙を書く場
合である。我々が世の中に生活してゐる以上何人も手紙を書か
ずに済ますといふわけにはいかない。これを書かないと大切な
交際や業務の用事が辨じない。今若し世に書翰といふものが無
いとしたりば何うであらうか。情意疎通の方便に於て何れだけ
煩はしく、何れだけ勢力を費すことであらう。加ふるにその不

便不通なることは言ふまでもあるまい。唯一つの用事を便する爲め、靴や着物を着更へたり、土嚢を持ったりして旅に出で或は徒歩、或は汽車に乗り、多くの時と澤山の費用とを費して先方へ到着し、さて面會の上で用事を済了して暇を告げ又長途を再び戻つて来て、それから着換へた上、始めてくつろぐ。これ程の大手数を要する。然るに之があればこそ一封の書翰一枚の葉書克く思ひを萬里の外に致すことが出来るのである。これを思つたならば、どれだけ念入りに文句を考へて書いても好い譯である。かくの如く効用の大なる書翰文は、實用上は王公貴族より下は庶民に至るまで、老幼男女貴賤富の差別なく殆んどその利便を被らないものはない。書翰は元來生活上日常の俗用が主であつて、その用事が上手に達せられたか達しないか、聲の聲に應ずるやうに何等かの反響が無ければならぬ。反響が起れば必ず利不利が伴ふ。かう考へると書翰ほど眞面目なものはない。眞誠なものはない。書翰ほど大切なものはないといふことになる。

文章は、元來多くの人にみられる嗜れたものであれば、誰しも上手に書きたいと思ふのは無理の無いことであるが、文章を作るのは普通物の買物をするとか、説明を書くとか、廣告を書く場合とか、或は試験に應ずる時などで、この外に文章の必要なのは小説家とか論文家とかいふような、それを専門とする人達だけであるが、それよりも最つと我々と密接に、觸れてかゝるまで、四六時間中あらゆる場合に身に逼つて必要なのは書翰文である。文章ならば書かないで済ませる人もあるが、書翰だけは如何なる階級の人といはず書かないで済ますわけにゆかない。且つ書翰は元來文章のやうに、机に向つて考へながらゆつくりと、想を練り、思ひを馳せて文を綴るといふよりも、もつと手近に、簡単に用事が出来れば、直筆筆を持つて文を作り、文字に馴はし、返事を要する書翰が来れば立所に認めて用件を果すといふ事が主であつて、文章を綴るやうに長い時間を許されない。その短い時間の間に考へを纏めて、
 ◇巧な文章をもつて充分に自分の考へを言ひあらはさなければならぬ。
 ◇間違つた文字や脱字等のない様に、そして美麗に書かなければならぬ。
 ◇書翰としての法則に違ふやうに體裁を變へ適當の敬意を持つて居らなければならぬ。
 この三つの内一つを缺いでは、自分の考へが充分先方に達し

ないばかりでなく、誤解や過を生じ、延いては交際の圓滑を破り、取引上非常な損失を蒙るやうなことになる。斯くの如く書翰の上手と下手といふことは、我々の生活上如何に重きを成すかといふことがわかる。

も出て、必ず書翰上手になることは確合である。その反響に書翰等は恚うでも宜いといふやうでは從つて筆不精の人となり、上達する處か益々世界の大勢に伴ふことが出来ないから、何時か他人に置いて行かれてしまふ。

第九節 情が第一

然るに世間には往々「文章さへ作れれば澤山だ」と頭から書翰といふことを顧みない人がある。實に憐むべきである。さういふ人はまだ、書翰といふことについての自覚が無いからなのだ。文章の上手と書翰の上手とは全然別なのである。現に大學を出たといふ人でも、銀行なり會社なりに這入つた時、先づ第一に書翰で困つて了ふ。それだから「佯うも今の學校出にも困つて了ふ。書翰一つ書けな」とよく銀行會社の重役から聞かされる事がある。これ一つは實際社會の經驗に乏しく、從つて書翰に對しての自覚がなく、前に言つたやうに餘り仲氣にかまへてゐると、一は實際の場合に當つての利害得失を深く經驗して、書翰を大切に思ふとの相違から来るのである。かく書翰の重要なことが解つたならば、今までの如く書翰文を輕視することなく、他から來た書翰の返事なども幾日もく怠つたりするやうなことが無いやうに注意して、始終書きつけると同時に、適當な體裁に依つて研究する間には、自然と趣味

無精は畢竟虚心の爲めだ。字が拙であらうと文句がまづからうと、何でも構はず書く様にせねば仕事も社交も捗らぬ。

日常の通用語を俗語といつて馬鹿にするが、其俗語ほど適切に現時の人情思想を現はしてゐるものはない。これを巧く用ひて行つたら手紙でも文章でも生きて來ようといふものだ。いつかの選挙に苦戦して大勝利を得た人があつた。その趣きを知らして來たから、さしあたり「當選を買す」とでもいふところだ

が、矢野にはそれでは物足らん。そこで「シメタシメタ」と電信をかけてやつた。又或人が親の病氣を、それはよく看病したが、とうとう亡くなつた。その知らせを受けた時、矢張り電信で「ヤレヤレ」といつてやつた。わたしの手紙はすべて此流儀で情のうつらぬ手紙なんぞ貰つても一向嬉しくない。

「手紙雑誌」へ載せる爲め何か二郎の意見を求めらるるとの事なれども、二郎とて意見の問屋でもなければ社會黨の注文に應ずる爲めに意見の仕入品がある譯でもないが、世間の人が常に手紙を書くのを面倒がるのを頼りに居る所だから、其の事に就いて一言述べやう。

自分が手紙を書くのが嫌なものだから、私は筆不精でなどと避辭を云ふ者が澤山ある。現に二郎の識り合の者にも其例は少くないが、畢竟特筆不精などと云ふべき者がある筈がない。物を書くことが不精な者は、職事高擧なんでもする事をおつくりと思ふ人で、何事に限らず筆不精なので、別に筆ばかりに限るのではあるまい。こんな人は到底世の役には立たぬ。故に二郎は毎も通信不足の人に對して「筆不精」と云ふ言葉を許さぬのである。尤も世の中には己が字を知らぬ事又はうまく字の書

けぬを恥ぢて、手紙を書く事を躊躇する人も澤山あるが、是等の人に對しては二郎は常に左の如く説法してゐる。

むづかしい漢字の書けないのが何で取かしのだ。字を知つて居れば何でえらいのだ。そんな末技の巧拙はちつとも人物を輕重するに足らぬではないか。二郎は君の字を知らぬことを決して輕蔑はせぬが君が字をうまく書けぬと云ふ愚にもつかぬ事を恥と思ふて、大切の通信を粗略にするの、大層なるを悟らず（中略）つまり手紙は口で云ふ通りを字で現せばよいのだ。そして其の字も誤字宛字勝手次第忘れた文字は假名で書き、候文でも口語體でも先方に分りさへすればよしとして遠慮會體なく書き立て、讀み悪くからうと思へば一寸「御判讀下さるべく候」と書いて置けばよいではないか。（中略）二郎の此の手紙などは宜しく筆不精家の手本とすべき文章範疇であらうと思ふ。

愚説大略斯の如し。然れども尙ほ平易に懇々と君の性誥に書き載せる必要あらば、何時でも（但し來る前に電話で打合せて）來て、二郎の長談義を聞いて、書き立つるも亦妙なるべし。草々頓首。（手紙雑誌 元廣島高商校長 矢野二郎）

第二章 文例

第一節 祝賀

一 新年の文

謹しみて新年の御祝詞きこえ上げ候。皆々さま御すがしく御慶重ねさせられめでたく御慶び申上げ候。わたくしかた一同かはりなく年を迎へ候。まゝ御心安う思召くだされたく候。目出たくかしこ。

二 婚姻を祝ふ

あまねき春の光麗かに候。をりから御高安賀し上げ候。さてこのたび御息さま御良縁相整ひ、近日松田様御令嬢雪子さまと御結婚の式を挙げられ候。趣まことに御悦ばしき御こと存じ上げ候。雪子様には先生御門下中にもすぐれて御才藻高き麗人と承り及びをり候。御令息様にはこよなき御好配と幾久しく御祝ひ申し上げ候。この品聊か御祝ひのしるしまでに御覽に入れ候間、御笑納下され候。はゞ幸に存

じ上げ候。まづは右御悦びのみ聞え上げ候。めでたくかしこ

三 出産を祝ふ

承り候へば御慶にはこの程初の御安産にて、玉の如き御男子御出生との御こと御羨しくもまた御目出度く平素の御望み通りにて一しは御満足の御ことと存上げ候。時候も春の最中とて御肥立もよろしくさぞかし御晴々しき日々を御過し遊ばされ候ことと、私共まで心明るむやうに覺え候。これは甚だ見苦しき品に候へども、赤練のお下着になり御用ひ頂きたく、いづれ近日御伺ひ申上げ候つもり候へども取あへず文して御悦び申上げ候。なほ當分御加養專一に遊ばされ候やう祈り上げ候。かしこ。

四 入學を祝ふ

勝太郎さんには、今度中學校へ御入學の由、おめでたう存じます。將來何におなりになる御希望か存じませんが、これから何になるのでも中學校だけはぜひ踏んでるなければなりません。金銀の制服がどんなに似合ふでせう。かはゆらしい學生さんにお成りでせうね。そして、常に好きだといつていらつした英語を勉強なさる事が出來て、どんなに嬉しいでせう。ローダ

一の本を持つてほゝゑんでいらつしやる、可愛らしい制服姿が目に見えるやうです。學校のおかへりにでもちよつとお寄りになつて下さい。母も折角わが子のやうにいとしがつて、勝さんの制服姿をみたいといつて居りますから、さよなら。

五 卒業を祝ふ

良一様にはこの春めでたく優秀なる御成績にて、大學の業を終らせられ候御事、承るだに嬉しく御よろこび申上げ候。これ皆御當人さまのたゆまぬ御勉學のほど固よりながら、幼くして父上を失ひ給ひし良一様を御手一つにて、この年月育くませられ、最高の學府までの御教育を続けさせ給ひし、母君の愛のお力の大きさと今更に感じ入り申し候。

學業成りしを父上の奥津城に告げ給ふ良一様のお姿を前に御涙湧きしとの御手紙には、思はず臉も熱く、さこそとうなづき申し候。かしこ。

六 就職を祝ふ

久しう御たよりを承りませぬだけに、どうして御くらしなさることかと、一入なつかしく思ひながら、何かに取りまされ

御尋ねも致さず失禮して居ります。本日何子さまの御話で御座いました。マイビストは去る何月限りにて御やめなされ、此度は郊外の小學校へ御卒業のこと、何よりの御ことと御喜び申上げます。教師となつて一生を育英の業に奉仕したしとは、年來の御希望で、その爲め苦しい御勉學までなされ、資格を取られたことで御座いますから、此度の御就職は、いかばかり御満足に思召されることせう。失禮ながら御性格と申し、御才學といひ、教育者としての御就職は何よりも御よさはしいことと存じますから、子弟教育の上にも御献金は少なからぬことと存じます。一度御訪ねの上にて御喜びも申上げる心がまへで居りますが、取りあへず文して御祝ひ申上げます。かしこ。

七 入營を祝す

文して申上るらせ候。御許様こと、本年徴兵検査に甲種合格にて、来る何日いよく御出立遊され、目出たく御入營なされ候。由、日本男子として身を兵籍に死ね候ことは、御許様のみの御名譽には候はず、御家門の御光榮と存じまらせ候。女の私が申すまでもなく、今日より國家の干城たる重任を思はれ、折角御身御大切の上、軍務に御つとめ遊ばされ、

始終忠義をつくして、恙なう御退營なされ候やう祈上るらせ候。御出立の際には御見送り申す等ながら、前日來持病再發にて臥し居り候まゝ、失禮ながら一筆かりて御祝ひ申上るらせ候。あらしくかしこ。

八 新築を祝ふ

兼ねて御新築中の御家屋いよく御落成との御こと御目出度く存上げ候。御土地がらひろやかなる御住居、御閑静なる御こととお羨ましく存せられ候。早速拜觀がてら参上いたしたく存じ居り候へども、とりあへず御祝ひのしるしまでに、めづらしくも候はねど後の鉢一つ御目につけ候。いづこの御陣になりお置き下され度候。とりあへず御よろこびのみ。可祝

九 病氣全快を祝ふ

暫く御無沙汰をいたしました。その後御容態は如何であらつしやいませうかと心配致して居りましたが、本日御手紙を頂き御全快遊ばされたと承はり、安心いたしました。此間母校の同窓會に参りまして皆さまにお目にかゝり、あなたのお噂をしあつて心配のあまり、互ひに賑ながら御全快の一日も早かれと

祈り合つたので御座いましたが、その甲斐があつて、皆さまも喜びなされることで御座います。いづれそのうち御祝ひに参りますが、病餘は尙ほ御大切ですから、くれぐれも御加養生下さいませ。かしこ。

十 轉居を祝す

文して申上げまらせ候。これまでの御住ひは、閑静なれども交通の便およろしからずと、常々おほせられ候ひしが、此度何々へ御引越遊ばされ候。由、御地なれば交通網も四通八達にて御都合よろしく、その上山水の景勝を占め、四季の眺めも面白く、空氣も新鮮にして衛生の條件にも適ひ候へば、定めし御住心地の上きことと存じ上げまらせ候。存せぬこととて、御手傳も致さず失禮仕り候こと、幾重にも御ゆるし下され度、そのうち御伺ひ申上ぐべく候も、取敢へず手紙にて御祝ひ申上げまらせ候。かしこ。

十一 入選を祝ふ

この度御主人様には、目出たく帝展御入選のこと、今朝の新報にて拜見いたしました。

御主人様にはどんな晴れやかなお顔色で、榮ある御入選の通知をお受けとりになつたこととございませう。そしてその傍らの若妻の貴女は、私まで何やらわくわくしてしまひます。

東京にあれば、直ぐにも伺へるのですし、御主人様のお繪も展覧會で拜見出來ますのにな。

女學校の五年の時だつたでせうか。帝展見學のあと繪畫館前で解散してから、二人きりで、秋の上野公園をお話しながら、一時間あまりも歩きましたわね。みんな饒しく思ひ出されますこと。

では、どうぞ御主人様によろしくお祝ひを言上して下さいませ。あら／＼かしこ。

第二節 見舞

一 寒中見舞

本年はどういふものか、寒があきましてから却つてお寒く、軒端の水柱も一向解ける模様も御座いませんが、御一同様にはお變りは御座いませんでせうか。御座居さまの御持病も起りはおはさぬかと、御案じ申してはお噂ばかりいたして居ります。一度直々参りまして、御機嫌をお伺ひ申上げたいので御座いま

すが、大々々風を引いてはふせりますので、心ならずも御無沙汰に過して居ります。あしからず御許しの程を願ひ上げます。この品は到來したまふ、失禮ながらお目にかけます。どうか皆さま御大事になさいませ。賢。

二 餘寒見舞

御なつかしさに任せ一筆申上げ候。春とは申しながら牙えかへりきびしき御寒さ御障りも入らせられず候や。私ども皆々別條もなくすごしをり候まふ、憚りながらお心安う思召し下された候。別包の雞卵わづかに候へども田舎よりの到來物御笑納下され候は、幸と存じ候。感荷も春になりて候てより却つてたち悪しきものはやり候よし、折角御自愛のほど祈り上げ候。皆様へもよろしく。かしこ。

三 曇中見舞

この二三日、なんといふお曇りでございませう。でも、お達者揃ひのお宅の皆様、お元氣と存じます。私共も今年はずっと御遠慮し、千人針に夢中で、お蔭で暑さ知らずで過されます。一筆暑中の御機嫌伺ひまで。かしこ

四 残暑見舞

暫く御無沙汰申上げて居りました。皆様お變りなくいらせられますか。立秋もすぎましたが今年暑さがいつまでも去らないやうでございませう。伯母さまはお障りもございませぬか。私どもは暑暑の際よりも意氣地なく日々ぐづ／＼して居ります。然し日没の後はさすがに熱などに居りますと、冷たさを覚えて感はず襟をかきあはせることもございませう。御老體には、なかなか御油断のならない時候でございませう。

私共ではこの前伯父様がお分け下さいました、夕顔の苗を見事に育て上げてまして、薄曇りの中に思ひがけないほど白い花が開きますのを、この夏の中の眺めといたしました。その花の手節も終りにちかく、お庭には少々遅れましたが残暑お見舞がてら、虎屋の羊羹に静岡より到來の抹茶少々そへてお届け申します。そろ／＼あの窓下の萩も物寂びた花をつけはじめたこと、

午後暑さに凌ぎきれなくなると、いつも思ひ出します。秋には今年も主人の丹精の菊を見がてら、お二人お揃ひ泊りがけにてお越し頂きたく、皆々おまちいたしてをります。私もその頃までには元氣に立ちかへります。かしこ。

五 風水害を見舞ふ

今朝ほど何心なく新聞をひらき候ところ、御地方の風水害の模様承知いたし驚き入り申し候。××川氾濫の地域一帯の被害、家屋流失など恐しき文字ばかり相見え候が、いまだ概略の模様を報ぜられ候のみにて、少なからず不安に存せられ候。御宅は高臺のことゆゑ、水害の方は格別御被害もおあり遊ばされぬ御ことかと存じ候へども、颯風の方如何に御座候ひしや、お子様方にもし御怪我などもやと御案じ申上げ候。何事御事なく御安き遊ばされ候やう、そののみ祈り上げ候。別封の御菓子も少々ながらお小さい方々への御見舞にと御目にかけ候。かしこ。

六 颯風見舞

今朝の新聞で見てびっくりしました。あの烈風の中を御近所から出火して、一気に目抜き通りの二百戸も類焼させたこと、きつとお宅も御災難だつたでせう。どなたもお怪我はありませんでしたか。お荷物などお出しになるおひまがおありでしたか。昨秋颯風してお訪ねしたあの川沿ひの明るい御新居が

もう無いのだと思ふと、心の震へる思ひがいたします。何にせよ、この寒空では御不自由の限りでせうから、取りあへず私共の不慮を一襲ねづゝに眞綿を添へて、いそぎお送りいたしました。まづくおからだを暖かくして、町の復興に努めて下さい。とりいそぎお見舞まで。賢

七 近火見舞

啓上。只今ラヂオにて御地の大火を承知致し、大いに驚きまして即刻電報にてお見舞ひ申上げましたが、御無事でございましたでせうか。

ニユースによれば、お宅様の通りは延焼をお免れのやうに察せられますので、少しは安心致して居りますが、町の中心はのこらず焼きつくされました由にて、混雑も被害も想像以上のことと存じます。

皆様方のお驚きもいかゞ、御老母様お小さい方々に、お怪我などございませんでしたか。お知連の方々には定めし御類焼になつたお家もございましたせう。差し當り當座の御用にと、食料品取り交ぜ御見舞のお印までにお送り申します。何かお入用の品がありましたら、御遠慮なくお申掛け下さいませ。

家内の皆々よりもよろしくと申出でました。この際なればとりわけて、御身おいとひ下さるるやういのり上げます。とりいそぎお見舞まで。あらく。

八 親の病氣を見舞ふ

その後御父上さま御容態はいかゞでいらつしやいますか。毎日心にかゝつてはゐますが親しく御介抱にもまかり出ませず、たゞく御案じ申上げてをります。本年は春になりましたからのお寒さことの外おきびしく、皆々代りく少々づゝの風邪で寝込むほどのこともございせんが、はつきり致しませんものですから、良一ことも御見舞に上りたく口ぐせのやうに申しながら思ふにまかせません次第でございます。お暖はさぞお苦しことと存じます。別封御目にかきましたセリは昔から暖の薬と申しますかりんの實でつくりましたものによし、たゞのお菓子よりはいくらかましでございませうかと、こゝろみにお送り申上げます。

いづれこの月末にもなりましたら子供等の學期試験も終りますことゆゑ、ゆつくり御見舞に上りますつもりでございます。どうぞ切角御療養專一に御祈り申上げます。良一からもくれぐれ

れ御大切にと申出ました。かしこ。

九 産後の見舞

昨今は急にうつたうしい氣候になりましたが、御気分はいかゞでございませうか、お初のお産には珍しくお軽かつた由承りました。その後の御様子いかゞと御案じ申上げてをります。お乳の出はよろしうございませうか。赤ちやん、おむづかりなくおやすみになりますか。さぞく日増しにお可愛くおなりのこととでございませう。もうお七夜もお過しになつたと存じますがお名は何とおつけ遊ばしましたか。

昔からお産は後が大事と申しますから、呉々も御用心遊ばし願調に御肥立ちになりますやう。お母様もおつきになつてゐて御如才ないことと存じますが、お若い元氣にまかせて御無理など遊ばさぬやうと、婆心から申上げます。

別包御衛液は私共にて常に飲用いたし、殊の外疲れを恢復いたすやう存じますので、御産室御見舞の印までにお届け申上げます。

親しくお目にかゝり御見舞申上度く存じますけれども、今少し御恢復の上にてとわざとさしひかへ、書中を以てお見舞申

上げます。かしこ。

十 怪我の見舞

御妹様、昨日の御登山に御怪我遊ばされ候趣、お可愛さうなること成され候。俄のこととて、御手當なども定めし不行届がらにて、御傷みのことと察し上げまらせ候。

然しながら御傷にも傷つかず、御全快の御見込の由まあく御不幸中の幸と存じまらせ候。私知合の某醫師は、元元外科專科にて、随分御手當も熱練の由に候へば、御都合によりては御紹介申してもよろしく候。

十一 陣中見舞

家中で心をこめて作つたこの慰問袋をお送りいたします。中に入つた品々は私の家庭中で一人一品づゝ競争の形で、一番お役に立つ喜んで贈けるものをと、選んだのでございませう。小さい坊やも、あなたのおめにかけるのだと申して、兵隊さんと飛行機のクレオン畫を描きました。それも入れてございませう。

こんな中の何か一つでも、戦地でのお慰めになれたらと、早速局まで私が出かけて参りました。あんなな場所ではこれが銃を取る御手に届くのでせう。どうぞ御無事で御元気で、この袋をお開き下さるやう、祈つて居ります。かしこ。

十二 落第の友を見舞ふ

文して申上げまらせ候。さてとや此度のことは、まことに筆にするさへ御氣の毒さまなる御始末にて、御慰めの言葉さへなき心地いたし候。

平素なみくに勝れて御勉強遊ばされ、御不得意の學科は、何一つだにあらせられざるに、此度の御不首尾たゞく不思議に堪へずと御嘆いたし居り候。定めし御力落のことゝ存じまゐらせ候へども、過ぎ去りしことを繰返すも死見の辭を數へると同様候へば、何も御運と御あきらめ遊ばされ、今後は一層の御勉強遊ばされ、御泣言ば妹様に御預けなさるべしと呉々も念じ上げまらせ候。あなかしこ。

第三節 招待

一 歌留多會に招く

もう少し時機がおくれて、歌留多會もをかしいやうでございますが、丁度名古屋からのお客様のおもてなしの一つと存じまして、後子様をお正客に、私達で一晩賑やかに遊びたいものと存じます。

ついでには、昔は随分お上手でしたあなたも、ぜひ御客様の一人になつて頂き度く、否やなしに明晩、會社からすぐこちらへおより下さるやう、お願ひ申上ります。かしこ。

二 舞の日の晩會に招く

明晩は例年の通りお嬢様の御馳走をいたします。何にもございませぬけれども、私達がせい一ぱいの働きでおもてなしを致したいと存じますから、是非いらしつて下さいませ。

去年は牛込の方に行つておしまひになつて来て下さらなかつたから、今年はきつとでございますよ。それだからこの手紙も間違ひのないやうに速達で出します。あなかしこ。

三 小集に招く

青葉の風すがくしく候。さて来る二十三日の午後三時より、例の通り紅茶會相催したく存じ候。このたびは先頃滿

洲方面の御旅行よりお歸りなされ候。××大學教授博士もお出下され、御旅行記を承る等に相成りをり候。まゝ、御縁合せぜひ御來會下さるやう御待ち申上げ候右御案内まで。かしこ

四 新婚の夫婦を招く

その後お二方とも何かと御忙しく御過しの御ことゝ存じます。さて御いそがしきところいかゞかと存じますが、来る十二日午後一時ごろお揃ひにて、私どもまで御越し下されませうれば、まことにうれしく存じます。先日は御披露の式場にて、子供たちも新作様にお目にかゝりましたが、場所柄といひお話などいたすわけにも参らず、残念がつてをりました。子供たちは今度こそ宅においでを願ひ、新作様にお友達になつていたゞくのだなどゝ大變なさわざでございます。さぞ御迷惑な御事と存じますが、多勢の腕白どもがお招きいたすのでございませうれば、極くお氣輕なお氣持にて御たづね下さいませうやお願ひいたします。當方家族一同の他には御差支へなくば御存じの青山の叔父夫婦、上野の健助夫婦もお目にかゝらしていただきたく存じてをります。あの人たちも貞子さま御存じの通り親類な人たちではございませうが、氣立のよい親切人でございますれば、御

用なお思ひなど致させますやうなことはあるまじと存じます。では當日お目にかゝりますのを楽しみにいたしてをります。先はあらく。

五 結婚記念日に招く

その後は御無沙汰のみいたし、申譯もございませぬ。いつぞや「仲人に御無沙汰するやうなら結構」と仰有られたのを、好い氣になつたわけではございませぬけれど。

さて、お忘れになつたかも知れませんが、この十日は私共の三回の結婚記念日でございます。去年は思ひがけなく御旅行先から祝電を頂戴いたし、吃驚致しますと同時に、ほんとに嬉しく有難く存じ上げたことでした。

今年はどうぞ、私共の小さい家でのつゝまじき晩餐を召上つて戴きたく、當日はお二方の外には舅と實家の父母のみの、水入らずの小宴でございますから何卒萬障御縁合の上、五時頃からお出かけ下さいますやう、御待ち申上ります。かしこ。

六 誕生日に招く

ずるぶん 無沙汰しましたわね。不相變お元氣ですかしら。

ゆふべ母と用達しに出て、夜ふけてあの道を歸つたら、不意に、木犀のにはひがして来るではありませんか。あなた方をお送りしてよく歩いたあの思ひ出の道にですのよ。さうしたら急に、皆さんにおあひしたくなりましたの。考へるとこの春學校を出てから半年あまりになりますのね。

丁度十七日の日曜は私の誕生日ですから、久しぶりで皆さんにいらして頂いて、春から一杯たまつてゐるお話を伺ひしたいと思ひます。お招きしたのはあなたの外に例の仲よしの五人組ですの。それに従妹が二人入つてゐますけれど、どなたも皆御存じなんですからちつとも御遠慮いりません。どうぞ學生時代にかへつたおつもりで気軽にいらして下さいまし。皆で思ふ存分遊びませう。おそくも二時までにはいらして頂いて、お夕飯はのころ少々自慢の私の手料理でさし上げると決めてゐますから、お家へさういふ風にお歸りになつていらして下さい。あなたが一番お遠くにお氣の毒ですけれど、お歸りは車でお送りしますから、雨降りでもぜひいらして下さいましね。おまちしてゐます。かしこ。

七 親月に招く

申すまじく候間、夜宮よりかけ、御泊りがけにて御越し下さり度、待ちあげまらせ候。かしこ

九 親類に招く

來月の七日は私の誕生日、お約束してありますから、是非朝からお出で下さいね。それについて本日東京の前賣を問ひ合せましたら、よい席がございましたのでそれに決めました。前かから三列目の正面、その邊が一番見好い席だとのことでした。土曜の午後の部ですから、きつとお宅でもお許し下さいませね。切符二枚同封いたしました。どうぞ杏子ちゃんをお連れになつていらして下さいまし。かしこ。

十 クリスマスに招く

硝子戸に寒い音をたて、木がらしが吹いてをります。わびしい季節になりました。けれども街を歩いてクリスマス物の飾物のピカピカしたモールやお人形や、花なんか見ますと胸が躍ります。私のところでも貧弱なのですがツリーを飾りました。それで二十四日の晩にはお親しい方々に來て頂いて、何もございませんが晚餐を御一緒にし、それから一晩思ひきり楽しく遊びた

来る十六日には、午後六時から家で、月見の宴を催すまいとございませぬから、御障りがございませぬなら、御越し下さいませんか。雲井、嵯峨野の秋、さむしる等の曲を合奏してお月様の御馳走にしたいと思ひます。門前の薄も露が出て、招いて居ります。庭の萩も今を盛りと咲き亂れました。それ等を鏡のやうなお月様の光で眺めたら、どんなに美しいでせう。御馳走はお月様のお菓子の外に、月に因んだお餅を私が拵へますから、御批評が願ひたう存じます。何卒四時頃から、お越し下さい。御返事をお待ちして居ります。さよなら

八 衆體に招く

至らぬ筆にて申上げまらせ候。こゝもとの氏神様御祭禮明後日より行はれ、二日の間神輿の渡御も御座候由。山車は二十本ばかりにて、地走りなどの催しもこれあり、久しぶり封じ込められし名残、一度に賑はしうする氏子中の意氣込と見受けられ申し候。この町内よりも山車二本出で申し、かざり物など三四個所に出來るとのこと、今日あたりより青竹の手すり結ぶも見受けられ、山車小屋のしつらへに大路もにぎはひ申し候。このさま御坊様たちの御覽に入れたく、必ず鎌倉の中へは御供

いと存じます。鏡子さんも菊も菊様のお兄様も、それから江さんも、皆さんいらして下さる筈でございます。新しいレコードも二つ三つおきかせいたします。サンタクロースも何かお土産をもつて來てくれることになつて居りますから、およろしかつたらお妹さんもおつれになつて、ぜひいゝお出かけ下さいませ。どうぞ、きつとでございますよ。ではお待ちして居ります。さよなら。

十一 法事に招く

日ましにお暑く桐成り候へども、お宅様には皆様ますく御元氣に渡らせらるゝ御ことと存じ上げまらせ候。さて来る七月十二日は、亡母の三周年に相當いたし候へば、生前に御親交を願はり候方々の御出を願ひ、午後六時より宅にて心ばかりの法要を桐宮み粗飯さし上げたたく存じ候ゆゑ、御忙しきところ、かつ御遠路をまことに恐れ入り候へども、何卒々々御光來下されたく右御案内申上げまらせ候。追て暑中のことに候へば、御みなりなど御氣配にお出向き下され候やう、當方もその心組みにて時刻もおくらせ候ことなれば、何卒その邊おふくみ下され度願上げ候。かしこ。

十二 還厩に招く

一筆聞え上げ候。暑さ誠にきびしく候。をりから。皆さま御健やかにお暮し遊ばされ御祝ひ申上げまらせ候。さて明後二十一日は父の誕生日に御座候。ところ、本年は還厩に當り申し候。ゆゑ、當日夕刻より、いさゝかの御食事を差上げたくと存じ御案内申上げまらせ候。時節柄とて御迷惑の御ことゝは存じ上げ候へども、まげて御出向き下され候はゞ、この上もなき仕合せに存じ上げ候。かしこ。

第四節 贈物

一 土産物を贈る

永の旅を終へて昨日京都から歸りました。底冷えのする京都の寒さに沁みたのでございませうか、それとも忙しい旅の疲れでございませうか、何やら風邪心地にて、使ひにて御免下さいませ。かねてお好きだと伺ひました珍品の千枚漬、一箱お届け申し上げます。まづは右まで。お風邪召しませぬやうお大切に。

二 結婚の祝品を贈る

いよ／＼御婚禮のお日どりがお定りになりましたさうで、お目出たく存じます。わたくし今朝目がさめたら、すぐにお祝ひにおうかがひするつもりでしたけれど、お兄さまが明日僕と一緒に往かうと仰るので、伺ふのは明日になります。折角私の一番にお祝品を差上げようと用意しましたので、せめてその品だけ先にお届けすることにいたしました。

三 到来品を贈る

あなたが幸福にお目覚めになる今朝、枕許におかれるこの品が、どうかお氣に召しますやうに、お召物はお兄さまと私の共同圖案、幸さきよく昨日京都から持つて来てくれました。別の品は、お兄さまにお見せすると笑はれますから、御存知ないのです。わたくしの心ばかりどうかお出でになる日まで、御婚約のお方の、御寫眞をそしてその日の後は、二人お揃ひのを入れて下さいまし。可祝。

長雨もやう／＼あがりましたやうです。その後御禮におよろ

しくお過しの御ことゝ存じ上げます。

さて只今國元の親戚から、名産の二十世紀梨をたくさんに送りこしました。幸ひ取扱ひがよろしかつたと見えまして、痛んでをりませんので、新しいうちに先生に召上つて頂きたいと存じます。久しぶりに色々お話も聞えうけたまはりたく、私持参いたしましたつもりでございまして、急に嫌ない用事で他出いたしますので、とりあへず使に持たせました次第でございます。あしからず御許し願ひ上げます。かしこ。

四 新茶に添へて

拙き文にて申上げまらせ候。父こと當地へ参り候てより、老後のたのしみにと栽培いたし候茶園、この程何れの木も新芽をふき候まゝ、私どもに摘みとらせ、怪しき手つきにて製し候まゝ、一袋まらせ候。書留小包といたし候へば、この文よりも後れて届き申すべく、色香も風味も共に御口には叶ふまじく候へども、たゞ／＼茶の本場にて出来し點を御笑味願ひあげまらせ候。かしこ。

五 秋蟲を贈る

田舎の乳母の許より、土産として數多の鈴蟲を送り來り候まゝ、一籠おわけ致しまらせ候。買きとめぬ玉の散る、草むらの中にすだく秋の音を、清き御書室に養ひたまはゞ、いと風流なることに候ふべく、長き夜の御つれ／＼を慰めたまへば、蟲のみの喜びにあらじと存じまらせ候。かしこ。

六 寫眞を贈る

文して申上げます。さてこの寫眞は一週間はかり前に撮つたので御座いますが、昨日やつと出来上つて参りました。御約束通りお送りいたします。あなた笑つてはいやで御座いますよ。随分をかしい顔をしてゐるでせう。昨日出来てきました時、兄が見て吹き出してしまつたので御座いました。そして私の顔と見比べるのですもの。本當にいやになつてしまひますわ。私でもこれを見ると笑ひ出したくなるくらゐ、あなたもきつと、お笑ひになることゝ思ひます。かしこ。

七 招待券を贈る

先日は長い間お邪魔いたしました。歸ると母が私の長居に驚いて居りますのよ。

貴女のお母様もさうお思ひになつたかと思つて、急にはづかしくなりましたわ。

同封の切符は、従妹の學校の映畫會でございます。貴女もだ見ていらつしやらないと、いつか仰しやつたので、丁度その映畫でしたから差上げます。

但しこれは、どうせ従妹から押しつけられたのでございませから、お買ひ上げ願ふのではなく、失禮ながら御進呈申し上げるのでございます。當日私も参りますから、なるべくいらつして下さいませ。かしこ。

八 中元に添へて

日にましお暑くなつて参りましたが、皆さま御機嫌麗はしくいらつしやいますか、その後は絶えて御無沙汰いたし誠に申譯も御座いません。休日には是非一度お伺ひ申さうと、主人ともお噂ばかり致して居りますが、新居のこととて次々と新しい用事におはれてついで失禮致して居ります。お蔭さまで私こと幸福にその日々を送つて居りますから、どうぞ御休心下さいませやう、結好前の御言葉どほり主人も誠に優しくしてくれますのでいつも心のうちで皆様にお禮申して居ります。月末

になりましたら主人も三四日休暇もとり、展覧かたぐい郷里につれゆくと思つて居ります。それを楽しみに私も毎日一生懸命に家事に勵んで居ります。別送の品は誠にお恥しいものでございませが、御中元のおしるしまでに御笑納下さいませ。主人からもくれぐれも宜しくとのことと御座います。本来ならば是非お伺ひ致さなければならぬのでございませが、御存じのとほり日曜以外は全く私ひとりなので、留守に致すこともならず失禮とは存じながら郵送申上げました。悪しからずお許し下さいませ。いづれ郷里から歸りましたら、主人と一しよにお伺ひ申上げます。末筆ながら皆さまくれぐれも、御自愛のほど祈り上げます。かしこ。

九 歳暮の品を贈る

今年の日數も残りすくなに相成り候をりから、何かと御忙しくいらせられ候御こととお察し申上げ候。さてこの品國許名産の饅頭にて、味も國自慢の心がらにや、おいしきやうに存ぜられ候まゝ、歳暮の御笑章に進じまらせ候。よろづは春永にゆるく御伺ひ申上げべく候。かしこ。

十 餞別を贈る

勝弘さんにはいよく御出征のお知らせ、願もしき若武者の御出陣の意氣は、さこそと御祝ひ申し上げます。どうぞ勝つて御無事にと衷心から祈り上げます。

何なりと心をこめて御餞別をとお考へましたが、軍裝の御身に煩はしきお荷物となるものは御迷惑でもあり、また同じやうな品の重なるも無益のことと、いろいろ案じました末、日頃御座の勝弘さんゆゑ、いつそ御自分で、何なりと御入用の品を調べて役立て、敷けたらと、失禮ながら商品切手お届け致させました。これは品物を選ぶまごころを面倒がつたものではございません。考へてくさうさせて戴くのでございますから、勝弘さんにもどうぞ、よろしくお傳へ下さいませ。かしこ。

第五節 依頼

一 手傳を頼む

靴は少し冷えくして来ましたが、皆さまお障りなくいらつしやいますか。さて私もおかけ様で、何の異状もなく、いよく正月も近づきました。お産婆さんのお話では、来月早まか

らお産の用意をしなければならぬ様子です。御存じの通り、女中は来たばかりで、まだ家の勝手をのみこむひまがなく、私がお床についてしまつたら、さぞ不行届ばかりでまごつくだらうと気がかりになります。それで、お兄様に相談しましたら家政の實習にもなつて丁度いふから、この際あなたに来て手傳つてもらひなさいと仰有るんです。

でもあなたもお若いのですから、お産の手傳ひなどおいやでせうと思ひますが、お願ひ出来ませうかしら？

尤もお産の手傳ひとはいつても、何もあなたにその方の事を頼むするのではありませんの。看護婦は別に頼みますから、あなたにお料理だの、お兄様のお身の廻りの世話だの、お客の應對だの、女中を監督しながらそんなことをして頂きたいのですわ。

お母様にお話して御承諾を願ひ、その上でどうぞいらして下さるやう御ねがひします。それでは御返事をおまちして居ります。かしこ。

二 女中の世話を頼む

平素御無沙汰ばかりしてゐてお願ひことだけは遠慮なく、一寸

氣恥かしいやうに存じましたが、例のこととお許し下さるものと、自分きめいたし、早速ながら申し上げます。今度女中が國許で縁があつたとかで、両親からお暇をと申して來ました。當人は私のお産のあることも知つて居ますから、大變に氣の毒がつて、式の前日まで置いて頂くなどと申してくれませんが、早く代りを入れて償らしてもらつてと思ひますので、至急一人お世話願ひたいのでございます。年は十七位から二十頃まで、丈夫で素直な人であれば外になんの注文もございません。お給金は何圓くらゐ、盆暮には雇分の心づけを致します。その外私共の何もかもよく御存じのあなた様ありのまゝ、先方にお話下さいませ。あなた様のお目鏡に叶つた人なら、お目見えなどの手数をばぶき、直ぐにお取りきめ下さいまして、一寸も早くおよこし頂きたいと存じます。

私は不思議にも女中運がよいので、今度もきつとよい人が來てくれるものと信じて楽しみにして居ります。どうか何分にもお願ひ申し上げます。かしこ。

三 留守を頼む

文して申上げ候。いつも乍ら俄の思立ちにて御都合如何なるらんかと存じ候へども、主人こと先程より脚氣の氣味にて惱み居り候ところ、先頃中修善寺へ参られ候主人御友達の許より、頻りに閑靜なる同地へ轉地いたされてはと仰せ越され候まゝ、當人も漸くその氣になり、急に候へども明朝五時の東京驛發にて、私共々にて出立のことゝ相定まり申し候。就ては留守の程、女中どものみにては餘りに心許なく候へば、伯母様を一週間ばかり拜借願はれ間敷候や。御宅様にては御忙がしく入らせられ候折ふし、誠に忍入り候へども、毎度の御親切様に甘へ参らせて、このこと如何にやと、先は御ねがひまでかしこ。

四 保證を頼む

皆さまお變りもなくいらせられますことゝ、存じ上げます。さて、この四月より妹の延子が、日本女子大學の家政科に入学のため十日には上京入舎の運びとなりましたが、どなたか一人、東京で保證人といふことなので、伯父さまにお願ひ申上げたいと存じますが、如何でございませうか。

甚だ手前勝手のことながら、御承諾いたしけるものと存じ、九日には私が連れて上京参上いたすつもりで居ります。どう

ぞよろしくお願ひ申します。

なほ、お目もじの折に萬々申上げます。とりあへず一筆。

五 見習奉公の周旋を頼む

寒いくと思つて居りますうちに、彼岸櫻も咲き初めたやうでございます。皆様お變りございませんか。さて今日はお願ひがあるのでございます。御存じの信子こと今年は十八に相成り實科高女を出ましてから、只今家に居りますが、何分田舎のことゆゑ言葉遣ひも行儀作法も辨へぬものですから、年寄が心配を致しまして、行儀作見習にとやかましく申され、當人もその氣になりましたので、此の際どこか適當のところがございますいたら、お世話願ひたいと存じます。

お顔も廣くいらつしやるし、いつも御親切に仰有つて下さいますまゝ、勝手なお願ひ申し上げます。別便にて當地の名物もろみ漬一樽お送り申し上げます。御笑味下さいまし。かしこ。

六 看護婦の周旋を乞ふ

文して急ぎお願ひ申上げまらせ候。本年十歳になる末の弟こと去る十五日俄に發熱いたし、ついで多量の出血有之候

まゝ、驚きて最寄の醫師に來診を求め候ところ、此邊にてはついぞ聞きなれぬウイルス病とかにて、病勢は餘程激しいとのこと、只今のところ病床に仰臥したるまゝにて動くことすら得ず、氷嚢にて脇や胸を冷やさねば、危険との醫師の注意に御座候。就ては然るべき看護婦を相尋ね候へども、割合長期にわたることゝ成るべく正直懇切なる者がよろしからんとのこと、不測御妹様御病氣の節、御願ひなされ候方を思ひ起し候若しあなた様御存じの方に候はゞ、他を斷つても當方へ來て下さるやう御口添へいたゞき度、まことに勝手なことのみ申上げて、何とも相済まぬことながら、よろしくお願ひ申上げまらせ候。かしこ。

七 買物を頼む

二三日前お母さまにお目に懸つて御様子お聞き致しましたがその節東京であなたに見立てゝおもらひになつたと言つて、好い柄のおひとへ着ていらつしやいました。お見立てほんとうに御上手ね。それで御願ひするわけではありませんけれど、買物少しなすつていたゞけませんかしら。べつに急ぐものでもありませんから、夏やすみに御歸省になる時で結構です。

品物はフランス刺繍の材料一切ですの。そして虫のいゝ考へ
 かも知れませんが、お休みの間にあなたに教へて頂かうといふ
 計寛なの。私毎日御宅へ通つて、あの落葉松の緑蔭で教へて頂
 くことにすつかり決めてをるんですもの。それにも一つ、メリ
 ナスとガーターの手編器をお願ひしたいんですけれど、面倒だ
 なんておつしやらないで、どうぞお願ひ致します。
 御返事も伺はないで勝手ですけれど、こゝへ爲替をお入れし
 ておきました。どうぞ御自分のよお積りで萬事よろしきやう御
 運び下さいませ。賢。

八 婿の周旋を乞ふ

文して聞え上げ候。先日主人より一寸申上げ候とほり、
 一つの心配去れば又一つにて、此度は何子の婿養子のことにて
 彼此心を痛め居り候。この儀相済み候上はいよく隠居い
 たして宜しく、後は後の事として、相當の人物御心づき候は
 ば御知らせ下され度願上げまらせ候。分家の上は當人達の
 望みによりて、何なりと商業いたさせ申すべき決心に御座候。
 常々御交際廣くあらせらるゝ御内様ゆゑ御良縁おはすべしとの
 考へより、斯くは御願申上げまらせ候。精しうは御目もじ

の上にて。かしこ。

九 貸家の周旋を頼む

いつも御無沙汰のみにて、申譯もございません。
 さて突然ながら、此の度兄が御地の一中學に卒業いたすこと
 になりました。一人で赴任のつもりで居りましたところ御地は
 亡き父に縁故の地でもございますので、いつそ家内中と母が
 申すのでございます。家内中と申しましたも三人きりの身輕さ
 ですが、もしそちらに三十圓くらゐで適當な貸家がありましたら、
 四月早々の兄の赴任に伴つてまゐりたいと思ひます。お探
 していただくでございませうか。まことに蟲のよいお願ひ
 ですが、どうぞお力をお貸し下さいますやう、ぜひお願ひ
 申上げます。かしこ。

十 書物の借用を乞ふ

いつぞや御目もじの節、御書架のうちに數多く飾られし書物
 のうち、一段と妾の目を惹きしは勿忘草とか申す表装の美はし
 き一冊にて候ひしまゝ、一二頁見まらせ候ところ、たま
 らなく面白く覺え、御あきに任せ拜借のこと御願申上げ置き候

が、御都合の程如何に御座候や、催促がましくて誠に恐入り
 候へどもこの頃御あきに候はゞ、秋の夜長のつれづれに拜見
 いたしたく、失禮ながら御願申上げまらせ候。かしこ

十一 返金の延期を乞ふ

昨年末は厚かましい申出を御快諾下さいまして、拜借致しま
 した金子、その節この六月にはお返し致しますお約束でござい
 ましたが、どう遺縁を致しましてもお返しすることが出来兼ね
 ますので、何んとお詫びしてよろしいやら、唯々御寛大なお心
 にお頼りして、お許しを願ふより外ございませぬ。

あの急場をお助け下さいました御厚意を考へますと、こんな
 ことは申し上げられた義理でないことは、萬々承知致して居り
 ますが、何分にもこの五月に主人が思はぬ大病を致しまして、
 その入院費用に會社からこの六月の賞與の一部を前借致しまし
 たところ、近頃の諸材料高や何やら彼やらで、會社の方が餘り
 成績がよくなく、そのため賞與が案外に少なくて、ほんとに困り
 切つてしまつたやうな次第でございます。

右のやうな事情でございしますので、勝手な上に勝手なことを
 お願ひ致しまして何んとも恐縮ではございすが、十二月の賞

與まで御禮遣願へれば、何んとか都合をつけましてお返しする
 決心をして居ります。主人からもお詫びする筈でございすが
 まだお目にかゝつてゐませんので、私からよくお詫びしてお
 願ひするやう申して居ります。
 何卒事情御察し下さいまして、勝手な申出をおきゝ入れ下さ
 いますやうお願ひいたします。かしこ

第六節 謝 禮

一 借物を返すお禮

先日はお大切のお品拜借いたしましたして、まことに有りがたう
 存じました。とりそろへ只今使ひにもたせてお返し申上げます
 から、お改めの上御受取り下さいませ。
 おかげ様にて、はじめての佛事を滞りなくはこぶことが出
 来まして、安堵いたしました。何分歸來早々のことではござい
 ますし、これまで萬事手輕な旅の上の暮しにて、この地の流を
 わきまへませず、折目正しい目上の方々をお迎へいたすには、
 調度などの用意もちませんこととて、いかやうにしたものか
 と戸惑ひいたしました。いろ／＼お心づけの上、お大切の品

々まで御用立頂き、無事に相すませました。厚く御禮申上げます。

紙包みの品は到来ものにて失禮でございますが、少しばかり御覽に入れます。どうぞ御笑味下さいませ。

いづれ一兩日後、逗留客も引取りました上にて参上いろく申述べたくと存じをりますが、とりあへず書中を以て御禮のみ申し上げます。

末筆ながら御主人さまへも、この御禮よろしくお傳へ下さいますやう御願ひ申上げます。先は右まで。かしこ。

二 招待を受けし禮

昨夜の輝くばかり美しき、お仕合せなあなたのお姿、今もまだ眼に浮び居り候。

また背の君の若々しく御眉の凛々しき顔もしさ。無骨に見え給ふ御口許に時折の笑みのさわやかさ。貴女の清純な堅實な御結婚生活の道、目のあたり見る心地いたし、心より貴女の御幸福をお祝ひ申上げ候。

まづは右御禮やら、今更にお慶びの思ひやら申上げたたく、かしこ。

三 友達からの贈物を謝す

昨日は遠方までわざわざの御使にてまことにおそれいり候。かすくの頂き物、ことに重寶なる品、思召いりのこと、厚く御禮申上げ候。唯今のおびずまひには勿體なう存じ候。御見たての御衿、其他のうつくしきもの、いかばかりこの夏のたのしみと、何もなにもあつう喜びきこえ上げ候。時候よき頃になり候は、御稽古の御歸りを御より遊ばしていただきたく候。まづは御禮まで。かしこ。

四 餞別を受けし禮

長男忠雄こと、此の度出征軍人の榮譽を荷ひ、お國のお役に立つ者と相成り候につきては、早速お心をこめし御祝詞、御歸ましのお言葉とともに、御家寶の兼光の名刀一振御贈りいただき、當人の喜びは申しやうもなく、この太刀とりて戰場に必ず高き勳しをと、今より勇みをり候。熱きお心づくしのほどたゞく有難く、厚く御禮申上げ候。かゝる皆様の御厚志に感きされつゝ、我子をいくさの場に送る母の心も強く相成り申し候。手柄して皆様のお心に報いよと、雄々しく子を見送り候。

申すべく候。

まづは取り敢へず、忝き御贈物への御禮申上げたたく。

あらくかしこ

五 人にもものを頼みし禮

先日は御迷惑なことお願ひいたしましたして、その上私はよんどころないことで、そのまゝ郷里の方へまゐり、昨夜歸りますと留守に御手紙をいたゞいてをりました。早速御承りたまはり、まことに嬉しうございました。厚く御禮申上げます。延引ながら御禮のみ。かしこ

六 時候見舞の禮

御手紙ありがたく拜し上げ候。御不快にて候ひしよし、その後いかゞ渡らせられ候や、存じ上げぬことゝて御見舞も申上げず、かへつて御手紙いたゞき恐れ入り候。こなたも冬の色さむげに相成り、木枯に惜しげもなる木の葉ちりゆき候。さま心細う眺めやられ候。

時候がらあなた様も御加養專一に願ひ上げ候。とりあへず御禮かたぐ御うかゞひまで。かしこ

七 旅行中世話になつた禮

一筆しめし参らせ候。その後皆様には御奨りもあらせられぬ由にて、何よりも慶ばしきことゝ存じまゐらせ候。さて伴某こと御地逗留中は、何かと一方ならぬ御心添へに預り、御厚情の程は御禮の申上げやうもこれなく、家内一同感謝いたし居り候。當人はいろく、と、樂しかりしお話など致し、今より來年の夏が待たれるなど、大喜びに御座候。その中御暇の節には、あなた様にも御遊びにお越し下され度、先は御禮までに。かしこ

八 病氣見舞の禮

昨日はお忙しい中を、わざわざ和子のお見舞にお越し下さいまして有難う存じます。昨日は熱もあまり上りませず、元氣にて夜まで話を皆に聞かして居りました、ほんたうに有難う存じます。治つたら、お話の仔猫をいたゞくのだと、楽しみに早くなほりたがつてゐるやうでございます。まづはうれしくて御禮まで。かしこ。

九 滞在中の禮

昨夜の九時に歸つて來ました。今日一日中、遊び疲れた體を寢床に伸ばして、晩まで寢てしまつて、今漸く起きて湯に入つて御飯をたべて、打水をした庭に面した机の前にべつたり坐つたところす。

本當に此年の夏は面白かつた。夏休みといふものも、これでも十度ばかりしたわけですが、こんなに愉快に過した夏休みは生れて始めてすわ。三十日といふ日が、こんなに早くたつものかと不思議に思ひます。

まあ、お前、家を忘れてしまつたのぢやないかと、歸つた私の顔を見て母があきれてゐました。本當に家を忘れてしまつてゐたのですわ。

毎日、この生活が、ほんたうに解き放たれた、自由な明るい別世界であつたのですが、あの雷雨になつた日の川遊び、賢一様のお歸りになつた日のボートの島めぐり、月の美しかつた夜の演奏會などが、特別に強い思ひ出になつて、微笑をもつて腕にうき出て來ます。

ほんとに面白かつた、嬉しかつた。皆さんの御心切が忘れられ

れない。皆さんお一人お一人にお禮を申して下さいね。では、この度は學校でお會ひします。さよなら。

十 應援の勞を謝す

一筆示し上げ候。昨夜の會には御忙しきところを、御手傳として御女中某様を御差し向け下され、寢に添く厚く御禮申上げまらせ候。御蔭様にて何程の失態もなく、萬事都合よく相運び、家内一同喜び居り候。此半襟有り合せの品ながら御取次願はしく、柄は少し派手かと存じ候へども御勘辨下さるやう御傳へ賜はりたく、先は取敢ず手紙にて御禮申上げまらせ候。かしこ

十一 恩師への禮

在校中は一方ならぬ御恩になりました。ことに寄宿舎にて五年の長い間、肉親も及ばぬお世話にあづかりましたこと、御禮の申上げやうもございません。學校を離れ寄宿舎にわかれ、先生をはなれて、急に身のよりどころを失つたやうに心細うございます。郷里の家では、みんな私を勿體ないほど歓迎して呉れるの

でございます。でもそれだけに祖母も母も、きつと一人前の女のひとのやうに期待してゐてくれますことと存じ、何か心配なのでございます。

でも「御元氣を出して」といつも仰有る先生のお言葉を胸にくり返して、必ずやつてまゐるつもりでございます。

先生いつもお丈夫でお元氣でいらしつて下さいますやう、遠にお祈り申し上げます。かしこ

一二 舊主人への禮

その後皆々さま御變りもなくお過しでいらつしやいませうか梅雨も近づき、奥様が御元氣に先に立つて、御指圖を遊ばしていらつしやいます御様子をお慰び申上げておなつかしく、存じ上げて居ります。

郷里に歸りましたからは家事一切、私が引受けましたので大變喜ばれて居ります。これも皆奥様の御導きの御蔭でございます。ことに無駄費をせぬやうにとの御諭しにより、お給金を積立て、頂きましたことは、今度の結婚の支度に目に見えて役立ちますので、父母が何よりも有難いことと喜んで居ります。歸りました翌日結納をすませましたが、式は秋の取入れがす

んでからのことでございます。母から委しく聞きましたのでは先方は小作農ですがトラックを運轉することが出来るので、村の産業組合の工場に働かに行き、百姓は主に私にして欲しいと申して居るさうでございます。幸ひ二人とも頭丈でございますから、力を協せて働かると今から心に勇んでをります。けれども何と申しましてもすべてがこれからの、私共の生活でございます。日頃の皆様の御諭しを心にしめて願ひはいたしますが、どうぞこの後も何かとお導き下さいますやう御願ひ申し上げます。あら、かしこ

十三 見送りを謝す

先夜はお事多い折をわざわざ御見送りいただきまして恐れ入りました。お寒い時ではございましたし御遠路を御心配いたさきませんやうにと、わざと時間もはつきりとは申上げずにをりましたのに、御親切のほどありがたく御禮申上げます。その節は遠しうお別れ申上げ、重ね々本意ないことに存じました。おかげさまで途中元氣に二日後當地着、たどちに表記の通りの寓居に落つきました。まだ一向家の中の整理もつきませず、従つて新しい土地の様子もわからずにをりますが、そのうちい

ろく見聞いたしましたして御便り申上げたく存じてをります。まづは御禮のみ、未筆ながら御主人様へよろしく御申上願ひあげます。かしこ。

第七節 問合(照會)

一 花の見頃を問合す

文してまるせら候。この頃の快晴に暖氣も日増に加はり、庭の紅梅もそろ／＼と散りそめ候へば、宅にのみ閉ぢこもり居るはいとも懶く覺え候。折柄、本日の新聞によれば、上野の彼岸櫻三四分に咲き出で候とのこと、そよ／＼に心も浮立ち申し候。就ては弟どもの望みもあり、散りもせず、咲きも残らぬ好時節に逢ひたしと存じ居り候。飛鳥荒川堤あたりの眞盛りは、いつ頃と相成り候や、御手数まことに恐入り候へども、一筆おしらせ下されたくお心安きに任せ、右御願ひ申上げまゐらせ候。賢

二 訪問について先方の都合を問合す

昨夜は會の方へ御出席がございませんでしたので、お目にかゝれず失望いたしました。その節みや子機に、皆様でさし上げ

るお祝ひものゝ、御相談がちよつとありました。御りませんでした。それにつき兩三日うちに、ぜひお伺ひいたしたいと存じます。明後日か明後々日のうちに、お差支へはございますまいか。御都合をうかゞはせていただきたくございませす。かしこ

三 ビクニツクにつき打合す

昨日はお妹さまのお使ひで、いろ／＼と有がたう存じました。私ちやうど出かけるところでして、大變失禮いたしました。あれから松田さまの御宅に伺ひましたところ、俄かに運子行のお話しがきまりましたこの入日の午前八時四十五分の東京驛發の汽車で参ることになりました。御機嫌は御めい／＼お持ち下さるようにといふこととございませす。當日は是非お天氣であつてほしいものと存じます。涼しい海の風に吹かれながら、お話しするのを楽しんでをります。入時半までに必らずプラットホームに集ることと致しませう。取急ぎおしらせまで。かしこ

四 送別會の日取を問合す

暫く御目にかゝる折もなくてをりましたところ、此間山本さんから、今度あなたがヨーロッパの方に御旅行なさいませすよと

伺ひました。かねて御望みのこと何よりの御こととおめでたくおうらやましく存じます。ついでに御出立の日も近々になりま

したことに存じますから、一層御忙しいとは存じますが、昔の同窓のもの達でお別れのしるしを致したいと存じます。何卒その心持をお受け下さいますやう、御招き申上げます。

さてその日取はいつがよろしいか、御都合をお伺ひ致したいと存じます。いろ／＼お差支への多いこととは存じますが、どうぞ私どもの失望いたしませんやうな御返事を頂き度く、お待ち申してをります。どうぞお考へ下さいませ。かしこ。

五 縁談について問合す

拙なき文にて申上げまゐらせ候。さて事ある時の外は、いつも／＼勝手なる御無沙汰にて、何とも申譯これなく候。さて兼々御耳に入れ置き候。伴一郎との縁談、この程どうやら話もまとまりげに相成り、御縁女の方は、何様御次女と未だ確かには候はねど、略きまり申し候。承れば御宅のお嬢様とは一つ學校にておはす由、就ては誠にしつたる話に候へども學校の成績一般性行の模様など御つゝみなき處を御漏し下され間敷候や、實は参上の上にてお願ひ致すべきに候へども、何

やら角やら取紛れ候際とて、失禮ながら文して御尋ね申上げまゐらせ候。賢

六 荷物不着につき問合す

御心にかけれ三寶柑お送り下さいました由、九日にお手紙頂戴いたし、みんな大好きなこととて、首を長くして待つて居りますうち、もう十日も経ちますのにまだ着かないので兄が毎日學校から歸りますと「まだ来ないの、腐つちまふよ」とか「途中でどうかしちやつたんだよ」とか、騒ぐのでございませす。母も折角お心盡しのものゆゑ、一度お問ひ合せ申上げたたらと申しますので、失禮でございませすけれどお伺ひ申上げます。以上。

七 荷物の着否を問合す

先日御依頼の浴衣地十反、一週間前に小包二個にわけてお送り申上げましたが、お手元にとどきましたでせうか。いつの間にかすつかり夏になりました、湯上りに、紺の香りの新しい浴衣をお待ちかねと存じ少しも早くお送りしようと思つたが、郵便局が近いまゝに小包に致しました。後で鐵道便の方が、矢張り早かつたかもしれなないと気がつきませす。

柄などお好みにはないものがあつてはいけないと存じまして、あらかじめ呉服屋には了解を得てございませうから何卒御遠慮なく御返し下さいませ。然しあまりおそくなりましては、季節のある品物でもございませうし、取替へさすのも如何と存じ、荷物の箱おたづねかたへ御意をお伺ひ申上げる次第でございませう。かしこ。

八 料理法につき問合せ

いつぞや娘ごと御伺ひ致し候節、御馳走に相成り候何々と申す御料理、まことに味美しく頂き候由にて、折々思ひ出してはせびられ候へども、取しながら調理法を少しも存せぬことにて言譯に困じ果て候。いかにして御調へ候ものによ、詳しく御教を受けて一度は試みたく候へば、御忙しきところを誠に恐れ入り候へども、何卒御示し下され度くれぐれも御願ひ申上げまらせ候。かしこ。

九 病状を問合せ

芳郎ちゃんこの節療道にて、毎日病院へお通ひになつていらつしやると伺ひ、驚きました。もう一月近くにもおなりになる

さうで、その後の御容態は如何でいらつしやいますの。お案じ致して居ります。

二三年前に私の友達の妹さんが、やはり療道をなさいましたが、漢法醫におかゝりになつて全快なすつたとのことを聞いて居ります。もし何でございしたら、早速問合せ、確かなところお知らせ申上げてよろしう御座います。

尙この梨は越後から送つてまゐりましたもの、あまりおいしくもございませぬが、今頃お珍しいのを取得にほんの二つ三つお目にかけてます。どうぞ芳郎ちゃんお大事に。かしこ。

第八節 通知

一 嫁ぐことを友に知らす

和子様。私たうとう嫁ぐことになりました。一度は年が若すぎるからと言つて断つたのですが、叔母達が入釜しく言つて仕様がなのです。私はもう、あてもない暗い道に、引ずり込まれるやうな気がしてなりません。恐ろしいやうな、又さうでもないやうな。

止めにしやうか知らんと幾度か考へましたけれど、この私に何でそのやうなことが。つい思ひ切つてきめてしまひました。

昨日行季の中から、肩の上のある著物を見出しまして、何だか非常になつかしい氣持になりました。そして此の著物で、もう一度あのおハネの唄が、繰り返して見たかつたのでした。

ではさよなら。

二 出産の通知

先日は御遠方の處を折角お出で頂きましたのに、何のおかまひも申上げず失禮致しました。お土産に頂きました品は大變結構でございましたので、弟達は大喜び、夏休みに海水浴に伺はせて頂く時のたのしみが殖えたなど申して居ります。厚く御禮申上げます。さてその節もいろく御心につけて、御案じ下さいました姉のところへ、今朝が女の子が生まれました。初めてのお産にしては大それて、幸だつたとか、鼻すぢの通つたい子だとか、母は大さわざ致して居ります。私もお蔭さまで漸く叔母になれたわけでございます。たゞ珍らしいばかりでまだ可愛がることは出来ませんけれど、嬉しいことは人一倍嬉しうございませう。姉も元氣で居りますからどうか御心安う思召し下さいませ。母は姉の方へ參つて居りますので、とりあへず私から御知らせ申上げます。かしこ。

三 入學の通知

先日より梅子の入學試験のこと、お心におかけ下さいますてありがたう存じました。今日發表がございましたが、お蔭様で入學が出来ました。先日の學科試験では入學の中にはいつては居りましたもの、一昨日の口頭試験の結果が氣つかはれてなりませんでした。今日の發表で漸く安心いたしました。準備中は一と通りならぬ御心配をおかけ申し、いろく細々と御注意をいたゞきありがたう存じました。入學の叶ひましたのも、全くおかげ様とあつく御禮を申上げます。近日参上いたしたいと存じますが、始終おこゝろにおかけ下さいましたあなた様には、第一にお知らせ申したく、取りあへず一筆とりいそぎまして。さよなら。

四 卒業の通知

伯母様、御元氣でいらつしやいますか。木の芽だちの頃は例年御加減がおわるいが、今年は何でいらつしやいますか、御案じ申してをります。

さて、およろこび下さいませ。操はおかげ様で卒業いたしました

した。式の當日はまた總代で答辭を述べることになり、日頃先生方から御うけした御恩の御禮も申すことが出来ましたが、友達同志の親しいものといよく別れて、今日から社會へ出て行くのだなどといふやうなことを申述べてをりますと、自然に涙さへ出て、卒業式の喜びの悲しみといふやうなことをしみる味はひきました。

職業婦人としての教育をうけて世に出てゆく私どもへ、校長先生を初め諸先生の御恩は決して忘れることは出来ません。私共の歩み方一つで、この學校の價値も信用も高まるのだと考へますと、いよく責任を感じます。

この頃になつて急に、すべてのものが事新しく見られます。社會の一年生になつたからでございませう。伯母様！ どうぞ今までも増して、此一年生をお教へ下さいませ。まづはお知らせをかね御禮まで。かしこ。

五 就職をしらす

文してまゐらせ候。私こと就職については、一方ならぬ御心遣ひに預り、有り難く嚴重にも御禮申上げまゐらせ候。就ては一日御紹介状を頂きし某様を、昨日會社にお訪ね申上

げ候ところ、同社のダイビストに一人缺員ある由にて、何角と御話し有之、その場は採否何れとも仰せられずお暇乞ひ申し候ひしが、只今採用する旨御通知を頂き候。實際私にとりては願つてもなき適當の務めに於てもなく喜ばしく、これも皆御許御配慮の御恩と感謝いたし居り候。明後日より出勤すべきやう申し越され候へば、その心にて用意を整へ、明晩にても一度御伺ひ申上げ、萬々お話し申し上げまゐらすべく候へども、取敢ず右御しらせまで。あなかしこ。

六 歸宅をしらす

兩三日と思ひし京阪の旅も、案外長逗留と相成り申し、昨夜やうやく歸宅いたし候。留守中は萬事にかけて御世話下され御禮にて心安う旅行いたし、有り難く御禮申上げまゐらせ候。別包は粗末ながら何子様へのお土産にと、西陣の帯地に御座候へば、何卒御締め下され度候。一兩日中には御伺ひ申上げよろづ聞え上ぐべく候へども、取敢ず御報かたぐ御禮まで。あら／＼かしこ。

七 安着をしらす

劇場を設け、いつもの年ならば判官には村長、師直には權助の役割なるに、本年は東京より何々一座の俳優を雇ひて一芝居打たんと計置にて、誰も彼も狂氣のやうに喜び居り申し候。田舎廻りの呉服屋の樂隊編入れての賣込みに、娘たちは懇請り親共は首を横に振る光景も可笑しく、されど洋服屋は流石に參らず候。電車の便かれば、一時間足らずに候へば、御妹様たち御同道にて御散歩かた／＼是非お越し下されたく、樂隊は明後日より始まり申し候。かしこ。

九 編物の仕上りを知らす

着て御依頼になつた編物、意外に後れまして済みません。今朝やうやく出来上りました。輪郭を背でとの仰せで御座いました。彩色の配合上、背ではどうも面白くないので、勝手ながら白に致しました。若し御覧の上で御氣に召さぬやうなら、どのやうにも編み直しますから、御遠慮なく仰付け下さい。赤が少々残りましたので、光ちゃんの手袋を拵へて置きました。持つて上りたいので御座います。折あしく留守番がありましたので、誠に申せませんが、御女中さんでも一寸御道はし下さいませ。かしこ。

八 豊況を知らす

出逢の折には御忙しきところわざ／＼お見送り難き、主人ともく恐縮致し居り候。ことに奥様からは、幼い子供供づれの私へ、こま／＼とお心づかひ賜り、うれしく有難く、涙ぐむばかりに御名刺をしみつゝ参り候。お蔭さまにて昨日無事當地に到着いたし候。二三日は旅館住ひにて候も、やがて住み移る等の家には前任の方お召使ひのボーイ待ち居り候由、當地の社宅の方々も、皆さま御親切にお世話下され、折角人生修業など少し切なき心地にて張り詰めまゐり候。氣持も長閑にゆるむばかりにて御座候ゆゑ、何卒御安心下されたくいづれ着着きしだい、こま／＼とお便り申し上ぐべく、皆々さま御身御大切にと遙かに祈り上げ候。かしこ。

拙なき文して申上げまゐらせ候。本年は氣候順調なる上に豊年の害も少なかりしこととて、何處もかしこも、おしなべて十年ぶりの豊年、千町小田には黄金の波をみなきらせ、村人は錦着たる心地にて、何れの家にも喜びの聲に充たされぬは無之候。豊年を祝ふ秋祭りも近づき候こととて、鎮守の宮には青の襦袢の旗などとり／＼に秋晴の空に翻り、早稲刈りし跡には假の

十 品物到着の通知

只今はどうも有難うございました。あゝして驚ひなほして歎くと立派にちやんと又贈られます。もう古過ぎるかと思つたんですけど、あまり好きな柄なので、着物の方だけでも出来るかしらとお願ひしたら、ちやんと羽織も出来てしまつてどんなにか御丹念に縫いで下さつたかと考へると勿體なくて、急に泣きさうになつてしまひました。お母さんにそんな事おさせして申しわけありませんわ。きつと幾晩も遅くまで起きて、下すつたんですわね。どうもくゝありがたうございました。いつまでもお元氣でね。みんなによろしく、さよなら。

十一 轉居の通知

致して申上げまらせ候。此度主人こと、會社の都合にて東北の支店へ轉任と相成り、單獨にて赴任いたし候。については、不在中私と母と弟の三人暮しに、要もなき手廣の住居いかゞかと思はれ、下記のところへ轉居いたし候。只今のところは名實ともに見る影もなき茅屋に候へども、周囲には島なども、少々はこれあり、空氣も宜しく閑靜にして、呑氣なる朝夕

を繰り返し居り候。その上御許様の近くとなりしこと何よりも頼母しく、私方よりは、折々は御邪魔に参らん心積りに候へば、御許さまにも御通りかゝりの節は、是非に御立寄り下されたく、取敢ず右御報まで。かしこ。

十二 病氣の通知

一筆示しまらせ候。さてとや父上様こと、此程中より兎角すくれ給はず、御なやみ勝ちに入らせられ候ところ、本月上旬より御就床遊ばされ、面白からぬ御容態なれば、早速兩名の醫師に相見せ候ひしに、見立ては何れも心臓病なる由に御座候。何分御年を取られ候上、常々深く御嗜好遊ばされし酒も原因とかにて、今更陸方もなき有様候。今がむつかしいとの事には無之、御氣分などは至つてお確かにあらせられ候へど、人の命の程は、いつがいつとも計り難く候へば、この由を以て舎監の先生にもお願ひなされ、此程すこさず一度御歸省ある間敷や、兄どもは今よりその様に騒ぐななどと申し候へども、母は老ひの氣せはしく、何分にも心もとなくて一筆進しまらせ候。

前々より其許様の耳に入れ置かざりしは、左程の御病症とも

存せず、又一つには、勉強中の者に要なき心配させんも心うしと、わざと差しひかへ候。急とは申さず候へども、成るべく近くに御降り下さるべく、先は右御しらせまで。

あら／＼かしこ。

十三 病氣の全快を知らす

母こと病中は、永々の間、毎日のやうに御見舞下され、御親切の段厚く御禮申上げまらせ候。一時は危篤に陥りし病氣も、皆様の厚き御親切のお蔭にて、その後次第に快方に向ひこの程やうやく床に上いたし候間、何卒御心安う思召し下され度、何れ改めて御披露の筈に御座候も、平素御心配に預りしことゝて、右一寸御知らせ申上げまらせ候。かしこ。

第九節 誘引

一 花見に郷里の父を誘ふ

この二三日の雨の温かさにわづかな庭の土の色もめつきり春めいてまゐりました。

新緑にもちらほら花のたよりが見えはじめましたが、見ごろはいづれ十日ごろと存じます。御父さま、ことしこそはどうぞ

お思ひたち遊ばして、ぜひともお出かけ下さいませ。飛鳥山あたりの混雑はお氣に召しませんでせうが、九段の招魂社や、英園大使館前あたりの静かなお濱ばたの櫻は、きつと美しいとおつしやるに違ひございませぬ。まだほかに東京は廣うございませぬから、ゆつくり御滞在を願つてあらちもこちらも御案内申上げたいと存じます。私どももこの節は、やう／＼少しづつ生活の餘裕も出来てまゐりましたから、御恩がへしなど大げさなことを申上げるのではございませぬが、たまにはゆつくりお遊びにいらしつて頂きたうございます。どうぞぜひお待ち申上げてをりますから、御出立の日はおきまり次第お知らせ下さいませ。かしこ。

二 田舎のお祭に姉を誘ふ

いつかお姉さまがこの花が咲いたら、どんなに美しくからうとおつしやいました家の東門のところの櫻が、ぼつ／＼と見舞になつてまゐりました。それだけでもぜひお見せ申したいと思つてをりましたら、この十五六兩日は、天王さまのお祭でございませぬので、この邊の郷土藝術として知られてゐるさゝら踊をぜひお姉さまや小さい方たちにお目にかきたいと存じます。昔

通のお獅子はお祭の時には、必らず来て悪魔払いをしてゆくのですが、踊の方は特別に人を頼みますので、近年は家でもあまりしなかつたのですが、こんどはよい都合で上手な人が揃つてくることになりましたから、小さい人たちは殊に好評を博することとせうと思ひます。幸ひ十六日が日曜にあたりますので土曜日の午後からお泊りがけで、ぜひお出かけ下さいませ。父母からもぜひこの言づけでございます。それではお待ち申上げてをります。かしこ。

三 ビクニツクに誘ふ

打ちつとく暖かさに、春の景色いたらぬ限もなく、行きかう人々の袂も、おのづと匂ひゆかしき心地のせられ候を、御許さまには如何に過ぎさせ給へるにや、羨は今日の日曜を幸ひ、擬草しつゝ花をお宿の胡蝶の君と戯るゝを樂しみに、郊外の散歩を思立ち申し候。御許様も御一しよならば面白さも一入ならんと存じ、文して御誘ひ申上げまらせ候。必ず花かごの群を御つれ遊ばさず候てよ。かしこ。

四 遊園に誘ふ

それに就きて、母、私、妹の三個聯隊を繰り出し、早朝より援兵のため出陣のことに相定め申し候。何れ初陣のことなれば功名の程は心許なく候へば、何卒御國方よりも、御殿殿がてら、二三個聯隊ほど御加勢願はれ間敷候や、右御誘ひかたへ御願ひ申上げまらせ候。かしこ。

七 茸狩に誘ふ

昨今の秋日和いと晴々しう、家にこもり居り候はんも何となく惜しく思はれ候まゝ、明日の休暇を幸ひ、程近き天神山に茸狩催したく存じ候。春の野遊びもさることながら、晴れし秋の日の山遊も浅からぬ興これあり申すべく候。同行の者は皆々御心易き方のみに候へば、是非に御出かけ下されたく、萬一御無人にて御留守番なしとの仰せならば、宅の女中を差しかはしても宜しく候。何分の御都合御きかせたまはりたく、先は御さそひまで。かしこ。

八 観劇に誘ふ

その後引つゞきおひきこもりの御様子と承りを候が、御覧さるよほど観びまら候へば、追々と御元氣におなり遊ばさ

突然ながら文して申上げまらせ候。この夏の休暇中、避暑がてらに保養のため、何地の温泉に参り、暑さと共に市中にの汚れを洗ひ落したく、母も一しよの管に候へば、御都合により御許様にも御同道下され間敷候や、彼地へは既に親戚の者参り居りて、萬事都合に候へば、費用なども多くを要せずとのことに候。出立は明後日の豫定に御座候。是非とも御供いたしたく、御知らせかたく、右御誘ひ申上げまらせ候。かしこ。

五 納涼に誘ふ

夏の暑さ夜に入りても消えやらず、ほとく持てあまし候。昨今俄に大川の納涼思ひ立ち申し候。さしたる御差支これな候はゞ、直ぐさま此方へ御越し待ち上げまらせ候。さしつけて失禮ながら、一寸御都合御きかせ下されたく、先は御さそひまで。かしこ。

六 子供の運動會に誘ふ

文して暖え上げ候。さてとや内の陸軍大將こと、明日は學校の秋季運動會とて、只今より上を下への大運動に御座候。

れ候御ことへ存上げ候。實は私参上いたし候て、否や仰せられぬやう御誘ひ申上ぐるつもり候ところ、只今據なきお人より御來訪のおしらせこれあり、上りかね候まゝ、取急ぎ文にて申上げ候。ほかではなく候へども、今月の歌舞伎座は非常に評判よろしく候ゆゑ、伯母さまおともをしてまゐるやう、主人のいひつけに御座候。御都合を伺ひ日を定めたく存じ候ところ、よき序にて来る十六日の切符手に入り候へば、これはまことに獲りぎめに失禮ながら、ぜひ御一しよにお出かけ下されたく、先はお誘ひ申上げまらせ候。かしこ。

九 同窓會に誘ふ

いつそや日比谷の音楽會の時は失禮しました。その後、ゆつくり伺はせていただかうと思つてゐましたところ、けふ幹事さんから同窓會のお知らせを頂きました。この二十日にあるのださうで是非いらつしやいますし、ゆつくりお目にかゝつてお話ししたいと思ひますわ。お着い時ですけれど、三笠園ならお涼しいでせうし、閑靜なところですから皆さんとたのしくお話し出来るだらうと思ひま

す。久し振で先生方にもおめにかゝれるでせうし、朝鮮からお歸りになつた三井さまからも、あちらの珍しいお話も伺へることでせうとたのしんでをります。又お食後には、何時ものやうにお遊びもあるでせう。

御都合がよろしかつたら、是非御一緒にまゐりたいと存じますが、いかゞですか。お返事をお待ち致してをります。

あらゝかしこ。

十 講座の傍聴に誘ふ

とり急ぎ申上げまゐらせ候。お忙しきところいつもいろいろ申上げ、お煩しと思召され候ことゝは存じ候へども、ぜひ御誘ひ申上げたたく別紙母の講座の規則書を御覽に入れ候。時間もわりあひに都合よろしきやうに存じ候まゝ、何卒お暇お作り遊ばし、お出向きありたくおすゝめ申上げ候。一流先生方の眞面目なる御講話は、私ども母にとり随分有益なることと存じ候。申込書も御物に附随いたしをり候。何卒お考へ遊ばしお出かけ遊ばされたく候。いづれあちらにて御一緒になれることを楽しみをり候。かしこ。

第十節 お断り

一 約束を断る

一昨日は失禮いたしました。その折のお話にて、明日曜日は御一緒に梅子さまをおたづねするお約束をいたしました。今朝になりまして、急に母が熱を出し、やすんでしまひましたので、明日は伺ふことが難しくなりました。大したことはございませんので、二三日致しましたら、きつとよろしいと存じますから、又日を改めて御一緒に遊ばせて頂きたく、梅子さまの方へも只今お断りを申上げました。私だけの都合で、勝手にお約束をかへて申譯ございません。どうぞあしからず思召して下さいませ。ではいづれ。

二 借りた本を返すにつき

失禮でございますが、先達て拜借致しました御本、大それ面白く拜見致しました。早速お返し致しませうと思つてをりましたが、餘り面白いので兄に貸しましたら、何と申上げてよいか一寸筆がころんで大切の御本に汚點がついてしまひました。わ

ざゝ千代子さまからお借りになつたといふのをお願ひして、無理に拜借しておきなごすなどは、まことに合せする願ひもございませぬ。さぞお腹だちのことゝ存じますが、幾重にもお詫び致しますからどうぞお許し下さいませ。千代子さまへは私方からもお詫を差上げましたが、貴女からもどうぞよろしくお言葉ぞへ下さるやうにお願ひ申上げます。かしこ。

三 金策の依頼を断る

御こまゝの御手紙拜見いたしましたして、御事情ふかく御察し申上げます。どのやうにか御苦勞遊ばされる御ことかと、ひとごとならず存じますが、私方でも夏この方子供たちが代り病氣をいたしましたして、不時の用意にも少しづつ心掛けてをりましたものが、漸く間に合ひましたやうなわけで、たゞ今のところお話にもならぬ不如意でございます。

お頼まれ甲斐もなく、こんな御返事をさし上げますことは、私としてもまことに辛うございませぬが、ほかに融通を頼んでみるやうな先もございませぬので、據なくお断り申上げます。

切角のお申越しに何とも申譯ございませんが、あしからず思召しいたゞきたく願ひ上げます。かしこ。

四 切符の引受を断る

お久々のお文うれしく拜し上げ候。いつもいろいろと御事おほき御様子にて、お骨折さぞかしと存上げ候。御同封下され候。若葉會の切符十枚、たしかに落手致し候ところ、私こと此頃とかく健康すぐれず引こもりがちに候。ため、どなた様にお願ひ申上げることゝ叶はず、残念ながらうち二枚だけ私にたゞき残り八枚お返し申上げ候。御期待にそむき、まことに心苦しきことに候へども、力及ばずたゞ御許し願上げ候。

若葉會の御公演はいつもながらお見事なることゝ存じ、妹たち今よりたのしみ待上げをり候。その節は妹どもをよろしく願上げ候。まづは取いそぎ御返事まで。かしこ。

五 招待を断る

久しぶりのお手紙おなつかしく拜見いたしました。私達もラスメートも、今は西に東にと別れてしまひますと、お逢ひする機会もすくなく、さびしうございませぬ。一月に一度は必ずお會ひしませうなど語りあひ、お約束しながら、學校を出てしまふと、なかゝ思ふやうにそれが實行出来ないのを残念に

思ひます。殊に今日はあなたからの、折角のお誘ひの展覧會行きもお断りしなければならぬといふのは何といふことでせう。長い間のあなたの御精進がむくいられて、大作が入選なすつたんですつてね。

ほんとにおめでたうございます。お招きの日に何つて繪も拜見し、御苦心談をも承りたいのは山々ですが、折あしくその日は母の伊香保行きに、誰もし事があつて、私でも通れて参る事になつてをりますので、残念ながら参られませんが、乾度開會期間には一度参り拜見させて頂きます。どうか悪しからずかしこ。

六 加入を断る

御回章拜讀仕り候。時節柄燈火親しむべき折とて、此上もなき嬉しき御思立ち、特に御通名の方々は皆厭かず向はまはしう日頃より思ひわたり候。方々にて、よろづ望ましき御企てなるを、實はかゝる折には苦しう候。家法とかにて、先代の定め候ものの中、女は夜歩きせぬ候にて、はたと困り入り申し候。さればとて、毎日こなたへ皆様のお越しを願ひ候も身勝手、晝の會合といいたし候も、約落しの秋の日、誠に

く心残り多く候へども、此度だけは數に御下されたたく誠に寝りおしう候。かしこ。

七 來訪を断る

明後日は御來訪下さるとのお約束ゆゑ、久しぶりにお目にかゝりますのを、楽しみにして居りましたところ、二三日来ぐづぐづして居りました小さい甥が、一昨夜猫紅熱と判明し、昨日帝大小兒科の隔離室に入院致しました。

親子ちゃんがお小さいことゆゑ、もしものことがあつてはと母も申しますので、ほんたうに残念ではございますが、お約束お延ばし下さいませ。甥の發病は、わりに早く気がつきましたし、隔離の経過ださうであまり心配はないとこの事ですから、御心置下さいませ。

八 出席を断る

同窓會の御通知有難う存じました。いつもお忙しいあなたに幹事をおさせしておいて、會にもなかく出て來ないのは不都合この手紙は消滅してありますから、大丈夫でございます。かしこ。

合だとのおほせ、重々御尤でございます。

今年は植木園で園遊會のやうな總會をなさるとのこと、久しぶりで少女の頃に戻り、あの櫻の樹の下で昔様にお目にかゝれると考へますと、飛んでも参りたいやうでございますが、いかにせん丁度その頃、郷里の姑が上京いたしましたので、私は一年一度の親孝行のため大急になつてゐるものと思召し、またまた秋祭のこと悪しからずお許し下さいませ。山畑さま、木村さま、皆々様にごぞよろしう。その中お伺ひいたしますわ。さよなら

九 夫に代り就職の用意を断る

先日は久々の御入來をむかへ、御元氣なる御様子うれしく存じ上げ候。その節御依頼の件につき、只今先方よりの返書に接し候ゆゑ、取りあへず御報告申し上げ候。同會社も只今のところ業務あまり振はず候。由にて、人件費の節約など消極策をとりをり候。ため、こゝしばらくは欠員の補充は見合せ候。このことに御座候。折角有爲の御方のお申込みを無にいたすは遺憾ながら、何分とも事情右の通りに候ゆゑ御諒承願はしくとのこと、誠に不首尾なることにて申譯これなく候へども、あ

りのまゝ御返事申し上げ候。なほ他に心懸おき候て、他に御志望に添ふべき御仕事これあり候節は、及ばずながら御奮力申上げた候へども、取あへずお断り申上げ候。右まことに失禮ながら、主人こと社務多煩のため、私代りて申上げ候。かしこ。

十 寄附金を断る

お手紙只今拜見いたしました。ほんたうにお久しぶりでお懐しう存じます。昔とちつともお變りなき御様子お察し申上げお慶ましく存じました。同窓會の御懐懐お一人々々のお姿お慶まですが、お手紙の上に手にとるやうにて、拜見致しながら氣持は遠く昔にかへりました。それに御同封の別紙も有難く、御趣旨のほどもよく拜承致しました。

出來れば是非お仲間に入れて戴きたいので御座います。私の方では實に運わるく、主人の勤めました會社が潰れ、只今やつと再度の勤め口は探しは致しましたものゝ、漸く二人の口を糊するだけの収入にて、誠に心細き限りのところへ、私こと主人失業中に他家の裁縫など徹夜して無理致せしたため、少し體を痛め薬餌の代にもこと缺くありさま、折角お勤めのこと本

意なくお断り申上げねばならぬ幸さどうぞお察し下さいませ。
御発起の皆さまへも、どうぞあなたからよろしく御ゆるしお願ひ下さいますやう、まことに起き臥し半ばで筆も亂れ、失禮でございますが取り敢へず御返事のみ申上げました。かしこ。

十一 不在のお詫び

昨日は折角おいで下さいましたのに、折あしく留守にしまして申しわけ御座いません。私が夜家を明けることなど、ほんとは無いのでございますけれど、昨夜は珍しく主人が映畫を見にゆかうなど申しますので、つい誘はれるまゝに出かけ、歸つてくると留守に、あなたがおいで下さつたことを妻やからきかされがつかりいたしました。

どうぞ一度のことで懲り／＼したなどおつしやらず、この次の土曜日に又いらしつて下さいませ。幸ひ前の日が月給日に當りますから御返事がなければおいでときめて、昨日のおわびにもお好きな御馳走を澤山こしらへておまちしてをります。ではお詫び萬々その時に。さよなら。

十二 租忽の詫び

此の間お花の先生がお出で下さつた節、盛花のお稽古に今一つ水盤があるなら、一對にして活けて下さると仰しやつたので爺やを伺はせたのでした。早速お貸し下さいまして誠にありがたうございました。ところがどうしたのか風呂敷を解いてみますと、縁の所がほんの少し缺けてゐるのです。爺やの粗相からだといふことは明かなのですが、御承知のとほりあんな忠實な爺やのことですから私も黙つてゐました。とんだ不調法をいたしましたして誠に申譯ありません。重ねがさね私から御詫びを申上げます。

昨日京橋へ行つて、お借り致しました品物と似違つた物を買つてまゐりましたが、尊宅の上較べてみますと少しく形が大きいのです。お手馴れの品と違ひますので、さぞかし御不満に思召すことと存じますが、何卒これで御勘辨下さいませ。お願ひ致します。それからこの水盤を持参いたす爺やは、お借りした品だと思つてゐますから、その點どうぞ御含み下さいませ。いづれお目にかゝりまして、萬々申上げたいと存じますが、取りあへず手紙を以てお詫び申上げます。御寛恕のほど伏してお願ひいたします。かしこ。

十三 紹介を断る

弟御さまの御就職のことにて、山上の伯父に紹介をとのことでございしましたが、御承知のとほりあの伯父は、ほんとに頑固でございまして、さういふ紹介を一切受けつけないのでございませう。どうしたら宜しうございませうか。

先日一寸電話いたしましたら、堂々と正面から受取するやうに傳へなさいと、かう申すのでございませう。

どう御返事したものと、ついで打撃して居りましたが、あまり遅れては却つて失禮と、本意ない御返事差し上げます。どうぞ願ひからずお許し下さいませ。かしこ。

第十一節 催 促

一 縁談の催促

その後はいろ／＼と親身な御心配いたゞき、ほんたうに有難うございませう。

先日は光子があらは様へお伺ひいたしましたして、皆様にお目にかゝれて、ほんとに安心したやうに申して居ります。

御本人の英雄さまは、來春御休暇にて御歸京の折取りきめよりの思召であり、それに御應召のこともお考への上、職中舉式は見合せたいと仰有いますのを、おせき立て致しますのはいかゞかとは存じますが、年寄どもが氣短から、出来ることならお約束だけでも、節分前にと申しますので、誠に手前勝手とは存じますが、今一應あちら様の思召をお確め下さいまして、この上とも御力添へのほどを呉々も願ひ致したう存じます。かしこ

二 註文品の催促

先日カタログお送り下さいましてありがとうございました。就きましてはあの夏家具の中で、燈籠躰足大内行燈と、朱屏白紙張鼓卓提燈二張とを求めたく、先月二十五日右代價に送料を添へ、金何圓世の小冊替を同封、手紙にて御註文いたしました。が、いまだに品物が到着いたしません。どういふことになつてをりませうか、お手数ながら至急にお取調べ下さい。

いつもお間違ひのない貴店のこと、本来なら御催促などいたさないのですが、何分右の二品とも目の前にさし追つた盃蘭盆に間にあはせたく取急ぎ註文いたしましたものにて、それを過

しては用いたものでもございませうから、心急ぐまゝにおたづねいたします。何卒よろしく御願ひ申上げます。もし又季節のことにて註文の品質切の節は、最も似寄りのもの見立て、十日までにお送り下さいますやう、その時には御手数ながら、代金の過不足も同時に御申送り下さいませ。先は右御願ひまで。
さようなら。

三 返金の催促

その後皆さまお廻りございませんか。昨今は急にお暑くなりまして、身体に應へるやうでございませう。さて、催促がましく申渡りございませうが、六月末のお約束のもの、御都合いかゞでございませうか。

あの節もちよつとお耳に入れましたやうに、あれは今月早々搬込みの主人の保険料を、一時御用立しましたものゆゑ、遅くとも月半ばまでには御返金戴きたく、よろしくお願ひ申上げます。まづは要用のみ。かしこ。

四 仕立物の催促

先日はお世話様でした。その節お願ひ申上げました四ツ身の

單衣、急がないやう申しましたが、實はよそ様からお慶びのお招きを受けまして、この八日に参ることになり、子供にもあれを着せてゆきたいと存じますので、勝手ながらせひ間に合せて頂きたいのでございませう。肩あげ腰あげなど致さねばなりませんから、おそくも七日の夜までにはお間違ひなくお願ひ願ひたいたのですが、もし間に合はないやうでしたら、恐入りますがこの手紙着き次第、そのまゝで結構ですからお願ひ下さいませ。なほつけ紐はやはり藍色にしておいて頂きます。
ではくれぐれも日にお間違ひなきやう、お願ひ申上げます。かしこ。

五 女中に歸來を促す

此度は久し振りにて歸郷されたことなれば、御兩親を始め皆さまさぞ喜ばれたこととせう。友達なども久々に會つてお互ひに、どんなに珍しくなつかしい思をして居られるだらうと思ふして喜んでゐます。もつと長く暇を上げたのは山々ですが、丙の事情は御承知の通りなればさうもゆかず、三晩だけ泊つて歸つて来るやうにとの約束であつたのですが、今日でもう六日目になります。多分あたりから引留められて歸りかねて居るこ

とゝは思ひますが、いつもこんなことはなかつたので、どうしたのだらうと案じて居ります。色々用事も滞るし、坊やも淋しがつて居ますから、此の手紙受取り次第すぐ歸ることにして下さい。そして郷里の話を山々聞かせて貰ひませう。
どうぞ御兩親にもよろしく。では出来るだけ早くお歸りを待つて居ります。かしこ。

第十二節 紹介

一 醫師に紹介す

昨今は梅雨とは申しながら何となく降りますこととございませう。全く閉口いたしてをりますが、先生にはますます御元氣の御事とおよろこび申しあげます。

さて私の友達野原廣子さまを御紹介申しあげます。今年七歳の御子さまが顔色わがるく、瘦せてゆくのがこのごろとくに目にたつとこのことにて、私によい小児科のお醫者さまを御診察してほしいとのこととございませう。ついては先生にとくと御診察を願ひ、今後はずつと御指導によつて健康を進めることが出来ましたら、親御さんの御喜びだけでなく、私も大變うれし

いことに存じます。
近日その御子さまをつれて、病院の方へ上ることゝ存じます。がどうぞよろしくお願ひ申しあげます。かしこ。

二 知人を紹介す

青葉の風すがくしき季節と相成り候。打ちたえ御無沙汰のみ申上げを候へども、御機嫌よう入らせられ候や伺ひ上げまゐらせ候。

さてこの手紙持参いたされ候小野まつ子と申候は、私小學時代よりの友達に候。用件は仕事のことにて、貴重なるお時間をいたゞき候は申譯なく存じ上候へども、何卒御引見たまはりたくお願ひ申し上げ候。委しくは本人よりお聞きとり頂きたく願はしう候へども、本人及び家庭の事情は私よく承知いたしをり、確かなる人と存じ候まゝ、何卒適當なる仕事お考へいたゞきたく願ひ上げ候。甚だぶしつけにて恐れ入り候へども、本人の切なる希望にまかせ、この手紙したゞめ申し候。失禮のほど御海容下されたく候。かしこ。

三 子守女を紹介す

その後は思ひも寄らぬ御無沙汰にて、何んとも申譯御座なく候。さていつぞや御話の子守女、最早外様より御雇入ずみかと存じ候へども、この程に至り、漸く適當の者を見出し候まゝ御都合御伺ひ申上げまゐらせ候。かしこ。

四 履歴書同封にて友を推薦す

その後は御無沙汰申上げてをります、きびしいお着さになりましたが、お障りいらせられず何よりと存じ上げます。さて昨日××氏から承り及びましたことですが、御手許に勤めてをられました松島氏が、此度御退社になりましたさうでございませうが、それは事實でございませうか。もし事實にございませうならば、自然お手許に新しく社員が御入用に成ることかと存じます。就きましては私の同期卒業の人で、岡田種子さんといふ方が、前々からぜひ御社で働きたいと申して居られましたので、もし御採用下さいませうなら、此上もなきことかと存じまして、履歴書を添へて御都合をおうかがひ申上げます。岡田さんにとりまして、今度のやうな時は又とない好機會と存じられますので、兼ねて婦人の社員を御採用になりますやうなお話を伺つてをりましたの思ひ、甚だ僥越ながら、お口添へ

を致してお願ひ申上げた次第でございませう。岡田さんは私とは學校時分からの親友でございまして、才能も充分でございませうし、性格も至極堅固な方と信じてをります。御信用下されてお差支への無い方と存じますから、何卒御厚意をもつてこのこととお考への中にお入れ下さいますやう、くれぐれもお願ひ申上げます。かしこ。

—終—

昭和十五年七月二十五日印刷
昭和十五年七月三十日發行

定價 金壹圓八拾錢

著者 加藤清司

發行者 會澤眞佐

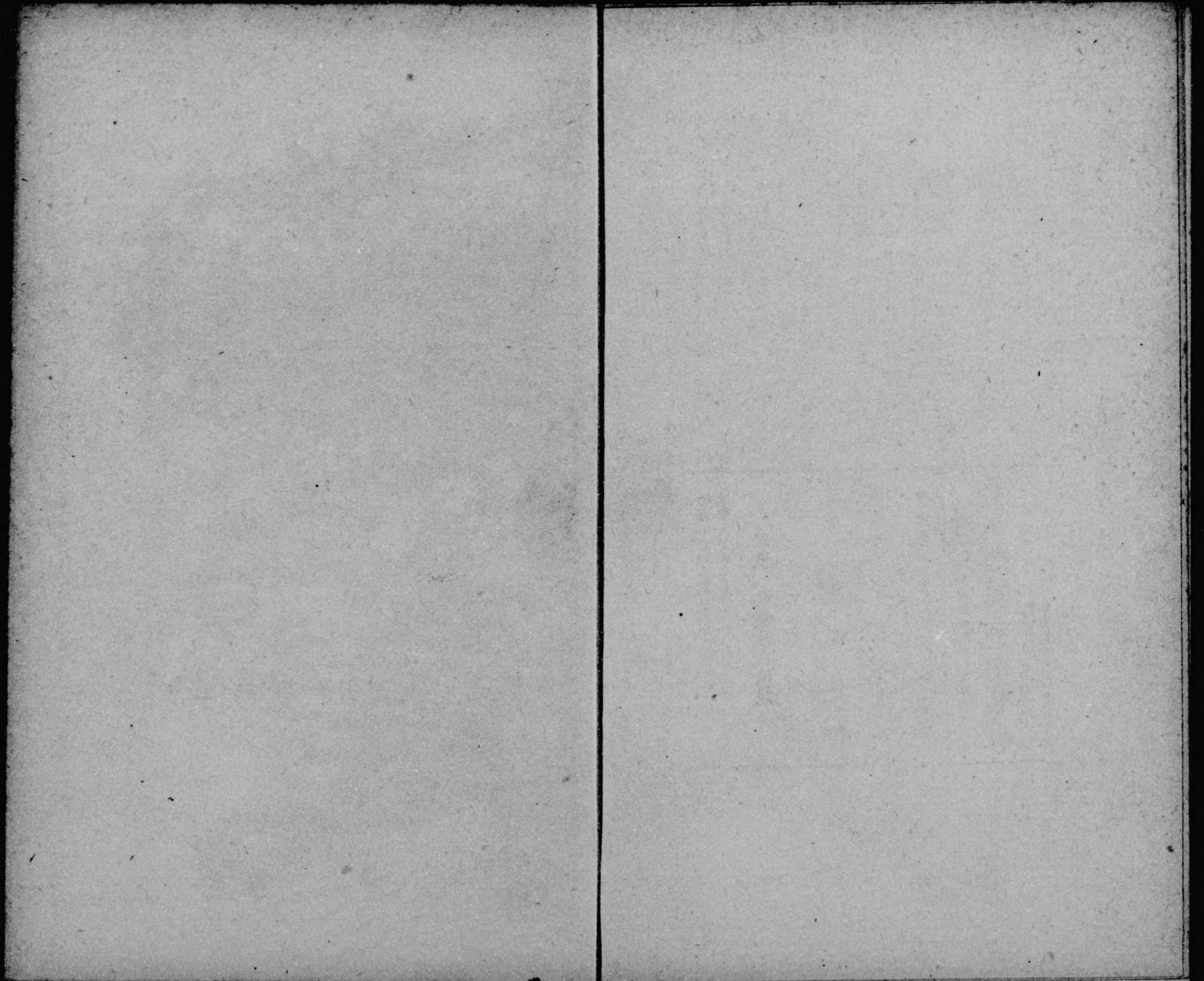
印刷者 西村由太郎

印刷所 西村印刷工場

東京市神田區猿樂町二錦華通

發行所 合資 内外出版社

電話神四二二九三番
總管東京九四六四七番



407
280